

祖国と人類の悲願

— 諸民族の聖魂 —

文学博士

戸田義雄 著

国文叢書

No.33

社団法人
国民文化研究会

祖国と人類の悲願

— 諸民族の聖魂 —

「はしがき」に代へて

— 小林秀雄先生と国民文化研究会 —

戸田義雄

「私は小林秀雄氏の文章から、ものの考へ方、人生の生き方といふことについて、数々の教へをいただいてゐる。非常な恩恵を受けてゐる。その意味では私自身「先生」と呼んで少しもをかしくない」（『小林秀雄ノート』『アカネ』十六号）。夜久正雄氏のかう言はれる通り、私も小林秀雄先生とお呼びしてきたし、これからもさう呼ばせていたゞく。殊に「学ぶわざと求道の手だて」については、アカデミズムの世界からは到底与へられない貴重な教へをいただいた。まだ、それを生かしきつてをらず、怠りのそしりを免れないが、唯今は「朝あしたに道を聞かば、夕ゆふべに死すとも可なり。」（『論語』）の、道をお教へいたゞいた心境にあり、たゞ／＼感謝の気持で一杯である。

小林先生の未発表の講演「『からごゝろ』と『いにしえごゝろ』」（追悼特集『諸君』昭和五十八年五月号）は、冒頭の本居宣長の「宇比山踏うひやまふみ」が、学問的方法論であるかのやうに、

従来、研究者の誰もが引用してきたが、それが実は宣長像を誤らしめたのだ、とさう強く批判することからはじめられてゐる。

「詮ずるところ学問は、たゞ年月長くうまずおこたらず、はげみつとむるぞ肝要にて、学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみか、はるまじきこと也。いかほど学びかたよくても(方法論がしつか)、怠りてつとめざれば、功はなし。また人々の才と不才とによりて(天分のあり)、その功いたく異なれども、才不才は、生れつきたることなれば、力に及びがたし……」である。そこで「己おの壯年より数十年の間、心力をつくして此記の伝四十四卷をあらはして、いにしへの学びのしるべとせり」との宣長の言に強く感応された表白が続く。こゝで、小林先生は、現代風に言へば、学問の方法論が問題なのではなく、問題なのは、「学問に立ち向ふ者の態度・姿勢」が一番、肝腎だ、といふ点を汲みとられたのである。「うまず、たゆまず心力をつくす」といふことがその核心である。「つくし方」そのものではなく、「つくす」といふ、文字通りの実践いかにかゝつてゐる。このことを明言された訳である。これは、宣長の発言から汲みとられた単なる言述ではない。小林先生御自身が実行なさった「学びのわざ」であり、道を求める手だて」であるだけに、実に重々

しい。そして、その言葉通り「うまずたゆまず心力をつくされた」結晶として、数々の業績を残された。その中で、一番、先生が大切なものとされたものを摘出して、その都度、講演といふ形でもって国民文化研究会にお与へ下さったやうに思はれてならないのである。幸ひに、生々しい御講義の際のお声は、「新潮カセット文庫」に収録され、不朽に残る企てとして完了してゐる。小林先生の国民文化研究会に寄せられた御気持は、今この面だけを省みても、尋常一様のものではない。そのことのもつ意味は、実に深く大きいと思はれる。

小林先生は、昭和三十六年（一九六一年）「現代の思想」昭和三十九年（一九六四年）「常識について」、昭和四十五年（一九七〇年）「文学の雑感」、昭和四十九年（一九七四年）「信ずることと知ること」、昭和五十三年（一九七八年）「感想—本居宣長をめぐる」の計五回も、八月の暑いさ中をいとはず、国民文化研究会が主催する合宿教室に御出講下さった。

しかし、国民文化研究会の前身と目される精神科学研究所主催の第三回「日本世界観大講学講座」の第三日目、正確には、大東亞戦争開始から半年後の昭和十七年（一九四二年）

五月十八日、「歴史と文学」と題し、御講義をたまはつてゐることを併せ考へたいのである。同研究所発行の当時の月刊誌『新指導者』（昭和十七年七月号）に掲載された「歴史の魂」は、その時の御講義内容である。『改造』（昭和十六年三月号、四月号）に連載された「歴史と文学」（新潮社版、小林秀雄全集第七卷・所収）とは、その題目は同じでも、内容はそのままでは必ずしも同じではないが、核心をなす論述は、相通じてゐると受けとれるものである。

この御出講を鎌倉の扇ヶ谷のお宅（新潮日本文学アルバム『小林秀雄』三二頁）に、当時、東大の一学生の身分でしかなかつた私が、あつかましくも、前以つて何の連絡もなく、言つてみれば非礼極まる姿で参上してお願ひ申し上げた。丁度、御法事でお出掛けになるといふ際だったのに、お部屋にお通し下さつて時間をさかれ、御出講を御快諾下さつた。その時の御心情は、今から省みても、不思議な御深慮であつたといふ言ひやうがない。

昭和十七年のこの御講義の核心と思はれる点は、

「歴史の本当の魂は、僕らの解釈だとか批判を拒絶するところにある。その動じないものが美である」。「本居宣長の『古事記伝』が立派なのは、彼が『古事記』の立派な考証

をしたといふところにだけあるのではない。あの考証に表はれた古典に対する驚くべき愛情は、無比のものである。宣長には、『古事記』の美しい形、美といふものが、全身で感じられてゐた。そこに宣長の一番深い思想がある、といふことを僕は感じた。」といふ表現に集約されてゐる。

こゝに、小林秀雄先生の最後のライフ・ワーク『本居宣長』の高著にまで結実する萌芽が立派にあることを知って、今更のやうに感銘を新たにす。

昭和二十年の末、本邦末曾有の敗戦といふ事態に直面した際の、言論界、思想界の混乱は、目に余るものがあつたことは、今尚記憶に生々しい。右顧左眄は通例の事象であつて、かのデヴィッド・リースマンが、世情の流行に浮動する主体的選択肢をもたない現代人間群を「ラジオの人間」とした有名な類別（『孤独な群衆』）の範疇が、日本にも見事に適中した時代であつた。

又、所謂、進歩的文化人なる者は、新しい歴史の見方、解釈として唯物史観、科学的社会主義に基づくと自負する社会観・国家観を絶対視し、不磨の大典のごとくに振りかざしたものだつた。

さうした事態の中で、小林先生が断乎として、戦前、「世界観大学」で御講説下さった右にみたやうな思想信念を吐露して下さった事実を想起すると、感動はまた一人ひとしほである。

それは、どこに披瀝されてゐるかと言ふと、敗戦後、間もない昭和二十一年の九月十五日に創元社から刊行された御著書『無常といふ事』の主篇の中に於てである。化繊紙で一〇四頁、四六版のごく薄い「百花文庫・9」、定価七円の小冊子だったが、干天に慈雨を得たごとく、又、暗夜に光明を得るとは、まさしくこのやうな読書体験をさすのかと、感動を久しくしたものだつた。

全体は、「当麻」「無常といふ事」「徒然草」「平家物語」「西行」「実朝」の七つの短篇から成つてゐるが、その中の、本題となる主論「無常といふ事」の中の左の一節をみれば、このことは明瞭である。

歴史の新しい見方とか新しい解釈とかいふ思想からはつきり逃れるのが、以前には大変難かしく思へたものだ。さういふ思想は、一見魅力ある様々な手管めいたものを備へて、僕を襲つたから。一方歴史といふものは、見れば見る程動かし難い形と映つて来る

ばかりであった。新しい解釈なぞでびくともするものではない。そんなものにしてやられる様な脆弱なものではない、さういふ事をいよいよ合點して、歴史はいよいよ美しく感じられた。晩年の鷗外が考証家に墮したといふ様な説は取るに足らぬ。あの龐大な考証を始めるに至って、彼は恐らくやつと歴史の魂に推参したのである。「古事記伝」を読んだ時も、同じやうなものを感じた。解釈を拒絶して動かないものだけが美しい。これが宣長の抱いた一番強い思想だ。解釈だらけの現代には一番秘められた思想だ（前掲書 十二—三頁 傍点・筆者）

繰り返すやうだが、戦前—戦中—戦後と終始、恒常の歴史観にまつはる思想信念を我々にお示し下さつてゐる。あの敗戦後の激動期に於てさへ、「歴史の魂」に推参する手だてを諄々とお教へ下さつた。当時の思想状況に照してみれば、余人の到底なし得るところでないことが分るといふもの。さうした小林先生の本然の思想が、既に敗戦前の昭和十七年に我々の「世界観大学」に於て、明確にお示しただけたことの意義は、そのよつてくるところ、極めて重大であると思ふ。考へれば考へる程、唯事たゞごとではないのだと痛感させら

れる。

『無常といふ事』の読書を契機にして、強くその思想に触発され、直接所属する学科ではどう思つてのことか、よく分らぬが、他学科の学生なのに、事もあらうに宗教学科の愚生に卒業論文を提出するといふ異例のことが私の奉職した国学院大学で起つたのである。

通常、本人がまともなコースをとるとすれば、このやうなことは破天荒な暴挙であるのに――。思ひ出すまゝに略記してみよう。「」内は卒論の主題。敬称略)。

「徒然草」(石川文夫、国文科卒。現・水戸県立第二高校・教諭)、「実朝」(渡辺誠治、国史科卒。現・千葉県立・実榎みちのぎ高校々長)、「本居宣長」(田畑作衛、国文科・大学院卒。

現・長野県立・阿智高校教諭)、「聖徳太子」(門屋光昭、国史科大学院卒。現・岩手県立博物館・学芸員)と言つた工合。

昭和三十八年七月、ヨーロッパ巡りでアメリカから帰国の際、ハーバード大学・留学中の私の後輩の信友、松本滋君(東大・宗教学科・同大学院卒、フルブライト・スカラシップでハーバード大学に留学、現・聖心女子大学教授、宗教心理学専攻の第一人者)に、彼の学位論文作成に当つて約束したことがある。それは、確か昭和三十六年の「朝日新

聞」元旦号に「これから本居宣長を書く」と小林先生が明言されてゐることを強く覚えてゐたから、雑誌『新潮』（昭和四十年六月号より）に連載中の小林先生の「本居宣長」掲載分を彼の許に送った。彼は、小林先生がその連載の冒頭で取りあげた宣長の遺言書にみられる、宣長と桜との一体視の関係を、当時、ハーバードで脚光を浴びてゐたユダヤ系の人格心理学者・エリック・エリクソンの提唱したアイデンティティ理論（その後、広く普及するに至った）で、宣長青年期のアイデンティティ危機の分析と併せ、見事にドクター論文を仕上げた。審査に当つた当時のロバート・N・ベラー助教授（マックス・ウェーバーをはじめとするヨーロッパ流の社会学を大成したアメリカ社会学の大立物、ハーバード大学のタルコット・パーソンズ教授へ『行為の総合理論へ向けて』等で世界的に著名）の高弟。現・カリフォルニア州立大学、パークリー校教授、彼の学位論文『徳川期の宗教』は、日本近代化論の実証的研究として秀逸。敗戦後、日本歴史学界への所謂・ライシャワー攻勢の一翼を荷つた。本会監事の加納祐五先輩が書かれた、『国文叢書。No. 31』『Belief that と Belief in』の標題は、「ベラーさんがある文章の中でこの言葉を使つてゐる」（同書二二九頁）としてをられる、「そのある文章」とは、ベラー教授の『宗教と社会科学のあいだ』（葛西実・小林正佳共訳・未来社）である。）が絶賛され、ハーバ

ード大学出版局から、同君の^{ph.D.}の論文が、その儘、英文『本居宣長』（昭和四十五年）として刊行されることを斡旋して呉れた程である。

実は、東大宗教学科出身者で^{ph.D.}をハーバードから取得したのは、松本君を以て嚆矢とする。G・H・Qのアドヴァイサーたりし恩師の東大・岸本英夫教授（東大図書館長を兼ねる。停年直前、上顎癌で死亡。『死を見つめる心』で毎日出版文化賞を受く。「死は別れである」の死生観の発表者として世上をにぎはした。）もT・H・メーソンの『神ながらの道』『神道神話の精神』の訳者として、その功多大、一〇六歳の天寿を全う。死去される三、四年前、曾野綾子女史とNHKで対談までなされた元・正則高等学校長・今岡一良先輩も、共にマスター・デイグリー。日本でそれを取得される手筈であられたのかもしれないが――。

確か四年余に亘る松本君の必死の努力もさること乍ら、彼の学位論文の結着は、小林先生の「本居宣長」にその根幹があると私は見てとってゐる。かくみてくると、国際的な学会での日本人の貢献、ひいては日本精神文化の紹介といふ面での小林先生の学恩は、知る人ぞ知るのみであつてはならない。この際、深く省みられて然るべきものと信ずる。

先生の実妹の高見沢潤子氏の『兄・小林秀雄との対話』（講談社現代新書）によれば、小林先生は講演が嫌ひであられたし、又、「一番親しい妹の自分が強いてと言って頼んでも、仲々お引受け」なさらなかつたことがはつきりしてゐる。さういふ性質の御講演に近い御講義をば、前後六回までも、我々のためになさつて下さつたことは、たゞ事ではない。それで、「尋常一様のことではない」と先述したのである。小田村寅二郎氏が、雑誌『新潮』—小林秀雄追悼臨時増刊号』誌上で「どうして二十年余にもわたり御厚誼を賜り、計五回（私は六回ととってもよくはないか、と先述）もの御出講となつたのであらうか。まことに不思議に思はれてならないのである。」と書かれたのは、本当に私共の心底からの同じ思ひを述べて下さつたものである、と私は感じてきた。

次に、数回に互る以上の御出講の中で、刮目すべきは、「信ずることと知ること」と、題してたまはつた御講義内容である。これは、先生の残された数々の珠玉の業績・作品の中でも、珠玉中の珠玉、これこそは結晶である、として後世に永くとどめる可く御発表なさつた最もよくコンデンスされた思想内容である、と思はれてならないのである。私独りの我田引水であらうか。

斯く申すには、左に述べるやうな理由があつてのことである。

(一) この時の御講義題目「信ずることと知ること」は、その後「信ずることと考えること」と改められ、『カセット・テープ』に収録されたが、左の文献では、終始「信ずることと知ること」で発表されてきてゐる。

(二) 昭和三十九年刊の一卷本『考へるヒント』（文芸春秋社刊）の中の「考へるヒント」の章は、「常識」にはじまつて「歴史」等を含め「福沢諭吉」でしめくくられる十三篇で構成されてゐる。そこには、「信ずることと知ること」は収載されてゐない。ところが昭和四十五年刊の文春文庫『考えるヒント・3』（文芸春秋社刊）では、その冒頭にこれが載せられてゐる。

(三) 昭和五十四年刊の『感想』（新潮社刊）の冒頭にこれが収載されてゐる。

(四) この「信ずることと知ること」の題名は、霧島でこの講義をなされた昭和四十九年の春のこと、福田恆存氏の主宰されてゐる「三百人劇場」で、小林先生からいちはやく小田村理事長が申し渡されたものである。当の小田村氏は、「この題名が意味するところであらうところの『重大性』に心のをのく気持」になつたし、また、「この題名の

内容が既に先生の御胸中では、総合的に把握し了へてをられる様にも感受出来て、私は、しばし先生のお顔をじつと見入ってしまった」と告白されてゐる。(前掲、新潮カセツト文庫「小林秀雄講演―信ずることと考えること―」に添付された小田村氏筆の「小林先生と志ん生」)。

この度、小田村氏に改めて私が伺ったところ、これまで先生が合宿教室でなさった講義の題名は、いづれもその発表間際になって、お決めなされた様に推測出来るものである。従つて、この時の様に半年近くも前の時期に申し渡されたことは、かつてなかつたことから判じて、先生のこの講義に込められた並々ならぬ思ひを、私も汲みとることが出来るやうな気がする。このことと併せて、私が付け加へたいのは、この講義が終つたあとで、小林先生に終始随行された文芸春秋の郡司勝義氏が、「実は小林先生は、講義の前の晩、宿舎のホテルで、私を前にしてリハーサルをなさった。」と、私にそつと告げて下さつたことである。

私はその時、この題目を初めて告げられた時の小田村理事長と同じ様に感嘆久しくした次第である。かうして、この御講義のもつ重大性は、他と比べて容易ならざるものが

あると痛感させられるのである。

(五) 先生の御逝去後、平成三年六月、弥生書房が『信ずることと知ること』を刊行したのは、先生の御遺族の御意志がなければ不可能と思はれること。

思ふに、以上のやうな先生の為され方は、他には見られぬことである。まことに以て不思議と言ふ可きか、たゞならぬ思ひ入れのあつての配慮としか受けとりやうがない。私はそこに、「信ずることと知ること」を凝視され、このやうな処置をなされた小林先生の御意志が伝はつてくる想ひで一杯なのである。

しかも、「信ずることと知ること」の中心になる論調は、小田村寅二郎氏が指摘されてゐるやうに、「科学万能の現代思潮に対する批判であり、それも、明瞭に、心理学などに煩はされない、魂といふものが人間にある。それなのに、そのまぎれもない事実を除外してゐることへの批判である。さうして、更に、全体にみなぎる小林先生の強い憂世の思ひである」(新潮カセット文庫「小林秀雄講演—本居宣長—」添附の小田村氏筆の講演ではなく講義)からの私の要約)。この魂の実感体験として、小林先生は、御講義の中で、柳田国男翁の少年時代のそれを、柳田翁自筆の「故郷七十年」から引用・言及され、さらに、このや

うな感性の持ち主である翁の学問——日本民俗学——は本物である、といふ意味のことを熱をこめて語られた時、その講義の席にあって、直接拝聴した時の私の感動は、今も息づいてゐる。ユリ・ゲラーの念力にはじまり、柳田翁の霊体験にまで語り進んだ「信ずることと知ること」の講義が終つて、各班別に分れ、語らひの時間に移った。その時、私の教へ子の岩切信一郎君（当時、国学院大学神道学科大学院生、現・東京文化学園高校・教諭）が所属した班で、極めて象徴的な事があつた。班長の呼びかけで、各自、小林先生の御講義の感想を卒直に述べ合つた時、東大の一学生が、「僕はあの講義を聞いてから、頭がぐらく／＼して何もまとまりません。」と告白したさうである。岩切君からの後日の報告であつた。それを聞いて、私は、私自身が東大講師でもあつたし、よく東大の学風を識つてゐる一人として、もつともだと思つた。それ程、小林先生の「信ずることと知ること」は、衝撃的であつたのである。

私は、小林先生のお話の中にでた柳田翁とも、又、柳田翁が「私の後継者は折口信夫だ」と常々申されてゐた、その當の折口博士とも、同じく国学院大学の神道学科（初め宗教学科、後に改称）教員として、格別、御厚誼を得てゐて、常日頃深く両先生について識

るところがあったから、私の受けたこの時の感動は格別のものではあった。

小林先生の御講義の翌日、「日本のいのち」の人類史的意義（本書の第三篇）と題して壇に上った小生の講義は、平生の考へを前以て、とりまとめた私自身の当時（昭和四十九年）の最新のものなのである。だが、はからずも、小林先生によって、「それで以て進め」と言った感じのお励ましを得たやうな不思議な感に打たれたことを告白せずにはをられない。その前夜、小田村氏から特別のお声がかかりで、小林先生をかこむ夕食の集ひにお招きを受けたのを御辞退致したのも、この感動を、いかにして明日に予定されてゐた私の講義に生かすか、独り夜、部屋にこもって思ひを深めたかつたからである。

○

山崎行太郎の『小林秀雄とベルグソン——「感想」を読む——』（彩流社 平成二年刊）は、その紹介文にも見えてゐるやうに、未完の長編「感想」（ベルグソン論）の独自の読みを通して、物理学のパラダイム・チェンジ（アインシュタインの相対性理論から量子物理学への転換を意味する。戸田・註）の中に、小林先生の批評方法の原理を見出した評論集として、劃期的なものである。私も熟読してその感を深くしたが、「このベルグソン論（未完の長篇

「感想」は、文芸評論家としての不動の地位を確立してのちの小林秀雄が、いわば最後の遺書のようなものとして書きつづけた長編の問題作である」（六七頁）とあるについては、私はすぐには同感出来ないものを感じてゐる。一步譲つて、謂はゞ未完の長編『感想』（『新潮』昭和三十三年五月号から昭和三十八年六月号まで連載。①から⑤。幸ひに私は国武忠彦氏から、この長編を一巻に綴ぢられたものをお借り出来た。）が、影の遺書のやうなものとするなら、表に出た遺書は、「信ずることと知ること」である、と私は申させて戴きたいのである。（このための論証に筆をさく力が現在の私の容態からは無理なので、他日を期させて戴かねばならないが。）

小林先生は、亀井勝一郎氏のアドヴァイスで、聖徳太子の『三経義疏』を読まれた。先生の御令妹が、

「兄は、……………太子のすばらしい高度の思想を読んでびっくりした。仏典を読んで燃え上がった太子の鋭い精神は、ただこれを正しく徹底的に考え、理解しようとして努力した」（高見沢潤子著、前掲書五〇頁）

と言はれる程に太子研究をなさった方である。そのやうな小林先生が、大著『本居宣長』

を完結された後、残る研究として、聖徳太子の研究を、国民文化研究会の我々に託された経緯については、夜久正雄氏が、実によく私共に書き伝へて下さつてゐる（『聖徳太子伝興講説 勝鬘經義疏の現代語訳と研究』下巻・所収「あとがき」大明堂刊、並びに『国文研叢書No.27、小田村寅二郎選集・学問、人生、祖国』三二五ページ）。すなはち、夜久正雄氏は、昭和五十三年八月に阿蘇で小林先生を囲んでの夕食の折に伺つたお言葉として

「聖徳太子は、日本最初の思想家だ。『義疏』といふ本は、外圧をじつと耐へて爆発するやうに、日本人があらはれた、といふものだ。太子を外国文化の影響に染まつた人、といふ人たちがゐるが、そんなものではない。あの人は本当の日本人だ。自分が犠牲になつて、歴史を作つたんです。だから、日本人はみんな太子を崇めてゐるんです。太子の苦しみが日本人にはわかるんです。それでなくて、どうしてあんなに皆んなが太子を憶ひますか！」

「太子の本当の姿は、まだまだ研究されてゐません。あなたがた頼みますよ。——太子はどうやって死んだんだらう。あの人に死ぬのがわからぬはずはない。」

この最後のお言葉は、独り言のやうであつた。そして、繰り返し繰り返し「太子のこと

を頼みますよ」と言はれたのである。

と。実に切々と記してをられのである。

以上の事は、現代日本最大の思想家、そして道の師とも敬慕申し上げてゐる小林先生の国民文化研究会との関係である。

このやうな尋常一様ならぬ深いえにしは、戦前の一高・昭信会―精神科学研究所の再生ともみられる、戦後における国民文化研究会なるもの、営みの本質が那邊にあるかを、如実に物語つて余りあると言つてよくはないか。私は、さう信じて疑はない者である。

この度、国民文化研究会の理事の末席をけがすに過ぎぬ老生のために、『国文研叢書』の一冊として、私の拙文が公刊されるに至つたことは、私にとって無上の光栄である。それが、誇張の謝辞でないことを言はんとして、小林秀雄先生とこの会との関はりについて、私なりに痛感してゐることを申させて戴いたのである。

目下、入退院を繰り返して、不調の底にある老骨の身をお案じ下され、一切、私の手を煩はさずに万事お手配下さつた小田村寅二郎理事長、長内俊平事務局長、そして夜久正雄先

輩には、何とも御礼の申し上げやうもなく、たゞく聖徳太子の「不請の友」なるみ言葉を実感させていただき、その有難さに感泣せんばかりの心境である。

本書全篇の編輯を引き受け、その労を惜しまれなかつた永藤武君（青山学院大学教授、『小林秀雄の宗教的魂』の著者）には、同君が国学院大学、学部、大学院、そして日本文化研究所に在籍以来、私が受けた、これまた別種の変らざる「不請の友情」に対し、今、改めて厚く御礼申したい。

本書中「すこやかにあれ」は、全編の構成上、やや異質の感もしないではない小論であるが、それは、「不請の友」（この「友」には、恩師、先輩、同僚、そして、ゆかりある友を含めさせて戴いてをる）の実態にふれた忘れられぬ思ひ出として収録させていただいた次第である。又、「宗教の旅」（本書の第二篇）の中に見える、スペイン、ポーランドの記述には、神社本庁編『神国の理想』（第六十回伊勢神宮式年遷宮記念出版）に所載の拙論「国家をめぐって―世界の民族と宗教―」と重複するところがあらう。それは、実質的な編者であり、神道界きつての思想家であるとかねてから尊敬申し上げてゐた葦津彦氏

が、本書に掲載された原誌の拙論をいち早く読まれ、それを底本にして書いて欲しいとのお話があつたことだったからである。記して謝辞とする。

尚、昭和四十二年（一九六七年）に敢行した第二回目の西欧、そして共産圏の東欧（ポーランド、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア）、かの六月戦争が終了した直後のイスラエル、シリア、レバノン、エジプト等への旅は、当時としては一種の冒険に近かつた。殊に、東欧共産圏への入国の「ヴィザ」は、入手したが、さて肝腎の「ヴァウチャ」が入手出来ず、生命の危険を覚悟で試みた次第。昭和三十九年（一九六四年）のソ連邦への旅では、インテリリスト派遣のガイドの目をかすめ、例へば、キエフ・ラボーラ（大修道院）の地下埋葬場や、モスクワの「カトリック教会」を探索するなど（国学院大学・日本文化研究所報・十七号・昭和四十一年十月刊「ソビエトでの見聞——宗教学情を中心として——」に発表。現・京都大学教授、園田稔氏が、研究所在籍中、テープから原稿化を作成、但し本書には未収録）危険の多いフィールド・ワークであった。これらを可能にしたのは、敗戦国民に与へられたにしては破格の待遇のロックフェラー財団の招きによる滞米二年間の学究生活の体験と、帰国途上の第一回・西欧歴訪がある。この間に得た異国語・異文化圏に

おける諸種の体験が、私のやうな生来、非力な者に或種の「強さ」と「自省心」を培って呉れたことが大きく働いてゐる。私の専門の「宗教言語の哲学的分析」の研究に道が拓かれたばかりでなく、一個の人間として、一周りも二周りも大きくして戴いたと思はれる。終りに、ロックフェラー財団に対し、消えぬ恩義をかうむったことをここに深謝したい。

(平成三年十一月廿五日 記)

目次

「はしがき」に代へて——小林秀雄先生と国民文化研究会——

第一篇 若者に語る——今日の宗教の意味

第一章 文化的精神共同と宗教的統一……………29

第二章 米・大統領就任演説の「喚起」……………35

第三篇 独立宣言と神……………40

——今日の日本の宗教事情と照応して——

第四章 国家構成の求心力と宗教……………45

第五章 栄光の冠と破滅の冠——民族の怨念について……………52

第六章 “怨念”を出で“寛容”の宗教へ……………58

第二篇 宗教の旅―祖国と世界

第一章	護国の英霊を祀るシュライン……………	67
第二章	ベレムの塔に見る軍神「マリア・イエスの聖母子像」……………	73
第三章	スペインの統合とカトリック……………	82
第四章	スペインの民主化とカトリック神父……………	95
第五章	チェコ民族自決の伝統……………	106
第六章	チェコの国民主義とフスの宗教改革……………	116
第七章	ポーランド民族運動の拠点「カトリック教会」……………	126
第八章	祖国よ生きてあれ——ポーランドの教会復興——……………	139
第九章	祖国なきところに宗教はあるか——キュリー夫人の生家を訪ねて——……………	150

第三篇 「日本のいのち」の人類史的意義……………	165
第四篇 『国民同胞』誌から——戦後日米の宗教思想にふれて——	
第一章 アメリカ合衆国・愛国者の日……………	201
第二章 自国サディズムの典型——極東文化裁判としての教科書検定訴訟——……………	213
第三章 明暗二態——歴史改定主義の重大な影響——……………	225
第四章 「神の死」の思想——東と西——……………	232
第五章 聖徳太子・親鸞の信仰系譜——故 ^こ 我 ^が の怨念と本然我の執意とをめぐって——……………	248
第六章 日本人の感性は衰滅したか——捨命の宗教を思うて——……………	256
第七章 親切さと不親切さの吟味……………	263
——オリエンテーションとオリエンテーリングの相違から——	
第八章 すこやかであるために——健康法あれこれ——……………	271

第五篇 天皇陛下と現今の日本

第一章 日本人の「精神生活」……………281

——現代における実態とその問題点——

第二章 皇帝戴冠式と天皇即位式……………297

——ネパール王室戴冠式に参列して彼我の意義を省みる——

第三章 大嘗祭——伝統の秘儀の発見と創生……………323

附・奉祝歌五首……………332

あとがき……………334

第一篇 若者に語る——今日の宗教の意味

——マルクシズム・キリスト教・シビル・レリジョン・国民宗教・ビヘービアリズム・ユダヤ教・神道——

(編者註) 本篇は、「若者への手紙——いま宗教を考へる」

との題で、『中外日報』に昭和五十六年一月から六月にかけ連

載されたものである。

第一章 文化的精神共同と宗教的統一

第二章 米・大統領就任演説の「喚起」

第三章 独立宣言と神

——今日の日本の宗教事情と照応して——

第四章 国家構成の求心力と宗教

第五章 栄光の冠と破滅の冠

——民族の怨念について——

第六章 “怨念”を出で“寛容”の宗教へ

第一章 文化的精神共同と宗教的統一

今日の世界は流動してやまない。そこに固定した現勢図を作ることはむづかしい。しかし、国家、社会を動かす原理としての思想に焦点をおくと、マルクス主義と非マルクス主義の二つに分けられると言ってよいであらう。かうした分類をした方が、世界を理解するに有効だと私が考へる理由はあとではつきりしてくる。

中国の毛沢東主義も、又、現在の毛批判主義も、根源的にはマルクス主義の域を出てゐないし、ユーゴスラビアのチトー主義（チトー大統領の死後も路線は継承されてゐる）も同じで、大きくは修正マルクス主義と呼べる。従つて、正統と修正の別はあるにしても、大枠はマルクス主義である。

一方、非マルクス主義は自由主義陣営の根幹をなしてゐる。しかし、この自由主義も、国家への根付き方によつて異なつてをり、完全な議会制民主主義をモデルとすれば、お隣の韓国は、マルクス主義国家である北朝鮮との深刻な緊張と対決下にあつて、強く韓国の

土着主義を余儀なくされた。それ故に独裁主義を加味した一種の自由主義の変形・過渡的形態と見て誤ちはないと思はれる。

議会制民主主義の本家・本山と目されるイギリスでは、日本の知識人が民主主義の不可欠の要請のやうに安易に考へてゐる、かの「政教分離」「信教の自由」はどうなつてゐるのかと見てみると、事實は全くこれと反対の現象、つまり「政教一致」「イギリス国教会を中心に掲げたところの国教主義」となつてゐるではないか。こんな自明なことを棚上げして、まことしやかに議論をしてゐる日本の教育界や言論界はをかしくてならない。

その国教主義がたまらないと言つて、脱出したメイフラワー号乗船の父祖達によつて建国されたと伝へられるアメリカ合衆国は、さてどうか。近々、行はれるレーガン氏の場合ではつきりするだらうが、大統領の就任式においてはキリスト教儀式の体裁をとつてゐるのである。バイブルに手をのせ宣誓するといった姿態は、くつきりとブラウン管に写し出されるだらう。国会や軍隊には、キリスト教各派の牧師、それにユダヤ教のラビがついてゐて、儀式は彼らによつて順ぐりに行はれる慣はしである。ところが仏教徒も多くなつてきたので、僧侶を加へないのは片手落ち、公正を欠くではないかと、強い要請の声が上が

つてゐる位である。

この合衆国の中の州によつては、いまだにダーウインの進化論を教へることは公立学校では禁じられてゐるところがある。言ふまでもなく、人間は猿から進化した動物だといふのでは、創造主である唯一の神が、人間を造り給うたとするキリスト教やユダヤ教の教説に反する。だから進化論は禁ずるといふのだが、それでは、自由主義、民主主義の一番大切な条件である「思想の自由」はどこにあるのかと、改めて聞いてみたくなる。

現在の学会で社会学を代表する大立物と言つてよいのはハーバード大学のタルコット・パーソンス教授である。彼の一番弟子で、俊秀をもつて鳴り響いてゐるロバート・ベラ博士（加州大学バークレイ校）は、アメリカ社会におけるキリスト教の役割に着目して、それが諸宗教の合一性への志向をもつてゐるところから「シビル・レジョン」といふ語を新造した。日本では、これを文字通り「市民宗教」と訳してゐるが、私は日本人の思想の脈絡を考慮して「国民信仰」と訳したらよいと思ふ。シビル・レジョンには、宗教的合一性に加へて、社会的統合の機能が考へられてゐる。

古くは小泉八雲が愛着した日本文化を彩る基底の宗教的色調、近くは、かのカトリック

哲学者のフランス人ガブリエル・マルセルが評論家の小林秀雄氏と対談した際、期せずして意見の一致をみた「あらゆる日本文化の根底に神道がある」(読売紙上)といった際、この文脈でとりあげられた広義の「神道」こそは、ベラ流に言へば、日本宗教の合一性と、社会的統一性への志向を顕著に具現してゐる「国民信仰」ではないのか。私は、この語をもって、日本人の宗教意識の基底をなす「関係枠」ととつてゐる。

そもそも、アフリカ北西海岸のマグリビ(アラビア語で「西端」を意味する)のモロッコから、ジブラルタル海峡を渡つて、イベリア半島に上陸し、更に半島内陸部へとイスラムが侵入した。一例をあげると、スペインにおけるイスラム支配の中心地、ゴルトバの町はイスラム文化の輝かしい遺跡を今に残してゐることで知らぬものはない程である。このことから分かるやうに、一時はイスラム宗教圏のスペインであつた。そこで、スペイン国内で、又、ピレネー山脈を越えたガリアの地から入つた征討軍によって、イベリア半島からのイスラム・アラビア人追放戦がはじまつた。七三一年にトゥールとボワティニの間で初勝利を得、一四九二年にグラナダを攻略して止どめをさした。かくて、イスラム・アラビア人は永久に地中海沿岸の諸地域に押し戻されたのである(ヘルベルト・ヘルビック

『ヨーロッパ中世史の基本的諸問題』一九六七。

この長い戦の中で白人の武装集団は、非イスラム、つまりキリスト教を共有するが故に、吾々はヨーロッパ人だといふ意識を共同にしたのである。ヨーロッパなる意識の成立は、イスラムと、イスラムでない宗教、即ちキリスト教との緊張関係の中で出来上がったのである。

イタリアの歴史学者フェテリコ・シャポーは、『ヨーロッパなる観念の歴史』（一九六一）の中で、「ヨーロッパ人はキリスト教徒である。キリスト教、キリスト教団、キリスト教民族といふ言葉は至上のものである」といふフリッツマイヤの章句（『キリスト教とヨーロッパ』一九三一）を引用して、「キリスト教的宗教要素とその信仰の必要性は、ヨーロッパ共同体の基礎をなすべきものである、文化は確かにあるが、それは∧宗教∨の中に織り込まれてある」と明言してゐる。

シャポーの発言は、宗教的統一感が文化的統一感、国家的統一感、そして精神的共同体の形成の基礎となることを指摘した点で、今日のおかれた日本の宗教情勢を考察する上で貢献するところが多いと思はれる。

私が憂へるのは、「教団も小国家なり」とするイギリスのラスキン流の主張に基づいて、「政教分離」「信教自由」の原則を、本来の政治国家・日本と小国家・教団との間の分裂と緊張関係において把へやすくする思考が瀰漫しつつある世相に対してである。それは、政教分離主義といふ、まさにステレオタイプの「教条主義」に感銘し、シャポーの断言してやまないところの、そして併せてペラの言ふ、真の「シビル・レリジョン」、国民的宗教意識の基盤である「国民信仰」を分裂させ、果てはそれを喪失、破壊することによつて、文化的、国家的精神共同体の志向を目ざすどころか、逆にこれを弱体化せしめるといふ、マイナス方向に作用することにならう。この儘で、歯どめがかからなければ、日に日に国益主義を優先させてきてゐる複雑な国際社会の荒波の中で、「日本丸」は完全に難破することだらう。

私が今日の世界を、マルクス主義世界と非マルクス主義とに二分することからはじめたのは、国際的政治力学の見地から、事実、事象に密着して思考をおしすすめると、これら二つの緊張関係から把へられる地勢図が、もつとも事態を明瞭にすることになると切に思ふからである。

次は、かうした緊張関係を涌出した張本人のドイツ系ユダヤ人マルクスから筆をおこすことにしよう。

第二章 米・大統領就任演説の「喚起」

カール・マルクスから筆をおこすことで、この稿を続けることを前もって書いておいた。ところが、前回の終はりに書いた「政治と宗教」に関連する重大なニュースが入った。それを始末せずには前に進めぬ気持ちが強くなったので、それにふれることにした。

アメリカのレーガン内閣が発足して間もない一月二十六日の時事通信によると、ホワイトハウスのブレイディ報道官は、イランから帰還した人質の五十二人のうち十二人は精神的に可成り参ってをり、人質の多くがすぐ仕事に復帰できるかどうか心配な見通しだと報じたとある。

一方、レーガン大統領は、同日、元人質もとの勇気をたたへ、この生還を神に感謝するたため、一月二十九日を「感謝の日」とするといふ上下両院一致の決議に署名した。同大統領

は署名にあたって、「米国民のすべてが教会の礼拝に参加するやう」呼びかけると共に、「昨年四月の人質救出作戦で死亡した八人の米兵にもささげられるものである」と述べた、と報じてゐる。

つまり、八人の死亡兵士の英霊を供養すると共に、五十二人の人質の生還を感謝する集ひを教会でなすやうにと、アメリカ全国民に訴へたのである。

「神に感謝し」「神の前で英霊をなぐさめる」といふ場合のその「神」とは一体いかなる神なのか。礼拝の場所は「チャーチ」(教会)とあり、ユダヤ教の宗教施設「シナゴグ」でもなければ、イスラームの「モスク」でもなく、モルモン教の「タバナクル」(幕屋)でもない。まして、仏教のテンプルでもなく、英霊をまつるシュライン(オハイオ州でその典型を見たことがある)でもないとなれば、これは明らかにキリスト教の教会であると言はなければならない。

キリスト教会に集まって、感謝と慰霊を捧げる場合の礼拝対象は、言ふまでもなく、キリスト教の神である。

すると、レーガン大統領のこの呼びかけは、一方的にキリスト教会でのキリスト教式サ

ーヴィスを強制したことになるのであつて、政教分離、信教自由の原則に反するのではないか、といふことになりかねない。

しかし、どこからもそんな異論はあがってゐない。問題はそこなのだ。私はそこに前稿でふれたアメリカでの「シビル・レリジョン」(市民宗教)の実態を改めて思ひ見る気がした。

レーガン氏の大統領就任式日 (Inauguration Day) は去る一月二十日であつたが、この原語の語幹は古代ローマの卜占官を意味する「アークグアー」(augur)であり、「鶏の鳴声、挙動、天体の現象など」によって吉凶を占ふ僧官なのである。おそらく、古代ローマ皇帝の戴冠式執行日は、王室所属のこの卜占官によって期日が占はれ、その結果、決められたものであらう。その伝統を今に伝へる言葉をば、ヨーロッパ伝統からの離脱によつて新生をはかつたとみられる、アメリカ合衆国が維持してゐることは興味深いではないか。四で割りきれぬ年の翌年の一月二十日と卜占によつてきまつてゐたから、一九八一年一月二十日となつた訳である。

レーガンの大統領就任演説は、十九分五十三秒であったが、結びは「アメリカが保持する根源的な力と、アメリカ国民のもつ英雄精神」を喚起する言葉であったと報じられている。このことを報じた「タイム」二月二日号は、「喚起する」と訳される言葉にエポケーション (evocation) といふ英語を使つてゐる。この英語は、現実に人々の記憶、感情などを喚起するといふ意味と、今一つ、死者の霊を招魂する、降神をはかる、の二つの意義をもつ言葉なのである。この両義にわたる「エポケーション」といふ言葉を用ひた「タイム」の記事は心にくいばかりである。

といふのは、レーガンが、アメリカ国民の英雄精神をこの時点で喚起するに当たつて、今は亡き第一次世界大戦の一英雄の残した日記からの一節を引用したからである。一人の英雄の魂を招きよせるが如くに。

「タイム」は、レーガンの演説の美点は、その簡潔さと、祖国アメリカとアメリカのもつ可能性に対する絶対の信におかれてゐたと指摘し、次のやうに述べてゐる。

避け難い没落の運命をたどりつつあると人から信じ込まされる程、今日のアメリカは決して弱体ではないと、はっきり言及した上で、ブライベート・マーティン・トレプトウと

いふ名の一志願兵が、一九一八年六月二十八日にヨーロッパ戦線で戦死した時、血だらけになった制服の彼のポケットから発見された日記の一片を、レーガンは声高に読み上げたと。そこには次のやうな言葉があった。

「アメリカは勝たねばならぬ。そのために私は働き、いのちを守り、時に身を犠牲にし、私は耐へ忍ぶ。闘ひのすべてがこのたった独りの私の肩にのしかかったやうに責めを引き受け、私は心を醒めて戦ひ、私のあらん限りの力を尽くす。」

レーガンはこの就任演説を専ら一人で起草したさうであるが、カーターが旧約聖書（ミカ書）に見える予言者ミカの言葉「へりくだって神と共に歩む」を引用したと著しい対比がここでみられた。テヘラン人質解放に接した彼が、その瞬間に発した「全能の神（Almighty God）に感謝する」の挨拶、カーター前大統領が、故郷のジョージアの町を雨の中、吾が家に急いだ時、「ジョージアに帰れて嬉しい。私はこのことを神（God）に感謝する」と語った言葉、そこに一貫するものは、超絶的な神、大文字でゴットと記される「神」信仰である。

テヘラン救出作戦で死亡した兵士の霊も、このゴッドの前で全国民的規模で祀られてし

かるべきだとする通念——これこそがアメリカの市民宗教なのであらうか。私はここで、改めて、かうした「神信仰」を微細に検討する必要を感じたので、そのことを次回でふれたいと思つてゐる。

第三章 独立宣言と神

——今日の日本の宗教事情と照応して——

神の名を冒頭に掲げたアメリカの「独立宣言」は、一七七六年七月四日、最初のイギリス植民地十三州が批准し、同九月にニューヨーク州が批准して公布せられた。

内容は三つの部分に分れるが、その第一部には、その後、放射線状に影響力を世界に及ぼすことになる十八世紀の政治哲学が述べられてゐる。問題の「神」の語は、そこに見えてゐるから、原文と訳文の両方をあげて検討することにしたい。

【原文】 that all men are created equal, that they are endowed by their creator with certain unalienable Rights, that among there are Life, Liberty and Pursuits of Hap-

【訳文】(われわれは次の真理を自明のものとして認める) 即ち、すべての人は平等に創られてゐること。彼らは、彼らの創造神によって、一定の譲るべからざる権利を与へられてゐること。それらの中には、生命、自由、そして幸福の追求が数へられること。

右の原文には creator (創造神) とあり、単に god (神) とは書いてないのである。この「創造神」は、ピューリタン(普通「清教徒」と訳す)の宗教精神、および信条に限定された神の名だとするのが、これ迄の通説であつた。果たしてさうなのだらうか。改めて吟味してみると、この通説に疑問をさしはさむ余地はない訳ではない。

その第一は、ピューリタン系英国人でないオランダ系人の多いニューヨーク州が、何の問題もなくこの「独立宣言」文に批准してゐることがあげられる。

第二には、「宣言」文の起草者であるジェファソンは神を畏れるキリスト者ではあつたが、決してピューリタンではなかつたし、彼の起草文を全面的に承認した初代大統領のワシントンも、二代大統領のジョン・アダムスもピューリタンの厳しい人間ではなかつた。

ハーバード大学のアメリカ研究室で一年間、専らこの問題に取り組んだ犬養道子は、右にあげた二点に加ふるに、今一つの理由、即ちアメリカ・ピューリタニズムが、既に新大陸の事情に順応して変化してゐること。すなはち自由主義がかった「別の清教徒主義」に変化してゐる点をあげてピューリタニズムがそのままイコール、アメリカ精神とするこれ迄の単細胞的な解釈を批判したのである。彼女の批判は、ピューリタニズムのもつキリスト教の嚴律主義と、相互容認の信教自由の精神とが共存し得たやうな宗教的土壤が、既にアメリカの建国当初から宗教多元主義としてあつたといふことを強調したかったのである。(『アメリカン・アメリカ』二五一頁以下)。

ここでピューリタニズムが宗教嚴格精神の権化のやうに認識される事情について、少し説明する必要がある。

十六世紀の中頃、ヨーロッパ大陸からイギリスに伝えられた宗教改革者・カルヴィンの教へ「神は何よりも心の誠実と公明を求め給ふ」にそつて、宗教的良心を覚醒させ、一つにはローマン・カトリック、二つには国家権力と癒着したイギリス国教会(アングリカン・チャーチ)とに対して一切の妥協を許さずに、敢然とこの二つの既存のキリスト教団に

不服従を宣言したへ非国教徒へに名付けられた名称がピューリタンなのである。字義通りにはへ純粋主義教徒へだが、「清教徒」の翻訳語で通用してゐる。

さて、犬養道子の言及に戻ると、次のやうにある。

「互ひの宗教的信条を互ひに容認しあはうと言ふことは、互ひが信仰箇条こそちがへ、互ひに唯一神を認めてゐたことを前提とする。…中略…そして神の存在を認め信ずると言ふ一点になつた時、英国系もスカンヂナビアもフランスもスペインもオランダも一緒だつた。…中略…死なずしていつも在る絶対唯一存在の神を認める——殆どすべての入植民、移民はそこにおいて共通してゐた。カトリック、アングリカン、ユージュノット、ルーテル派、クエーカー、ピューリタン、…のちにはユダヤ教のユダヤ人、イスラムのアラブ…。さればこそ、あの冒頭の神の名を置く「独立宣言」は、アメリカの地の上で普遍的な価値を持ちつづけ、いかなる背景、国籍の移民植民相手にせよ、彼らの心を灯もて、つねに照らしつづけて來ることが出来た。」（前掲書、二五六ページ、傍点・筆者）

「独立宣言」の起草者、ジェファソンは、その起草前に、彼の唯一書『ヴァージニア覚え書』（中屋健一訳、岩波文庫）の「質問第十七」の中で、ヴァージニア州の友邦、ペンシル

ヴァニアとニューヨークの二州には、無限ともいへる程の宗教的寛容の精神があり、それによつて他の州に見られない程の高い社会的調和が保たれてゐることをあげて、わが州でも政府による特定宗教支持制度、宗教的奴隷制度をやめ、かうした専制的な諸法律をとり除かうではないかと主張してゐる。かうした宗教寛容精神の持ち主によつて起草された「独立宣言」であるといふことは、こと宗教に関する犬養説を承認させるに充分だし、更に犬養説を補足するのに有効な資料ではないか、と改めて調べてみて私は納得がいった。

ただ、ここで見逃し得ない問題点がある。それは何かといふと、アメリカ「独立宣言」以降にみられる「宗教多元主義の容認と保証」といふ、不磨の大典のやうに考へられる寛容の精神が「創造の神といふ唯一絶対の神」を掲げる諸宗教に限定されてゐるといふことである。このことは重大で熟慮せずにはすまされぬ。さればこそ犬養説は、カトリック、アングリカン、ユージュノート、ルーテル派、クエーカー、ピューリタン、ユダヤ教、イスラムをあげるにとどまつたのである。これらは、事新しく言ふまでもないが、すべて「創造の唯一神教」の枠内にあつて姉妹関係にある教派宗教ではないか。それがアメリカ共通の市民宗教であるといふのである。すると、ひるがへつて、日本の「市民宗教」（「国民信

仰」とした方が妥当だといふことを前々回に述べた)は、日本建国の宣言文とも受けとれる『古事記』以来、連綿としてある「日本教としての神道」といふことになることを、この辺で比較文化の観点からじっくり考へてみる必要が生じてきたと思ふ。

さう思つてゐた矢先、はからずも二人の外国人学者の手になる研究書が、期せずして、揃ひも揃つてこのことを明らかにすべく、メスを入れてゐるのに強い刺激を受けた。国際基督教大学、D・B・ピッキン助教授の英文『神道—日本の霊的基層—』(講談社インタナショナル)とアルバータ大学C・カルダローラ教授の英文『キリスト教—日本の道』(E・J・ブリル)の二著がそれである。

第四章 国家構成の求心力と宗教

ただアメリカの名で通るこの国の正式の名称は「アメリカ合衆国」である。その名の通り、多数の人種・衆人が集まり、合一して出来た国家である。かうした国家は「人造国家」と呼ぶにふさはしいと言つてのけたのは、ベスト・セラ―『ソビエト帝国の崩壊』を

書いて一躍有名になつた小室直樹氏である。彼は同じカッパ・ブックスの『アメリカの逆襲』（昭和五十五年十二月刊）の第四章でこの語を「自然国家」に対比して用ゐてゐる。

この場合、彼の頭にあつた「自然国家」は日本である。気がついたら、ある家族の中に生まれてゐて、ごく自然にその家族の一員として振舞つて大きくなり、家を担つてゐた。そんな具合にごく自然に、家が拡大して国家になつたのが日本である。そこで日本における倫理の在り方を「家国」の説で説きあかさうとした広島文理科大学（今の広島大学）の西晋一郎博士のやうな学者がかつてをり、それで著名になつたやうなことのあり得た「自然国家」なのである。そもそも日本といふ国は。

ところが、ひるがへつて、「人造国家」となると話はちがふ。同じ「人造国家」でもレバノン国は、「モザイク型」国家と呼ばれる位、内に収斂する力が弱い。何時、モザイクの一つ一つがはがれて了ふかわからぬといふ分裂、解体の虞（おそれ）に常にさらされてゐる。ところがアメリカ合衆国には、かうした遠心力に立ち勝る求心力が働いてゐる。この求心力は何かといふことは、今日の日米関係を考へる上で、ゆるがせに出来ない問題である。

私は昭和三十七年秋から一学年度、ハーバード大学で「ポースト・ドクトーラル、スカラー」といふ身分（アメリカだけではなからうが、このステータスといふのが大切なのである）をもらひ、実質はロックフェラー財団・在外研究員として勉強してゐる時、大学のあるケンブリッジ市が運営する「アメリカ化のための学校」に出席して皆勤賞をもらった。こんなことは別に自慢するにあたらないのだが——そして当初、教育委員会と教師から「何故今更、あなた如きがこんな学校に……」といふかられたのだが、その時、「アメリカのやうな、世界から集まった人種の坩堝のやうな国を構成する、その一人ひとり、どのやうにしてアメリカ人として市民権をとるのか。連邦政府の側から言へばとらせてやるのか。そのところを単に観察するのではなく、体験したいからなのだ——」と、はっきり言つてのけて参加した。探りあてたかったのは、実は他ならぬこのアメリカのもつ求心力が何であるのか、といふ一種の謎解きだったのである。

テキストは英文『アメリカ憲法』と『彼らがアメリカを偉大にした』（マクミラン社）であった。この二冊を用ひて、英文字のAの字も知らぬ移民に、会話と筆記力と、そして偉大なアメリカの市民になることの誇りの気持ちを育てようといふのであることがわかつ

た。しかし、これはあくまで初歩の初歩であり、よきアメリカの市民として社会生活を享受するために欠かせぬのは、国旗に対する忠誠と、市街地のブロック（一区画）毎に加入してゐるといつてよい、何がしかの教会（主としてキリスト教会）への所属なのである。だから、社会階層が上がると、それに相応したブロックへ住居を移し、それと同時に宗旨をかへるのである。宗旨をかへるといつても、もともとユダヤ教徒やイスラム教徒でない限りは、まづ同じキリスト教内の分派（セクト）であるAからBへと「教会がへ」をするのである。厳密には、アメリカのプロテスタントは勿論、ローマン・カトリックもセクトとは呼ばれない。「デイノミネーション」と呼ばれる。しからば、「デイノミネーション」はどこがセクトとちがふのか。

例へば会衆派（組合派）、長老派、洗礼派、クエーカー派、再洗礼派、ルター教会、聖公会など、どの宗派もヨーロッパにその起源をもつ。しかし、アメリカで、この宗派名で呼ばれるのは、ヨーロッパにおけるこれらの各派の歴史的伝統とはっきり切り離されてゐる。

つまり、アメリカといふ新天地で、この天地にふさはしく新生したキリスト教の教派で

あるから、これらはヨーロッパ型のセクトではない。アメリカ型の新生の教派である。そこで、そこを区別するためにセクトの名を用ひずに、「デイノミネーション」と言ふのだが、語義的には、この語はやはり「教派」を意味してゐる。

このデイノミネーションをとらへる上で一番大切な点は「天なる創造の唯一神・その神の子・イエスの言行」の主たる記録である新約聖書と、併せて旧約聖書を絶対視し、「聖書中心主義」(Biblicism)となつてゐることだ。

つまり、聖書の一字一句を真理としてうけとめ、それを信仰の中心に据ゑる。このやうな聖書の絶対視は、各々のデイノミネーション内で神学を無視し、デイノミネーション間の神学論争を避けるといった壁を造り上げ、固有の反知性的、非合理精神が強く表に出てくることになりかねない。結果は、各々のデイノミネーションのもつ神学上の特色もなくなつてしまひ、大した相違がなくなる。

そこで、聖書を絶対視しながらも、各々の特色ある神学上、信仰告白上の意識を自覚めさせようとして生まれた運動が「根本主義」(Fundamentalism)なのである(邦訳名『アメリカの宗教』S・E・ミード著、野村文子訳、第七章参照)。

このアメリカ根本主義で最も注目すべき点は、聖書を絶対視するにあたって

(一)創造主による人類の祖先の創造といふ説(『旧約』)

(二)『旧約』の思想の中、これに含まれた「食物規定」と「割礼」の掟(ユダヤ教徒の保守派が厳格に守る)といった、いまはしい部分をきりとったポーロの新約聖書解釈の思想。

これら二つを、かたくなに守ることを重視しなければならない。この(二)については、かの社会学者、マックス・ウェーバーが『古代ユダヤ教』(宗教社会学論集第三)の「まへおき」で冒頭にふれてゐる。

さて、アメリカ・デイノミネーション宗教の成立、その根本主義を省みると、実は、アメリカの建国が、ユダヤ人のイスラエル建国と見事に照応するのであって、両国の建国神話とそれに続く史的展開とに密接に結びついた聯想を可能にするところに生じたものであることがわかる。(去る三月二十九日のフジテレビ、竹村健一氏との対談の中で、前記の小室氏がこのことを発言したが甚だ出色だと思ふ)

わかり易く私なりに次頁のやうに図示してみる。

4	3	2	1	
<p>イスラエル史</p> <p>アブラハムが神の召命によりメソポタミア南部、ウルを発してカナンに向かふ</p> <p>カナンの地が干ばつのためエジプトへ脱出</p> <p>エジプトを脱出してカナンの地へ移動、定着、建国</p> <p>カナンへの途上、シナイの地で唯一神と契約に入る</p>	<p>アメリカ史</p> <p>ビルグリムの父祖がイギリスのスクールビル村を脱出してオランダのアムステルダムへ移住</p> <p>アムステルダムよりライデンに移住</p> <p>イデンに移住</p> <p>ライデンよりアメリカ新大陸へメイフラワー号で移住、定着、建国</p> <p>メイフラワー号上で盟約を結ぶ</p>			

小室氏はアメリカが人造国家として成立する根本の理念は、イスラエルより提供されたものであり、アメリカの幼児体験としてユダヤ教の精神が生きてゐると言つてゐた。

すると、前回、私がアメリカの市民宗教としてあるのは「創造の唯一神信仰」だと書いたことは、ここでこの小室発言と関連させると、ユダヤ教の神信仰がアメリカ建国以来の共通信仰として生き続けてゐるといふことにならう。

それでゐて、アメリカではユダヤ人そのものは、いみきらはれるといふのはどういふ訳だらうか。

第五章 栄光の冠と破滅の冠

——民族の怨念について——

日本が戦争に負けて、さて海外との交流がひらかれた時、大きな遅れをとったと気付かされたカルチャーショックの一つに、「行動科学」の輸入があった。行動科学は新時代の寵児として脚光を浴びた。行動科学にたづさはる研究者は時代の先駆者として、戦時中の学問的空白をうめる誇りに満ちてゐたやうに世間には映った。しかし、この学問には見逃せぬ大きなおとし穴があった。それは、人間の振舞を「行為」として、動物次元の「行動」といかにちがふかといふことを識別してゆく努力を本当には果たさなかつたことである。むしろ、はじめから「人間行為」(Human Action)と「動物行動」(Animal Behaviour)との峻別に目をむけなかつたと言つてよい位である。

ところが、学史的に省みてみると、例へばマックス・ウェーバーは、彼の有名な『経済と社会』(一九二二)の冒頭の論文で、主観的理由をぬきにした、他律的、衝動的に「ただ

させられている振舞」は動物の「行動」と同じであって、人間らしい人間の振舞は、それをうながしてゐる主観的理由——つまり、目的や価値に結びつくといふ意味のことを明瞭にしてゐる。このやうに「行動」「行為」をはっきりわけてゐるのは、ひとりウエーバーだけではない。経済学者のミーゼスへ一九四九『人間行為』Vも、さらに、それよりるか以前に哲学者カール・ヤスパーズの初期の著作『精神病理学』(一九一三)の中でも立派になされてゐる。

そこで、はつきり言っておかう。人間が何がしかの意味に関係づけられて振舞ふ時、それは「行動」ではなく「行為」であると。

実は、新聞報道などを見てみて私が驚くことは、客観的ニュースの名において、大切な人間の営みを「行為」ではなく「行動」次元に引き下げて平気ですましてゐる姿だ。それのよい事例に、アメリカのボストン・マラソンで日本の瀬古利彦選手が優勝した記事がある。

去る四月二十日に、ボストン市郊外のポプキントンをスタートして四二一九五メートルの片道コースだったと。ただこれだけでは、別府や青梅のマラソンの場合と別に大した差

がない。

一七七五年の四月二十日の明け方、マサチューセッツ州・ボストン市に駐留するイギリス軍隊が移動を開始した。夜明け、ひとりで、馬にまたがり、急を村々のアメリカ農民義勇兵士に告げて廻ったのは、ポール・リビアといふ一介の、ボストンの食器店の親爺さんだった。かうして、駐留軍と義勇兵士との間に戦火がまじへられた。これが全米にひろがり、アメリカ独立戦争の発端となったのである。

だから、毎年、マサチューセッツ州は、四月二十日を「愛国者の日」と名付けて、州をあげて記念行事をするのである。その一つが呼びもののポストン・馬拉ソンなのだ。片や愛国者のリビアーにあやかり、片や馬拉トンでペルシャ軍を破った戦勝の報がアテネにもたらされた時の故事にあやかっつての営みなのである。馬拉トンとアテネの間の距離は四二一九メートルである。それで、かうした営みを支へてゐる歴史的背景——つまり、「昔を今に継ぎ、踐（ふ）んでゆく、まさに人間らしい行為」に一切ふれることなくふせておく報道は、瀬古選手のタイムが史上第五位だったといふ計測の記録だけにとどまることになる。ここには「行動記録」はあつても、「行為にともなふ厚い思ひ」が欠けてゐるでは

ないか。ここで、「意味」とかかはる行為記録を報道したら「軍国主義をかきたてる」とかになるとも思つて自己批判してゐるのだらうか。

優勝者に月桂冠が冠せられてゐる写真がのせてあつた。しかし、何故、月桂冠をかぶらせるのか、その意味については何の説明もなかつたから、これも単なる「行動の記録」でしかないと言へやう。

太陽神ゼウスの子は、古代ギリシャではアポロン神である。医療・予言・光明の神とされる。このアポロン神の霊木が月桂冠である。そこで、その枝葉で輪の形をした冠をつくる。かうして作られた月桂冠は、勝者を讃へるのに一番ふさはしい。ここにも、「昔を今に継ぎ、正しく践む」人間行為がある。それは、ギリシャ神話の伝統にのつとることによつて見事に花が咲く、宗教の営みそのもので、この型式を守ることと完結する人間の意味世界の核心なのである。

私は何時もきまつて、ここで「荊の冠」を連想する。

ローマの総督の兵士に捕へられたイエスは、上着をぬがされ「荊の冠」をその頭にかぶせられ、右の手に「葦の棒」を持たせられた（マタイ福音書・二七章二七節以下）。さう

して、「ユダヤ人の王・万歳」と嘲弄され、「吾が神、吾が神、何で私を見捨てなさるのですか」といふ、悲痛な断末魔の声を十字架上で放って息たえられたと福音書は今も我々に語ってゐる。

「荊の冠」は、棘（とげ）のある枝で出来てゐるから肌に痛く刺す。古来「いばらの道」といふ言葉が、苦難の人生をさす比喻に用ひられるのは、そこから由来してゐる。「荊の冠」は、この被冠者にとって、人生最大の悲惨、苦痛のしるしであり、見る者たちには、よいみせしめのしるしである。

ところが、まことに逆説的であるが、愛の宗教としてのキリスト教は、月桂冠からではなく、荊の冠を頭にした人格から発生し展開することになった。その意味で、天にいます父なる神の摂理が成就されるといふ、「予定の筋書き」にとって、イエスにかぶせられた荊の冠と十字架上の死とは、人類に永遠の平安をもたらず上の不可欠の道具立てと言はなければならぬ。しかし、さうした表向きの解釈や受けとめ方とちがって、信仰あつきキリスト者にとって、「人類の教師として至高の存在」であられるイエス様を、一体、誰が十字架につけ、荊の冠をかぶらざるを得ぬやうな、むごいしうちをしたのか、といふ犯人

探しの心が強くうごいてきた。そして、行き当たった先は、師のイエスを裏切った「イスカリオテのユダ」といふ人物であった。彼に対する憎しみの念は、「ユダ」といふ特定の一人物ではなく、「およそユダヤ人といふ名のつく人間共」へと意識が拡大して行つたと私は見てゐる。

この私の見解とは別個に、ヒトラーのユダヤ人大量虐殺に対する、時のローマ法王の「不作為、傍観、手をこまねいて黙視してゐた罪」に対する戦後の内部告発が契機となつたのであらう。長く続いたユダヤ人迫害の真因を、「神聖・不可侵の聖書そのものに見えるユダヤ人疎外の言葉」に発見したのは竹山道雄氏である（雑誌『自由』に掲載した「聖書とガス室」、昭和三十八年七月号）。

また、一四九二年以来、イサベル、フェルナンド両王により発せられたユダヤ人追放令が、一九七〇年代はじめまで、実に四百八十年の長きにわたってスペインに生き続けてゐたことに驚いた堀田善衛の「西欧通信」（昭和五十五年十二月二日、朝日・夕刊）も私の記憶に生々しい。

今ここでユダヤ系ドイツ人、カール・マルクスやフロイドやアインシュタイン達の思

想、学問をとりあげただけでも、端的に言って、二十世紀を動かしてゐるのはユダヤ人のそれであるといへやう。ところが、一皮をはぎとって、人間事象や自然現象の真相を白昼にさらけ出した、大胆にして冒険にみちたユダヤ人の発想は、何が起爆力であるのだらうか。私には、それこそは、キリスト教が誕生し展開して以来の、主としてキリスト教ヨーロッパに根づいたユダヤ人蔑視の土着感情に対するユダヤ人のあくなき怨念——まことに根深い怨念のほとぼしりとうつつて仕方がないのである。

第六章 “怨念”を出^いで “寛容”の宗教へ

昭和五十二年の集計によると、ユダヤ人は約千二百万人である。全人類の約〇・三パーセントにあたる。このユダヤ人と呼ばれる人間群が人類史に与へた影響は強大で、まさに想像を絶するものがある。

かの実存哲学といふ言葉をはじめて用ゐたドイツの哲学者カール・ヤスパースが『歴史の起源と目標』の中で使つたユニークな用語をここで用ゐると次のやうに言へやう。人類

の物の考へ方を徹底的に深め、その後の人類の思考を決定的なものにして、人類の普遍的にして根本的な範疇となつた『回転基軸の思想』——それを生んだのは正にユダヤ人であつたと。

主な人物をあげると、この指摘が決して誇張でないことが歴然とする。

哲学者では、スピノザ、ベルグソン、フッサール、ヴィトゲンシュタイン、カッシーラ
I。人類学者ではレヴィ・ストロース。精神病理学ないし心理学者ではフロイド、V・E
・フランクフル、エリック・エリクソン、政治学者ではデヴィッド・リースマン、キッシン
ジャー。神学者ではテイリツヒ。そして宗教者としてのイエス、社会思想家としてのカー
ル・マルクスである。勿論、科学者アインシュタインの名も落とせない。ざっと挙げても
これ程の人物が登場する。

人類思想を大きく、かつ深く転回せしめるやうな枢軸の役割をなした知的革新者が揃ひ
も揃つてユダヤ人であることについて、I・ドイッチャーの言をひいて解かうとした大島
一元氏（評論家）の一文が今も私の記録にある。

これを一言にしまとめれば、ユダヤ民族が受けてきた迫害の歴史と彼らの知的革新と

は無関係ではないといふことだ。

他とちがった文明、宗教、民族、文化等の境界線上に立ってゐて、そのちがった文化とユダヤ人固有の文化とが互ひに影響しあふ地域において成熟をみたからである。

ユダヤ人は或る社会の中に生きてゐながら、その社会には本当には受け入れられず、何時も「よそ者」であつた。そのことが、逆に民族の個的な土着性や時代、世代などの相違を超えて、永遠に生きる普遍性を獲得することが出来た原因の一つとみることが出来る。それに加へて、彼らの思想の獨創性は、既にあるもの（思想・理論・制度）に対し、はつきりと確信をもつて「否、非なり」と言へたことだが、それは、彼らが実践的な思考に長じてゐたといふだけではないと私は思つてゐる。それは、天が、悲運の彼らに与へた代償の賜物、つまり「今迄の誰もが気が付かなかつた真相をあげてみせる獨創的智力」のなしたことではないのかと。御承知のやうにアメリカのワルドー・エマーソンは人生における「報償」の鉄則を強調した。全くその通りで一種のアメリカ的運命感と言つてよからう。それによれば、苦しみ悩む者を天は決して見放されぬ。それになり代はつて、この上なく「よきもの」を与へられる。かくて天はユダヤ人に「叡知と美貌」を与へられたの

ではなからうか。エマーソンの言ふ「報償の鉄則」は見事にユダヤ人に当てはまっております。と私には思へてならない。日本では、仏語に『怨親平等』といふ素晴らしい言葉がある。先月の拙稿の終はりで一寸ふれたが、スペインでは一四九二年以来、一九七〇年代のはじめまで、実に四百八十年の長きにわたってユダヤ人追放令が生きてゐたのである。さうなつた事のいきさつについては不明な点が多いが、確かなことは、強制的にキリスト教に改宗させられたユダヤ人が、ひそかに再改宗（ユダヤ教に戻る）の機をうかがつてゐた企てが発覚して、カトリックの大審問官・トーマス・デ・トルケマーダの悪魔的な非道の処置に発したことだといふことである（中野好夫『世界史の十二の出来事』の「聖書と悪魔」を参照されたい）。

一九七八年にレオ・ジーフォースがドイツ語でユダヤ迫害の跡を視覚に訴へる新著『ドイツ人のユダヤ人』を刊行した。をさめられた百二十枚の図版の最初のものは、中世のユダヤ人の胸には、赤い心臓の形をした「ユダヤ人の斑点」(Juden-Fleck)がある、そんな図版が載せられてゐる。この図版一つをとりあげただけでも、ユダヤ人の苦難がいかにかりであつたか——天はその見返りとして、叡智と美貌を与へられたし、それを甘受すると

いふだけでは、断じて癒やされることのない「怨念」が生き続けてゐなければ、それはうそだと思へる程の切ない想ひがそこにある。さう思はれてならない凶版である。

それは、共産主義者を生んだカール・マルクスを考へれば必ず突き当たる私の思ひである。考へてもみよ！「この世の絶対的などんでん返しをはかるうらみの心情」を冷徹な論理で包んでこそ、革命理論は飛躍的な行動を生み、宗教者が敢へて殉教者となつて献身したと同じ道をとらしめるやうな使命感をかきたてたのではなかつたか。

松田道雄氏の『革命家の肖像』（筑摩書房）の最終章「革命と殉教」をみると「少年の私たちがマルクス主義にひきこまれたのは、この世のなかにある悪に対して怒っていたからである」「この世にさかえる一切が、おろかで、悪であると感じられた。その一切を否定するものが革命であつた。革命は夢ではなく、この世で実現されることを、ロシアがしめた。」とある。

松田少年が、それ程深い現実の分析をしないで、単純に「この世の悪」「この世にさかえる一切」を悪だと感じたが、その感じには「怒りの情」がともなつてゐたことを見逃してはなるまい。この怒りの感情の吐け口として、松田少年にはマルクスの教へる共産革命

の理論があつたのである。それは、マルクスの理論が、その冷徹な理論装備の内側にたたへてゐる激情——この世をどんでん返しにせずにはおかないといふ怨念が、自然に共鳴しあつたよい例証だと言へやう。

はしなくもトインビーは断言してゐる。「ロシアが一九一七年にとりあげ、ロシア革命に持ち込んだ共産主義なるものは、西欧に生まれ、西欧では異端児に属する一つの「宗教」なのだ」と。

マルクスとエンゲルスといふドイツのライン地方に育ち、片やロンドン、片やマンチェスターでその働き盛りをすごした二人の人間によって發明された共産主義は、元來ロシアの伝統とは無縁のものである。

ところが、「共産主義は西欧人の良心的な悩みの産物である」から、「ロシアの宣伝によつて逆に西欧に持ち込まれれば、良心的に悩んでいる西欧人を動かさずにはゐない訳だ」とトインビーははつきり言つてゐる（『世界と西欧』）。

西欧人の良心的な悩みとは何か。不寛容なキリスト教が生んだユダヤ人迫害や、宗教間の宗教戦争が生んだ数々のものがそれなのである。トインビーが息子のフィリップとの対

話で、インド教、仏教、儒教（それに伊勢神宮での体験から神道を加へることができやう）といった東洋の寛容で、鬭争的でない平和そのものの宗教に心からひかれてゐることを告白してゐる。この告白をトインピー一人のもので終はらせてはならないのではないか。日本の新宗教の海外布教の活発さは、経済進出の蔭にかくれて世上のうはさにのぼらないが、知る人ぞ知るであらう。例へば、立正佼成会や世界救世教のブラジル伝播など、かつてのスペインが植民政策のかくれ蓑として利用したキリスト教伝道と比較して、現地人への貢献度を冷静に検討されてしかるべきだと思ふ。

今や人類は心から、怨念の宗教でない、寛容な宗教を求めてゐるのである。東洋、就中、日本の諸宗教の回轉基軸的使命は倍加されてきてゐることを改めて再思すべきだと思ふ。

第二篇 宗教の旅——祖国と世界——

(编者註) 本篇に収めた九章は、昭和四十三年一月から四十五年十二月にかけて、『世界・宗教の旅』と題し、『地上天国』誌に連載されたものからの抜粋である。三十六回に及ぶ連載の中から、特に〈祖国〉と〈民族〉に関する考察の色濃い諸章を選んだ。

近年の国際情勢、殊に東欧の体制の変革には著しいものがあるが、〈祖国〉と〈宗教〉との不可分の問題に深く思ひを致したこれらの内容には今日読んでも新鮮な感動がある。

- 第一章 護国の英霊を祀るシュライン
- 第二章 ベレムの塔に見る軍神「マリア・イエスの聖母子像」
- 第三章 スペインの統合とカトリック
- 第四章 スペインの民主化とカトリック神父
- 第五章 チェコ民族自決の伝統
- 第六章 チェコの国民主義とフスの宗教改革
- 第七章 ポーランド民族運動の拠点「カトリック教会」
- 第八章 祖国よ生きてあれ——ポーランドの教会復興——
- 第九章 祖国なきところに宗教はあるか——キユリー夫人の

生家を訪ねて——

第一章 護国の英霊を祀るシュライン

一九六七年、ローマのパチカンから副主教が国学院大学にみえた。オリエンス研究所のスパークさんが案内され、日本の代表的な社寺をみられた後に、神道の大学を訪ねられたわけである。

副主教が席上、出された深刻な質問の一つに次のやうな問題があった。曰く、伊勢神宮に行っても、明治神宮に行っても、墓がないではないかと。

実はこのやうな質問となつて出てくる背景の発想法がわからないと、何とつまらぬ問ひを出したものと、聞いたほうがまともになれぬところがある。実際は、大変な宗教事情の違いが横たはつてゐるのである。そこで私は答へた。

まことにご尤な質問である。しかしその質問にかかはる問題の根源は、神社をシュライン (Shrine) と訳したところに発してをる。ご承知のやうにシュラインは、何ものかを祀りこめた (英語でインシュラインといふ) 場所、施設、器物をさす言葉であり、ヨーロッ

パでも、カナダでも、その「何ものか」が、聖者であることが大部分である。そこで聖者の身柄を葬った墓があるか、あるいは聖者の遺骨ををさめた器物があるか、どちらかの形をとることになる。それが実はシュラインといふものである。

単にシュラインばかりでなく、カトリックの教会堂（チャーチ、バシリカ、チャペル、ドーム等、色々の呼称が建物の様式、構造、大小の違いに着目してつけられてゐる）は、われわれ東洋人の眼からみれば、まさに死者を葬った廟にみえる。プロテスタントの教会や、日本でのカトリックの教会をみただけのものには想像もつかない「墓の上に建った教会・遺骨をまつた教会」なのである。だが、「教会」と呼ばれる限りでは、イエスも、十字架も、マリア様もお祀りして、それらを主とする形をとつてゐる。しかし、「シュライン」と呼ぶ時は、このやうな教会堂と違って、主神の座につくのは死者の墓、または遺骨である。

一九六三年に初めて西欧を訪れた時、職掌柄、毎日見てあるのが教会やシュラインばかりであつたし、内部には必ずと言ってよいほど、ゆかりの聖者——例へば僧正——の寝姿の像を横たへてをり、また、血のしたたる姿の十字架上のイエス像にお目にかかるわけ

であるから、私の家内はホテルに戻って夜ベットにつくと、必ずと言ってよいほどうなされた。昼間みた怖しい光景にをのくのである。今回の旅では勿論、覚悟の上だし、慣れでもきたので、それほどでもなかった。

まことに凄惨の極みである。重い扉をあげ、くらい会堂内へおそるおそる入った。ところがひよっこり死者の寝姿に出くはした、と思ひ浮べただけで十分ご想像願へる心情である。

凄惨の極み、暗黒のいやはてが「聖なるもの」になるといふ心意に裏打ちされたのが西欧の代表的宗教としてのキリスト教である。この心意に共感できねば、とてもキリスト教信者にはなれないとは、かねてからの私の観察であった。

おそらく、西欧やカナダのかうしたキリスト教会を訪れたとして、その後何人の日本人が真正のキリスト者になりうるか疑はしいと思はれたことであった。一方、これとは逆に、光明、あかるさに安らぎを感じるのが日本の宗教に共通する姿勢である。だから、例外なく、宗教施設は、明るい。

有名なルドルフ・オットーの書いた『聖なるもの』といふ本は、宗教の本質を複合的な

人間感情として分析したものである。宗教について、これを専門的に語るものは知らないでは通らないくらゐの共有の知識となつてをるものである。しかし興味のあることは、オットーが「神秘的な怖れの感情」として把へ、その感情を更に幾つもの単純感情にわけて行つたそのいづれにも、「明るさに神聖さを感じる情」はみえないのである。

そんなわけで副主教の質問はごもつともだが、宗教文化の形態上の基本的差異が、東と西の宗教理解をさまざまにわけてをることを私が附言したら、大変よくわかつて下さつた。

私がメキシコから、アメリカに入った時、セント・アントニオ空港で、持参の漢方薬が麻薬と間違へられ、とんだ不愉快な思ひをさせられたことがあつた。そこからまた、飛行機でオハイオ州の首都コロンブスについた。オハイオ州は私が一九六一年に十カ月滞在した懐しいところである。

小田急バスの走る犬のマークは、実はアメリカの全国路線網をもち、「安く、無事故、絶対に座席確保、満員の時は、たとへ一人でも予備車を出す」といふスローガンで有名なグレイ・ハンド・バスのマークからとつたと思へるこのバス会社の停留場で、懐しいケニ

ヨン大学に近いマウント・バーノンといふ町に行く車を待つてゐた。コロンブスの中心街にこのバスのターミナルはある。暇にまかせて売店で品物をあさつてゐたら、面白い絵葉書があつた。

第二次世界大戦で亡くなつたオハイオ州出身者の英霊を祀つた『記念霊堂（メモリアル・シュライン）』の写真である。会堂のある場所はオハイオ州のロウドンヴィレに近い、モヒカンといふ名の国立森林公園の中にある。ここでは明瞭にシュラインといふ言葉を用ゐてをる。さしずめわが国の護国神社にあたと考へてよいであらう。おそらく、オハイオ州の例からおして、他の州のどこにもあるのではないか。即ち全米の各州は、それぞれの州出身の戦没者英霊を祀るシュライン——護国神社をもつてゐるといふことは注目されてよい。

しかも、オハイオ州の記念霊堂は外側を白然石で囲み、彼等なりに人工の技をさける工夫をしてをることがわかる。しかも、ヨーロッパのシュラインとは違つて極めて明るい。このことは、単にシュラインの場合の違いだけではない。

おいおい明らかにしたいと思つてゐることだが、アメリカは歴史的には西欧の出店であ

りながら、今日は別種の西欧であるといふことである。つまりアメリカはアメリカだといふこと。このアメリカ的と言ふことの一つに明るさの性格がある。その意味で日本に近いものがある。

ヨーロッパを旅してみて、陽気に振舞ひ、話しかけてくるのをみれば大抵アメリカ人であると思つてよい。それは血脈でなく、風土的文化のなした違ひである。

例へばヒッピー族は反キリスト教的性格を持ちながらも、連中の外観は、その内にこめられた問題の深刻さにかかはりなく極めて明るい。だから一見、旧制高校生の寮祭の時のやうにみえたり、また、おぼっちゃまの一時的な悪ふざけにもみえたりするのである。

同時に、彼等が反撥するアメリカのキリスト教といふものが宗教性の重みにおいて、軽くできてゐるからとも言へるのである。ここで、仮にアメリカ宗教の軽やかさといふ言葉を使つてみると、このアメリカの宗教のもつ軽味はどうもアメリカの精神風土のもつ「明朗性」にかかはるものがあるやうにみえる。

楽観主義的傾向と言つてもよいだらう。この風潮がまた「神は死んだ」といふ一面ショッピングな標題の神学を今日流行せしめてゐるのである。

アメリカの大学では、「神の死の神学」をテーマにした講演会の方が、ヴェトナム問題をとりあげた講演会より大勢人が集まると言はれてゐる。ここに、軽味と深刻さとまじりあつて、どうも一束にして把へられない微妙なムードがあるやうに感じられる。

一体何が原因なのだらうか。煮つめて考へてみることにしよう。この解明は他山の石ではないはずである。

(昭和四十三年三月号)

第二章 ベレムの塔に見る軍神

「マリア・イエスの聖母子像」

遠藤周作さんの書かれた小説「沈黙」は、芥川竜之介の「神々の微笑」と同一の発想に基づくものと思つてゐる。勿論これは遠藤さんが芥川の真似をしたと言つてゐるのではない。偶々カトリック信者であり、作家でもある遠藤さんが、ポルトガル、イエズス会の修道士ロドリゴの「転び」(切支丹から転向)を主題に選び、しかもロドリゴが転びに至る心理過程において、芥川作品と極めて近似する発想をみせてゐると思つたからである。

昭和四十二年の「中央公論」十二月号に載った「ポルトガル紀行」をみると、私共とはほぼ同じ頃に遠藤さんはポルトガルにをられた。南ポルトガルのヴィンセントに到着されたら、この小さな町は万国旗をかがげ、大きな十字架を捧げて行列をしてをり町中お祭りであつたと言ふ。何のためのお祭りかと思つたら、この町で生まれ、日本で殉教したカルヴォリオ・ヴィンセント神父の記念祭であつたとのこと。遠藤さんはあまりの偶然に仰天したと言つてをられる。さもありなむと思ふ。日本人を見たこともない町の人が、今自分達の祭つてゐるヴィンセント師を殺した日本人の一人を眼の前にみようと。それにあらはれた相手が「転んだポルトガル神父ロドリコ」を主人公に描いた小説「沈黙」の作家その人であるとは。この出会ひは小説ではなく實際の話だから私も奇しき歴史のめぐり合せと思つて思はず溜め息が出た次第だ。

このヴィンセント神父は寛永八年（一六三一年）に九州で捕へられ、雲仙の温泉丘で熱湯をあびせられ、切支丹（キリスト教）信仰を棄てるやうに拷問をうけた、七人の中の一入であるさうな。身体中焼けただれながら前後四回にもわたるその責苦に耐へ、遂に長崎に連れ戻され火あぶりの刑にあつた。遠藤さんは四年前からの「沈黙」の構想を心に持ち

はじめた時、何時も長崎を訪れるたびに欠かさずこの雲仙の地獄谷に行き、「もし切支丹時代に生まれてをり、ここで凄惨な拷問をうけたら一体自分はどうなっていたか」と自問自答された。その結果、肉体や精神に負けて転ぶであらうと思はれた。そこで「転び者」と言はれる人物を小説の主人公に選んだと作品の秘密を打ち明けてをられるのである。私はそれでこの小説の謎が解けたと思った。

ロドリゴが穴ぐらで身体をしばらくられ、さかさ吊りの刑にあふ前に遂に転んでしまったのだが、このロドリゴに説教して「転び」をすすめた人物はフェレイラと呼ぶやはりポルトガルのイエズス会神父である。フェレイラは実在の人物であり、小説にとり入れられたわけである。

小説ではこのフェレイラがやはり捕へられて転び者になる心境を「私が転んだのは穴に吊されたからではない。……神がなにひとつなさらなかったからだ。わしは必死で神に祈ったが、神は何もしなかったからだ」と言はせてゐる。

神の信仰を守るために一身を捧げて苦しんでゐる者に神は最後まで沈黙せられた。この体験においてロドリゴも同じであった。遂にロドリゴは銅版の聖像を踏まうと足をあげ

た。その瞬間、はじめて神の声があった。

「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。私はお前たちにふまれるため、この世に生まれ、お前達の痛さを分つため十字架を背負ったのだ」

人の子らの痛さを分つために十字架を背負はれたイエス——このやうなイエス理解は日本人の試みた屈折か、変容かが問はれるであらう。小説の別の個所でフェレイラをして、「日本は泥沼だ。どんな外来の根も腐ってしまつて根付かない」と言はせてゐる。もしさうなら、作家・遠藤さんの内に醸成したイエス観は、既に正統キリスト教のイエスではなく、その意味でキリスト教の超越神は死んだことになる。芥川の書いた「神々の微笑」も、外来の神をみな同化してしまふ異常な力を誇示する日本の土着の神々の微笑——勝ち誇つた日本の神の笑ひ声を描かうとした小説であつたのだ。

先年、私は国学院大学日本文化研究所の援助でポルトガル人「モラエス」の研究をしたことがある。一八五四年、ポルトガルの首都リスボンに生まれた彼は昭和四年七月一日、徳島市の富田浦町で誰一人みとる者もなく異郷に淋しく死んでいった。彼は明治大帝のご真影を机の上におき、礼拝を欠さなかつたほどに日本人になりきつてみたのである。晩年、

日本を批判するやうになつた小泉八雲とは違ふ。モラエスは転ぶどころか、完全に日本人に化してしまつた人物だ。それにしてはモラエスに対する日本の態度は、すくなくとも彼の生前にはあたたかいものがあつたとは言へない。そこに私はモラエスの霊をなごめ、たへる一種の償ひの営みへとかられる自分を感じてきたのであつた。

一方、ポルトガル側の日本に対する好意は、私が研究をはじめるにあたって現ポルトガル註日大使マルチンス博士から得た数々の便宜にもあらはれてゐる。殊に大使自身、モラエスの秀れた研究家であるし、昭和十一年二月十三日には、リスボン市議会は、亡き日本愛国者モラエスを記念して、リスボン市の目抜通り「ブラカード街」を「モラエス街」と改名する件を議決したほどである。

「沈黙」の書かれる背景に、作家が自分自身にひきあてての体験的理解があつたことは既に作者の体験告白から明かにされた。しかし併せて私は遠藤さんが終戦後、最初のフランス留学生であられたといふ海外生活の諸体験が厳しい西欧世界の人間像、更には西欧世界におけるキリスト教の機能等について、実感をもつて根本的に省察を迫られたところが

あつたものと思ふのである。

一九五一年四月に書かれた「フランスにおける異国の学生たち」(自選エッセイ集『私の影法師』所収)をみると、遠藤さんがフランス人の日本に対する無智、人種差別観のない国だと日本にゐる時言はれてをったフランス人が、いざいつてみるといがい強い白人優越主義があることを苦々しく感じとつてをられることがよくわかる。この感じはフランス文化全般の理解に影響するところがあつたと思ふ。仮にそこからキリスト教は転びに値ひするといふ意識が生じたとしても無理からぬのではないだらうか。また「神の死の神学」「神の沈黙の神学」について遠藤さんの見識も偲ばれる。

とまれ、日本が十六世紀に初めて接した西洋は、イギリスでもフランスでもなく、実に南欧のポルトガルであつたといふことは私にとつて重大な関心事であつた。

スペインとフランスの国境にあつたナバラ王国の貴族の子、ザビエルと騎士のロヨラ等七人が協力して組織したのがイエズス会である。一五四〇年、会はローマ法王の正式の認可を得て本部をローマにおくに至つた。このイエズス会とポルトガルの東亜植民地経営との結びつきが、ザビエルの日本布教の原因なのである。このことを知る者は専門家を除け

ばいかにも少ない。

一四九七年から翌年にかけて、アフリカの喜望峰廻りで印度に達したのはバスコ・ダ・ガマである。一五一〇年にはポルトガル艦隊はインド洋を回航し、インドの南端ゴア、一五一一年にはマラッカを手に入れ、東方の植民地経営に乗り出してゐる。

ところが一五四〇年以後インド経営が困難におちいり、植民地政策の破綻が招来されてきた。そこで、従来の武力政策一辺倒をやめ、これに加へて、キリスト教による精神教化策が採用されたのである。

ポルトガル王、ジュアン三世（一五二一—一五五七）はイエズス会に海外に伝道、布教化策の推進方を申し込んだのである。この求めに何故イエズス会が応じたのであるか。

一つの理由にイエズス会創立者のロヨラやザビエルがスペインよりは強くポルトガルの方に好意をもつてゐたことがあげられてゐる。何故ならば二人の祖国ナバラ王国は本来スペイン系で、バスク民族の形成した独立国であつた。しかるに一五二四年、フランスとスペインとの戦争に際し、ナバラ王国はフランス側に荷担したためにスペインによつて滅ぼされてしまつたのである。謂はばスペインはロヨラやザビエルの敵であつたから、勢いポ

ルトガルに好感をもったのも自然である。

一五四一年の四月七日、丁度三十五歳の誕生日を迎へた日にザビエルはポルトガル艦隊に同乗してリスボンを出発したのである。多分その港は今に残るベレムの要塞のあるあたりであらう。ベレムの要塞は、スペインに流れを發し、大西洋にそぐテージョ川に面してゐる。テージョ川は天然の良港となつてゐる。私が訪ねた日は小雨が強く吹きつける日であつた。參觀者は私と家内以外に誰もゐなかつた。川のしぶきが塔に吹き上るくらゐの強い風が塔のテラスに立つたわれわれの足元を危ふくするくらゐだつた。テラスは聖十字架を型どつたふちにかこまれてゐる。

また、川べりに面し、港を見守るが如くに、聖母マリアの幼童イエスを抱く姿の石像が立つてゐる。私の手に入れた英文の解説によると、

芸術家の秀れた天分が宗教性を色濃くここに刻んでゐる。天を仰ぐ像こそは、この要塞を寺院に転じる役割を果たしてゐる。

この説明は極めて文学的である。端的に言へば、侵略と防護のための要塞が、本来は平

和のための守護神、聖母子像によってみまもられてをり、軍神の役割を受持つてゐることを語つてゐることになる。わが国の例で言ふと古城にまつられる地主神の機能以上に、この要塞にあつては、聖母子像は「戦ひの守り神」の印象を強くわれわれに与へる。事実、西欧におけるキリスト教の神は、時として闘ひの神として機能してゐる例がすくなくない。これらもその一例としてみてよいであらう。

かく私は、切支丹の問題、モラエスの事蹟などを通じ、ポルトガルに心ひかれるところが多かつた。それらに加へて、私が南欧に足を運びたいと切に願つた理由が一つあつた。それは、「東欧」「西欧」「北欧」の如くに熟しきり、一般化してゐない概念、即ち「南欧」をこの眼で検討してみたからである。

果して地理学的にイタリー、スペイン、ポルトガルの三国を「南欧」の名称の下に一括しうるが如くに歴史学上も包括化しうる地域概念なのであらうか。地中海に共通した地理的条件、生活様式の支配するこの三国は、同時に歴史学的にも共通するものがあると言へるのか、どうか。

就中、マリア信仰の発生と展開に焦点をおいた時、南欧の占める役割が重大に考へられ

る。この見透しが果して実証的に主張しうるものかどうか、検証してみたかったから、私はポルトガルとスペインをフランスから分つビレーネ山脈の麓にあるフランスのルールドを訪れた。そこから発つて汽車でスペインの国境イルンに入った。簡単な税関検査があり、汽車はスペインの高原を走り続け、一路ポルトガルに向つた。見渡す限り白茶けた砂状の土、背の低いオリーブの樹々、まこと乾燥地帯にふさはしい景観であつた。

(昭和四十三年六月号)

第二章 スペインの統合とカトリック

旅の収獲は、直接の旅先での印象や体験が生々しく思ひ出のなかで発酵し続けるばかりでなく、旅先の体験を中核として、まだ見ぬ土地への類推が極めて身近になつてくることである。例へば、スペインでの限られた日程のために首都のマドリッド、古都のトレドと、バルセロナしか訪れられなくとも、グラナダやセビリアについて、一寸した旅行記を手がかりとしてすら、図上旅行が可能となり、とても間接の経験とは思へぬくらゐに生々しく

なる。言ひ古された「百聞一見にしかず」の諺は、「一見百聞を直接にする」と言ひ換へてよいやうになる。

スペインの旅が、よし空間的にも時間的にも限られたものではあつても、心ここにあれば部分の体験は全体としてのスペインを語るにはふさはしくなる。私はスペインでの実感を足がかりに、地中海をめぐる国々——イタリー、ギリシャ、ユーゴスラヴィア、イスラエル、レバノン、アラブ連合、ポルトガルの印象を綜合して地中海人の魂をみてみようを試みてきた。

地中海人を近世において代表するものはスペインである。このスペインこそは、四百年前日本が初めて出合つた西欧チャンピオンであつたばかりでなく、文字通り全欧州の主人公であつたのだ。それが今やヨーロッパの斜陽国となつてゐる。

八世紀初頭、スペインはアフリカの回教徒の侵入を受け、以来約八百年間回教徒の支配下におかれてゐた。回教徒は、スペインの南部アンダルシアの中心コルトバに都をおいた。このコルトバ政府はシリアのダマスコの出先機関であり、その支配をうけた。ためにダマスコの政争はそのままスペインの回教政府に影響した。遂に本国ダマスコ政府を離れ

て一独立国となつたのである。しかしそれもやがてコルトバ、セビリア、マラガ、グラナダ、アルメリア、バレンシア、サラゴサ、アルガルベ、トレドの八つの王国に分裂して争ふに至つた。この内輪の争ひに乗じてスペイン人は回教王国の奪回をはかつた。回教軍を破るたびに回教徒占拠の国境に城塞を築き、あらたに王国を建設して行つた。現在残る城の数は千四百を超えるといはれるくらいである。王国はキリスト教騎士団を戦ひに用ゐた。回教対キリスト教の対決は、回教軍対キリスト教宗教騎士団の争ひの形をとつた。スペインの回教徒勢力からの回復運動はそのままキリスト教布教活動であり、それがカトリック王国スペインを生む大きな原因となつた。

回教徒がスペインにおける最後の拠点としたグラナダが遂に滅びたのは一四九二年である。この時、回教徒の完全掃討の中心となつたのはアラゴン王国の国王フェルナンドと、その皇后であるカステイリヤ王国の女王イザベラである。スペインがこの二国にわかれながら、両国王が夫婦であるといふのも面白い。

かのコロンブスがアメリカ大陸を発見したのは奇しくもグラナダ落城の年であり、彼はイザベラ女王の援助の下にこの偉業をなしとげたのである。してみると一四九二年といふ

年は、(一)イベリア半島からの回教勢力の駆逐、(二)アメリカの新大陸発見、(三)スペイン統一への第一歩といふ三つの事件の発起からみて世界史の上で重要な転回点であったといはねばならない。十五世紀末は世界史の回転期にあたり、その回転軸を廻した立役者はスペイン人であったことは忘れられてはならないだらう。

スペインの二王国が一人の国王の下に統一されたのはアラゴン王とカステイリーヤ女王の間に生まれた子供の代になってからである。かくして始まったスペインの黄金時代は一五八八年イギリス海軍によるスペイン無敵艦隊の敗北を境にして急激に凋落してゆく。ヨーロッパの主人公の座は、スペインからイギリス・フランス・ドイツへ、謂ってみれば南欧の地中海人から、アルプスとピレネ山脈を越えて北歐人へ、北海の民へと移ったのである。

十六世紀におけるスペインの興隆と十七世紀における没落とあまりにもそれが急激な変化であるために世界史の謎とせられてきたのである。この謎と取りくむ世代がスペインの哲学者オルテガ(一八八二—一九五五)を中心とし、同人雑誌「西欧評論」に立てこもった人達であり、その伝統を継いだのが、オルテガの愛弟子コラールであったのである。コラ

ールは一九五四年、名著『ヨーロッパの略奪』によって世界史家としての名声をかち得た。その彼が再度の訪日を終へて帰国した。今回の訪日中、五月二十二日、早稲田大学において試みた彼の講演は注目すべきものであった。主題は、新大陸アメリカにおけるヨーロッパ化の問題である。私は彼の講演内容から、今度の旅の間、常々抱いてゐた幾つかの疑問が解けた気がしたのである。(神吉敬三訳「新大陸とスペインの役割」『自由』九月号所収、参照のこと)

北アメリカに見られる、主としてイギリス人によって試みられたヨーロッパ化は、完全に先住民のインディアンを駆逐することによって果された。前後二回にわたる滞米生活において、殊にオハイオ州ガンビアなる学園村にゐた時、インディアンと白人の闘ひについて、つい先年のことのやうにいろんなところで語られたのを覚えてゐる。アメリカ版、日本武尊の東征物語はいくらかもある。神話発生の基盤はこんなものかと思つてもみたくらゐであつた。

コラールにいはせると、北米におけるイギリス人にとって、インディアンはあらゆる種類の共同体から完全に除外されるものであり、「死んだインディアンのみがよいインディ

アンである」といふ北米で人口に膾炙した諺がよくインディアン人種問題の解決策を物語ってゐることである。つまりイギリス人は土着人を消し新大陸の自然すら除いて、本国では実現不可能なほど、純粹な形でヨーロッパの理想型を実現しようとしたのである。これはイギリス人が、本国でスコットランドやアイルランドに対した態度に基因してゐるとみられる。

イギリス人は本国の文化、政治、あるいは宗教を広めるために移民したのではなく、祖国の諸条件から逃れるために正にニュー・イングランドの建設からはじまつたのである。

アメリカ占領軍の日本での生活振りで誰の目にもつき、異様と思はれることは、囲ひをして例へば「関東村」をつくり、その中に米本国での住居形式をそのまま再現し、野菜は人工肥料で清浄野菜をつくるといった、どこまでも彼らの生活様式を異国の地に持ち込み、現地での同化ははからなかったことである。これは根深い彼らの習性に基づいてをり、占領政策として現地人との摩擦を単に避けるといった理由からだけではなさうである。アメリカ軍のあるところ、他のアジア地域では皆さうである。この習性が、力でもって開拓せられる新大陸に持ち込まれるときどうなるか。いはずもがな、現地の先住民とは

別個に、彼らの生活は立てられる。時として現住民は障害物として地上から消される運命に泣かねばならなくなる。コラールは、現地人との混血の傾きを持たないのが北歐人の特徴であると指摘した。その点から、イギリス、フランスによるアメリカ大陸での植民が、一方的方向をもった抽出作業であり、本国での生活様式の強制と、更にその理想化といふ一元的な、功利主義の基盤に立つてゐることも示唆してゐる。

殊にコラールはその歴史力学の観点から、ヨーロッパ諸民族が次々と、自分の属する本国の緯度線沿ひに自己を投影したことにふれ、本国において享受してゐた風土の類似の風土を求めて植民してゐることを指摘してゐる。

これはまことに重要な発言である。私はニュー・イングランドのケンブリッジで一年ばかり生活し、その後、イギリスや北歐を旅したとき、その風土性の近似に驚いたが、今回の旅で、メキシコを訪れ、スペインに行つてみてその風土の似通ひにまた同じく驚いた。

メキシコは、新しいスペイン（ヌエバ・エスパニア）である。二つの海の彼方にある高原台地（スペイン本国では標高七百メートルから八百メートルある。ここをメセタと呼ぶ）は旧スペインの地理的性格を一層雄大にした形で反映してゐるやうにみられる。専門

学者に言はせても、両国の形と地理的構造は極めて近似してをるのである。勿論、地理上の類似のみが必要以上に誇張されてはならない。例へば、新しいフランスにはニュー・イングランドより更に北の寒冷の地に形成せられたといった例外があるからである。しかし、それすら、ミシシッピー河を降って河口のメキシコ湾に達し、ここにニュー・オルリズに植民都市を形成したではないか。つまり、フランス人の南への本能はカナダからの南下をこのやうに促してゐたではないか。一方、アングロ・サクソンは逆に寒冷の新フランス、つまりカナダに入り、遂にイギリス領としてしまったではないか。このやうな民族の故地に育てられた風土の志向性は決定的と言へるほどのものであり、これがヨーロッパ諸族の新大陸における自己投影の場所を必然的にしたやうにみられるのである。

メキシコ・シテイから、郊外のミラミッドに向ふ途中、最も私の印象に残つたのは路傍に群生してゐる植物で「マゲイ」と呼ぶものだった。緑色の葉は堅く、先は刃物のやうにするどい。高いものはわれわれの身体をかくすほどもある。この天然の植物「マゲイ」は、幹の芯部にミルク状の液がたまってをり、酒の材料となる。また、幹の皮は衣料の繊維材料、その芯は楮のやうに紙の原料となる。何から何まで有効な乾燥地帯におけるマゲ

イをみた時、私は湿润地帯における「葦」の効用について思ひ浮べた。葦もまた、燃料、薬物、建築材料、保存食糧として、定着農耕制度の発達以前には重要欠くべからざる自然生の植物であった。この時、世界の古代領域は、葦文化圏とマゲイ文化圏と二つに大別できるのではないかとすら思つてみたほどだった。勿論、日本は「葦原中津国」として前者に属し、やがて稲の瑞穂に依存する「豊葦原瑞穂国」といふ米作国となる。先にふれたことのあるスペインのモンセラート山の登山口で、私の乗ったハイヤーは、チェック旁々ガソリンを入れた。その寸暇に車から降り、モンセラートを背景に家内の写真をとらうとして後ずさりしたら、どうも舗装道路から少しはづれねば位置がまづい。みればそこは、私の身体を半分もかくすほどのマゲイの植ゑたところだった。スペイン各地でマゲイは植ゑられてゐるが、この時、改めてニュー・メキシコでの印象が湧いてきて意識は連続した。コラールはこの意識を確実な知識によって支持してくれたことになる。

スペインが北アメリカでなく、中米、メキシコ、南米のブラジルやペルーに定着した事実は、地理的事情と併せて、それ以上に社会的、歴史的理由によることをコラールはふれてゐる。

スペインの新大陸における植民は、諸々の民族の混血と、生活様式の統合であり、恒久的な本国の扶植を目的としてゐる。一方的方向で現地人を廃するアングロ・サクソン様式とは大いに異なる。さうしたスペインによる統合型の植民は、実はスペイン本土において先史時代以来培はれた必然的性格である。

第一に、スペイン人とは先史以来、ケルト族とイベロ族が混血し、中世全般を通じて更にユダヤ人やモロ人が加はつた。モロ人とはスペイン人がさう呼んだのであるが、一般的にはムーア人と呼ばれ、回教に改宗しえた北アフリカのベルベル人と少数のアラビア人の混合集団なのである。このやうに諸種の民族の混血と共存によって成立したスペインはヨーロッパとしても珍しい部類に入る。

この人種的混融と共存と併せて、イベリア半島におけるスペイン統一運動の様式が、諸王国の統合をば同一の君主に依存するといふ共存形態においてきてゐることが第二の要因とみられる。これが近世海外植民地にも適用せられる結果となつた。

スペインの統一王制のこの性格は、先にふれたやうに、回教徒の王国から、失地回復をはかる長い戦争（七一八—一四九二）を通じてでき上がったものである。回教王国を打ち破

るたびに、そこに新たに王国を築き、北から南へとイベリア半島を南下して、遂に回教国グラナダ王国を打ち破った。従って、スペイン最後の地中海沿岸部のバレンシア王国も、シシリー王国も、遠く離れたメキシコ王国も、何ら統一スペインの下にあって差別はなかった。それぞれの王国においてスペイン統一王を代表する副王の場合にも差別はなかった。

このスペイン王制の複合的性格は、ある面では非効率であるが、また反面、動的でもあったとコラールは言ふ。そもそも、この傾向は、スペインの地理的社会的構造に根ざしてあると思はれる。一村の土地、公共施設が悉く地主の財産であるといふ「地主村落」があったり、「カセオリ」と呼ばれる百人から百五十人くらゐの小集落で孤立的形態をとった徹底した小土地所有が支配的であつたりして、これらの統合が王国となり、また近代になつて州となつても、強力な一元的統一国家は実現し得なかつたわけである。統一国家が十六世紀にカステイリヤを中心として出現しても、常に内部に遠心的分離の傾向があつたとみられる。

私のみるところ、恐らく、このやうなスペイン社会の本来的構造が本土と海外植民地に

おける統合様式を生み、同時に分離を容易にしたのであると思ふ。このやうな動的だが非能率で、分離しやすい社会単位を統合するのに力があつたのが「カトリック」の普遍主義であつた。一方、イギリスに代表せられる一元的集権制の植民主義は「新教」をかかげた。ここにみられるカトリックと、新教と、植民型式との関係は興味深いものがある。

前回あげたシーグフリードの見解ではないが、スペイン人の統合単位が、せいぜい血縁や仲間関係にとどまり、国家といふ集権的機構に向ひ難いのも、かうした人種と社会構造に根ざすのではないかと思つてもみた。カトリックの普遍主義はこの民族的欠陥を破れなかつたのではないか。フランコ統領が、新生スペインの統一と独立にあたって、いかなる精神を眞の連帯の鍵としたであらうか。歴史的にみて大切な問ひである。

紀元四世紀に、ヨーロッパにゲルマン人の大移動があり、ローマ支配下にあつたスペインに西ゴードが侵入した。この西ゴードがスペインで首都とした所がトレドである。今にトレドには、これより古く紀元前二百年頃にローマ人が支配した頃の名残として、ローマ風のアルカンタラ橋がある。また、後に侵入した回教徒アラブ人が九世紀に建てたビザグラの門も今に残つてゐる。ドイツの詩人リルケ（一八五七—一九二六）は「天上と地上を結

ぶ都」と感嘆したほどの都がトレドである。

この古都トレドに、スペイン黄金時代をかざる画家のグレコが住んでゐた。このグレコが「外なる光は私の内なる光をかき乱す」と極めて暗示的な言ひ方をしてゐる。この場合、外なる光とは陽光をさすのであらう。グレコにとって「内なる光」とは「外なる陽光」を拒否する性格のものであつた。

作家の堀辰雄が、倉敷の美術館でみたグレコの「受胎告知図」から感じとつた異様さは陽光とその性質を異にする別種の光が作り出したものではなかつたか。

既に堀辰雄には、内部から発して外部にまで輝き出る十七世紀、オランダの画家レンブラントの描く光線にひかれる面が別にあつた。モリアック（一九世紀のカトリック作家）の小説の中に、同じく、内から発して揺曳する微光をみて彼はこれをこよなく愛してゐたのである（堀辰雄「夏の手紙―立原道造に―」参照）。このレンブラントの「内から発して外部に輝き出る光」は、グレコにおけるほどではないにしても、やはり外なる陽光を拒否する別種のものであつたはずである。

だから、文学と芸術において抒情性を純粹に追ひ求めた彼が、日本の古代の抒情性に目

覚めた時、彼はグレコにも、レンブラントにも、彼らの画く内から湧く光に異様さを感じ、外なる陽光が同時に内なる光であるといふ性質の、まさに日本の光に目ざめねばならなかつたはずである。この外からの光と内からの光との一致——これは純粹に日本のものである。明主様（世界救世教教主）のあかさされた「おひかり」とはこれではないのか。

（昭和四十三年九月号）

第四章 スペインの民主化とカトリック神父

一国内にかかへ込んだ民族、人種問題がいかに深刻かについては、日本のやうに単一族によって形成せられる同質国家には本当には理解し難いものがある。僅かに関東大震災の時、異常な心理下に醸成された対韓国人意識の体験から、死火山が突如地殻の変動で噴出し出すやうな危険を内蔵するものと察するくらゐが落ちである。

ところが実際は、ベルギーにおけるドイツ、オランダ系とフランス系の対立、イギリスにおけるイングランド人とスコットランド人やアイルランド人との違和感などは想像以上

に根強い。チェコスロバキアにおけるチェコ人とスロバキア人の間がまたさうで、さる八月末以来、ソ連が武力威圧の姿勢をとつても、社会共産体制の本道にいつかうに逆戻りしない自由民主化路線に業を煮やし、遂に内部からの切崩しのために対立する民族感情を利用して、スロバキア共産党を強く挺子押ししだした——こんな国際戦略がとられることを可能にするくらゐに内攻してゐるわけだ。

アメリカにおける黒人の過激派は、「黒人回教団」(ブラック・モスリム)を組織して、黒人自らの自由支配のための独立国をアメリカ国内にもたうといふ運動を繰り広げてゐる。実はこれに近い深刻な民族問題がスペインにある。

前回でふれたやうにスペイン人は複雑な人種混合をしてゐる。独立した諸地域の連合によつて統一国家をなした。しかし依然として今日のスペインで、アメリカの南部黒人地域に比せられるところが残されてゐる。それはフランスとの国境にあるバスク・カタルニア地方である。丁度ピレネー山脈の南西にあたる。

殊にバスク地方に住むバスク族は人種学上、言語学上その起源が不明で、バスク語は他のヨーロッパ言語と系統を異にしてゐる。スペインに五十万人、フランスに二十万からゐ

るといはれ、ベレー帽をかぶり独得な服装をしてゐる。ここに古くナバラ王国があつた。スペイン・フランス戦争の時、フランスに与みしたためスペインに亡ぼされた。この首都パンプロナは現在人口十一万、ナバラ県の県庁所在地である。十六世紀半ばに、遠く日本に伝道した聖フランシスコ・ザヴィエルが当時のナバラ王国の貴族の子として生まれ、この出身者であることは彼の活動の性格に関連がある。

カトリック教会の改革派として、また、その最前衛として海外植民と共にその布教に挺進したイエズス会は一五三四年、ロヨラやザヴィエルによつて結成された。二人はナバラ王国滅亡後、バリー大学の学生として落ち合ったのがそもその縁であつた。彼等が何故スペインでなく、ポルトガルの求めに応じて伝道活動を行つたか。それは彼等の祖国ナバラ王国とスペインとの関係から生じた対立意識が底流にあつたからと思はれる。清潔、純潔、服従を旨とする厳格な倫理的性格をもち、禁欲主義に徹したイエズス会が、日本人が最初に接したキリスト教であつたことは日本切支丹史を一層悲劇的なものにしたといはれるのも一理ある。ザヴィエルは亡国の民であり、永遠の国の樹立をイエズス会に夢みたのであつた。

このパンプロナに世界的に有名なサン・フェルミンの祭が毎年七月七日から一週間催される。朝の牛追ひに続いてパレード、闘牛、花火、ダンスと昼夜を分たず祭は繰りひろげられる。

朝七時を合図に町外れ一キロ先から闘牛に追はれて若者が走り出し闘牛場に殺到する。

正式の闘牛開始前に、血の気の多い若者が新聞紙をまるめた程度のを俄か作りの武器として闘牛を試みる。恋人の前に男の勇気を競ふのだといはれる。

スペインから回教勢力を駆逐して統一を実現したのはアラゴン王のフェルナンドと、その皇后でカステイリヤ王であるイザベラの二人であった。夫婦でありながらそれぞれアラゴン地方とカステイリヤ地方の国王であるのはどうも納得しがたいと先に述べておいた。このことについて、カステイリヤを中心しながら、民族、言語、文化の異なったバスク、カルタニア等独立の諸地域を強引に征服する巧みな最初的手段であったとみる向きもある。それが証拠に、スペイン語と呼ばれるものは実はカステイリヤ語である。カステイリヤ王制を中核に民族語を禁止する等の抑圧策をもって臨んだから、これら地方の分立主義が今日まで根強く残ったとみられてゐる。一九三一年四月十四日、カステイ

リヤ地方の中心、そしてスペイン王国の首都マドリッドからブルボン王朝最後の王アルフオンソ十三世は脱出した。共産主義、人民戦線派のつくった王制反対革命委員会の退位要求に抗しきれなかったからである。ここに第一共和国（一八七三、四年）のあとに続いて、第二共和国と呼ばれる人民革命政府が誕生したのであった。だがその後五年経った一九三六年七月スペイン領モロッコにおける軍部が本国の人民政府に反旗をひるがへした。その先頭に立ったのが派遣軍の統帥フランコであったのだ。フランコ軍はバダホス、イルン、サン・セバスチアンと人民戦線軍を破ってこれらの地を次々と陥落させ、この年の九月には古都トレドを攻略した。フランコが国家主席となったのはその翌月であった。フランコ独裁政権の樹立にあたってトレドの陥落は極めて重要であったことはこの経緯からみてもよくわかる。長い内戦のあとに一九三九年一月バルセロナは落ち、同年三月フランコ軍はマドリッドに入って漸く内戦は終結、フランコ政権は不動のものとなった。彼は自分の後は王政に復すと国民に約束してゐる。

彼は経済成長率八％といふヨーロッパ最高の奇跡的な経済繁栄をもたらした立役者であった。マドリッドの中心街の繁華振りは、ポルトガルのリスボンから汽車にのって、荒涼

たる荒野に近い畑の中をぬけてきた者にとっては確かに奇跡であった。フランコ統領下の民政安定、わけて海外導資による経済のにぎはひはめざましいものがある。

その最新の施設と最大の規模を誇るマドリッド大学は外観上ヨーロッパ第一をもって任ずるにふさはしい。だが、トレドへ向つてマドリッドを離れようとした時、内乱の傷跡が街々に残つてゐて、どんなにマドリッドの攻防が激しいものであつたかが知らされる。道はそのまま、内乱とは関係なしに古くからの貧しさと荒涼たる姿をとどめた村や町に続いてゐる。スペイン社会にみる不調和と不均衡は容易に克服し難いものにもみえた。

かうした情勢のなかに、ご多分にもれず、ここにも民主化の波がおしよせてゐる。この民主化運動に占めるカトリック神父の動きは注意される。

この種の運動でスペインの危険な火薬庫になりかねないのは前述のバスク地方だと報道されてゐる。

一九五九年にETA（バスク語でバスク国家と自由を意味する）がこの地の青年達によつて組織された。非合法組織でしばしばテロ行為に及び、フランコ政権を足元からゆるがす危険団体とみられ、強い弾圧をうけてきてゐる。この運動の背後に民族主義者やカトリ

ック神父がをって暗黙の保護を与へ、彼等のゲリラ活動を許してゐるとみられてゐる。

既に見てきたやうに、バスク地方のスペイン中央政府に対する独立闘争の歴史は古い。

スペインの内乱では人民戦線共和国側についてフランコ軍と闘つたり、一時は第二共和国の下に自治政府を樹立したこともあつたほどである。また一時はアメリカの援助で独立を夢みたのである。かうした反中央政府、反フランコ体制を過激にうち出したETAに対し、この地方のカトリック神父達の同情や応援ぶりがめざましい。

例へば、ETAのテロリストをかくまったり、政府の国旗を教会に飾ることを拒否して反政府的説教をしたり、警官暗殺犯人として射殺されたETAの青年のためにミサをしたりと報告されてゐる。かうしたカトリック神父の動きは、一つにはスペイン・カトリック教会の上層部がフランコ政権と密接に手を握り、うまい汁を吸つてゐるとみる不満があるかららしい。この不満に火をつけたのは他ならぬカトリックの本山、ローマ・ヴァチカンが打ち出してゐる近頃の自由化の影響であるらしいとみられてゐる。

イタリア以上にカトリック的であるスペインのカトリックにあつては聖職者の権威は絶対的であり、その階級差別も厳しく絶対的である。ところがローマ本山に起つた自由化の

余波はスペインの若い神父達を動かさずにはおかなかつた。若い神父達の聖職者階級制に対する抵抗は、バスク地方にあっては在来の反中央気質と結びあつて激しいものとなつてゐるらしい。

スペインにおけるカトリックは事実上の国教であつた。だから、人民戦線派の第二共和国に対し反抗の立場をとつた。アルフォンソ十三世が亡命して間もない一九三一年五月七日に、トレドの大僧正でスペイン教会の主席司教であつたセグーラ枢機卿は、アルフォンソ十三世を褒めて共和国を激しく攻撃する教書を發表したほどである。また、共和国反対を公然と唱へた「スペイン革新党」「スペイン自治右派連盟」「ファランヘ・エスバニョーラ」等、いづれもカトリック教会の力と思想を背景としてゐたことが特徴であると言はれてゐる。(齋藤孝著『スペイン戦争』三二六頁)

フランコがその民主主義派の勢力拡張にあたつてカトリック教会と結んだのは当然だとみられてきた。今や、その教会内に、民主化の波がおしよせてきたわけである。

さてスペイン内乱において、フランコ軍によるトレド落城はスペイン新政府の誕生にとつて意義が大きいことには既にふれた。このトレドに、スペインの画家グレコの家があ

り、ユダヤ人のユダヤ教会堂も残ってゐて、文化史的にも大事だが、それ以上に今日の統一スペインの魂の故郷として重んぜられてゐるのである。

それはトレドが新生スペインの誕生にかかはる二重の事件によつてである。第一は、フランコ軍が共和国側の共産軍を打破したところといふ点においてであり、更に深いところでは、人民戦線派の赤軍がトレドを攻撃したとき、勇敢に闘つてこれを死守しようとしたトレドにたてこもる軍と市民の英霊がしづまるところであるからである。

一九三六年六月十三日、人民戦線軍の侵攻をうけたトレドは、総数一〇五〇人がトレドの城（アルカザア）にたてこもつた。指揮する者は一四七人の士官と、七人の士官候補生とであつた。

六月十三日、この城の義勇軍隊長陸軍大佐モスカドの室に電話がかかつてきた。声の主はモスカドの息子と、地方政府にゐる赤軍隊長であつた。

赤軍司令官 これまで起つた大虐殺や惨害に対し、責任を負ふべきは外ならぬ君だぞ。アルカザア（トレドの城）を明け渡す機会をつくるためにこれから十分間待たう。お前が城の明け渡しを承知せぬなら、お前の息子ルイスの生命はないぞ。息子はここに捕へら

れてゐるんだ。

モスカド隊長　ほんとか。

赤軍司令官　それがうそでないといふことがわかるやうに、息子を今電話口に出す。

息子ルイス　ハロー、お父さん。

モスカド隊長　どうした？　せがれ。

息子ルイス　どうもしません。アルカザアが降服しなければ私を射殺するといっています。

モスカド隊長　さうか。それではお前は魂を神にお任せして、スペイン万歳（VIVA ESPANA）をとなへて、愛国者として死になさい。

息子ルイス　お父さん、キス！

モスカド隊長　せがれ、キス！　（赤軍隊長に向つて）何時まで待ってもだめだぞ。決してアルカザアは降服しないぞ。

トレドの城は大半を破壊され、忠勇の士は死んだ。かくて赤軍の手に落ちてから、再びフランコ軍によって奪回されたのである。トレド城の攻防における部隊長モスカドは、スペイン愛国軍人の亀鑑とされた。

今日、トレドの城は、絵のやうに一きは高く古都トレドに建つ。市民戦争当時の武器弾薬をはじめ、ここに倒れた英霊をねんごろに祀つてゐる。

全体が軍事博物館と戦士の墓地となつてゐるのだが、ひときはわれわれの印象に残るのが在りし日の隊長の部屋である。そこに、当時用ひられたと伝へられる古電話が残されてあり、右に掲げた会話が各国語に翻訳されて掲げてある。日本語のもあつた。

案内人の予定した時間のため早々にその室から離れなければならなかつたから、勿論ノートする暇もなかつた。幸ひに入場口で「トレド要塞の叙事詩」といふ英文パンフレットを手に入れることができた。忘れぬうちに、マドリッドのホテルに戻つてから、家内の記憶を手帳に書き留めておいた。日本に戻つてきて、今改めてこのことを書く段になり、英文パンフレットをみてみたら、英文で書かれた全会話が載つてゐた。訳してみると、家内の記憶した日本語が全く正確であつたのに事実驚いた。さて私事にわたるが、日本女性の記憶力の程を示す国際版なるかなと、いささか身内の肩をもつうぬぼれ屋のスペイン氣質にあやかつて披露してみたわけである。

隊長モスカドはスペインの現体制にとって、体制側のために殉じた亀鑑である。だが親

としての愛情と、祖国への忠誠の岐路に立って、敢然、大義に私を滅した忠烈の士は、この体制、反体制の別をこえて公義に生きねばならぬ男子の本懐として長く生くるのではない。それを、この遺跡に如実に留めようとした後の世の配慮は、今の世の教へをそこに見ようとするからである。スペインの国の魂はここに集中的表現をみせたといふべきか。

国に忠ならんとすれば親の道成らず、親の道立てんとすれば国に忠ならず、公私の選別に進退きはまり、五体苦悩する中に実現せられた大道について、今や日本は自からそれを捨離した風潮が盛んである。とりわけ日本のものとされたこの種の忠節物語は、海をわたった異国に幾つも現出する様相をみて、彼我の懸隔が容易ならぬものとなったと感じた次第だ。

(昭和四十三年十月号)

第五章 チェコ民族自決の伝統

オーストリアの首都ウィーンから三一四キロ、チェコの首都プラハは近い。車中、同じコムパートメントで席を同じくしたのは、ドイツに長逗留してゐるアメリカの女学生と、

オランダからの中年の夫婦、それに私と家内だった。八月も末のこと。

出発間際まで、東京の交通公社は東欧三国の査証をとることができなかった。なぜならば、ソ連をはじめ共産圏は、自由化がすすみ、鉄のカーテンがとり除かれたと思はれてゐる今日でも、なほ特殊な入国の手続きを要する点に変わりはなかった。これらの国々では、先づホテル、交通機関等、一切本国側の受人承認を必要とする。これらの諸費用も前もって支払った領収証を手にしてからこれをもち、はじめて東京の大使館に出向いて査証下附の申請をすることになる。共産圏以外の国々では、旅行者がどこに、どのやうな交通機関を利用して入国しようと、またどこに泊らうと、一切そんなことは査証下附の前提条件にはならないのである。

仮に旅行シーズンでホテルの空きがなければ、何時まで経っても返事がない。まして共産圏の非能率なお役所仕事となればなほさらことは順調に運ばない。いよいよ困って何回か大使館に出向いたさうだが、「本国からの受入れ承認書は？」と聞かれれば一も二もなく引きさがるほかなかつた。これが交通公社側の言ひ訳である。

しびれを切らした私は、横浜から乗船する二日前、ポーツランド大使館に赴き、参事官に

あつて、貴国のワルシャワ大学日本学科のコタンスキー教授が私を待つてゐる。是非格別のご配慮をと頼み入んだ。もちろん心地よく承知してくれた。同行の公社の職員が、大したもんですなと感心しきる。今度はポーランド大使館からハンガリー大使館に電話して、事情はかくかく、ポーランドの査証もいただいたから、そちらの方も格別に願ひたいと前もつて頼み込んでおいてから出向いた。このやうにして、一日のうちに共産圏の査証全部をとることができた。しかし、ホテルの予約等入国準備はどこかで改めてしなければならぬ。その仕事が残された。

ロンドンに東欧関係専門の旅行社がある。時間がないからウィーンの国立の交通公社を利用なさいとそこで教へてもらつた。ウィーンについて、その場所に行つたら、東欧を専門に扱ふ部局が別にあつた。アメリカをはじめ、世界を大きく数部門に分け、それもホテル関係と交通機関関係との扱ひを別にしてゐる。さすがに国際都市にふさはしい仕事振りだし、彼等西欧人の文化は文化なりの意識が業務に徹底してゐるなと思つて感心した。

係の女子職員が極めて親切で、貴方のウィーン滞在三日間のうちに全力を尽さうと約束してくれた。彼女は言った。「日本は東欧に入るのに随分楽なのですね」と。

無理もない。前述の如く入国手続が逆になり、査証のみが先に許されてみるといふ変則の事態を、日本のみでは通例のことと思つたからだ。

約束の日に公社にでかけて行つた。彼女は長距離電話でブラハとブタペストのホテルの予約をとつてくれてゐた。しかし、さすがにポーランドのワルシャワは返事がない。鉄のカーテンは依然としてきついらしい。大丈夫だからブラハのチェドット（チェコ国立交通公社）でポーランドのことを頼めと言ふ。この方は既にふれたやうに結局は駄目で、やむなく予約なしでブラハからワルシャワに発つといふ冒険をしたわけである。助ける神ありで結果としてはうまく行つたが、出発時にはいささか緊張があつた。

ウィーンからの車窓、私は緑の田園と農村風景を楽しみながら、イエス・キリストはりつけ像（カルヴァリイ Calvary）を何とかカメラに収めたいものだといふ試みも試みてみた。現像するまで、あやぶまれたが、うつることはうつつてゐた。

丁度、日本の地蔵のやうに、村の路の岐れ道に立ってゐる。村を守り、行路の旅を守るのではないか。人情はその表現を異にしても一つなるかなと思はれた。

有名なミシエラン版、英文オーストリア案内書の総論の部、民俗のところをみてゐた

ら、聖アンナを中心とする聖母マリア、イエスの三人像（セルブドリット）が各地にあるとみえてゐる。

子のイエス、その母マリア、マリアの母アンナなる直系の祖母、母、子という系列の三者が一体をなす聖家族の信仰は私の研究課題だし、今度の旅でも、これにからむ資料を蒐めるのが一つの目的であった。だから機会をみては、直接訪れることのできない地域での状況を、人を介して聞き書きするやうにした。

車中同席のオランダ人の夫君が、オランダのリンブルグ地方各地にこの種の聖三人像が祀られてみると教へてくれた。思はぬ旅の収穫はあるものだ。

汽車はやがて国境の駅グムンド・N・Oに着いた。オランダの彼はオーストリアの新聞を出して、昨晩この国境の町でチェコからの逃亡者が射殺された、これこの通りと説明する。

ウィーンの公社が長距離国際電話で、僅か二日のうちにホテルの予約をとることができると、共産国チェコは西欧に近く、かつ西に心を開いてゐると思はれたのだが、今かうして人気のない国境の駅で、税関と警察の調べをうけてみると、逃亡人射殺事件の深刻さ

が胸に迫ってきて痛くなった。やはり厳しい鉄の垣根はある。

汽車からみえる国境は金網で仕切られてゐる。有刺鉄線かどうかはわからぬが、狭い村の路をはさんで金網の垣根が不気味に続いてゐる。

チェコ側の国境駅、チェス・ヴェレニスを過ぎると、両替へのための職員が車中をまはり出した。

何も知らないアメリカの女子学生は何故かおどおどしだした。何かあったのかと家内が心配してきくと、彼女は「隠し金のアメリカドルを腹にまいてゐる。正直にださうか、出すまいか、どうしたらよいだらう」と小声で言ふ。

思はずわれわれは笑ひ出した。かく言ふ私も旅立つ時から、特別の腹巻きを作らせて、大金はそこにをさめ、まさに肌身離さずにしてきた。トラベラーズ・チェックも私の体温でしめって、皺がよるほどだ。宿につけば、この大切な代物をおもむろに出して、虫干しをかねて中身を改め、やれやれといふことになる。誰いふとなく日本人が考へ出した生活の智慧かとも思つてゐたのである。それを今、青い目の金髪の外国の娘が同じくやつてゐると知つては嬉しくならないのがをかしい。彼女は勇敢にも私に背を向けて彼女の「腹巻

き」をとり出した。

われわれのコムバートメントは、オランダ、アメリカ、日本、三組の楽しい国際的交歓でわいた。ウィーン駅の駅で買ひ込んだ弁当を食べ終へ、うとうと眠りをさそはれる頃、プラハに着いた。

プラハで手に入れた英文の案内書は四〇〇頁を超す比較的部厚なものであるが、紙も上質、印刷もきれいだ。おまけに本の終りには、有名なガラス製品やフィルム「フォマ」、乗用車「スコダ」の広告までのつてゐる。戦前、戦後を通じ、自動車を自力で開発したのは東欧では東ドイツとチェコのみであるが、外国人顧客目あての広告まであるとは、これが「共産圏の優等生」といはれるチェコの経済自由化の面目かなと思つてみた次第。

この案内書は、「チェコスロヴァキア社会主義共和国は一九六〇年六月二十七日公布の憲法の下に、労働者、農民、知識人との盟約によつてでき、かつ共に平等なチェコ国民と、スロヴァキア両国民からなる単一国家である」とうたつてゐる。

殊にチェコとスロヴァキア両国民の平等なること、この二国民の合同によりなることを明記したには深い理由がある。両国民とも人種的にはスラブ民族である。しかし、九州と

四国を併せたほどのこの国の全土は東西に長く、西はドイツ、東はソヴィエツト連邦に境してゐる。この東部山岳地帯がスロヴァキアであつて、長い間ハンガリーの制圧下にあり、農民は農奴化して生活程度は低い。一方、中欧一の工業国といはれるその実は西部チエコにあり、よく工業化を遂げてゐる。私共は子供の時からチエコの機関銃といふ言葉をよく耳にしたほどだ。この両地方の違和感はチエコスロヴァキア内政の難点とされるところである。

ホテルについてから、ポーランド行きを早く決める必要があるので前もって教へられたチエドック「国立交通公社」に行くことにした。ホテルでは市電を利用するのがよいと教へてくれた。

それは願つてもないことだ。私は一国を知る一番よい方法は、乗物は汽車、バス、市電、地下鉄がよく、タクシーは避けること、食事は街の人の集まる大衆レストランがよいと思つてゐる。言葉の苦勞もあるし、時に時間もかかるが、かうすれば他国の人の生活に入り、地肌に生活の息を感じることができからである。

国立博物館前の坂を下ると三叉路にぶつかる。ここがいはば銀座四丁目の角である。右

折すると目抜き通りの一つ、ピイコベ通りである。その中ほど右側にチエドックがあった。その反対側によく整った専門別の本屋、それに清潔で値も安い設備のカフェテリアがあった。完全にアメリカ並みだ。ブタペストでも一回カフェテリアを利用したことはあるがこの方は店も小さいし品数もすくない。ところがこの通りのカフェテリアは国立で店も大きく、品数も多い。難点は東洋人には椅子が高すぎるくらいだ。ロシア風ボルシチューをチェコ化したスープのうまさは格別で、今もその味が忘れられない。

この通りに面して小公園がある。街路の出店で買ったコーンやアイスクリームやシャーベットをほほばってベンチで休んでゐる市民が多い。みると傍に宝クジが売られてゐる。宝クジ売りは景品の乗用車を背中にして、さあいかがいふ姿勢である。これは全く自由国なみだ。私はチェコ語ができないから、本年に入ってから、自由化運動の昂まりを先のやうな状況で思ひ浮べることが到底できなかった。

市電の車掌は女の人が多い。しかし、その外の点では確かに自由の風が心地よく街中を吹きぬけてゐると感じた。言葉のできぬ旅人の印象はそれ以上を出ないのだが。

この小公園を通りぬけ、ブルタバ川に向って歩いてゆくと古都プラハの一番古い界限に

出る。

やがて市の時計塔、ティン教会等にかこまれた広場に立つ。中世からの幾世代もが今も生きてゐる広場、ここを今夏ソ連軍は占拠した。古都プラハの占拠した要所の中でも特に重要であつた場所である。何故か。

チェコ市民は、自由を叫んで何時もここに集まる。それは単にそこが広場であるからなのではない。彼等チェコ民族、自由の先駆者ともいふべき、ヤン・フス（一三六九年頃—一四一五年）の銅像があり、謂はばチェコ民族「自由の広場」となつてゐるからだ。

チェコ民族の民族自決、自由の叫びは、二十世紀の今日の突発事故では決してないのである。それは遠く十四世紀にまでさかのぼる。この記念像の前で、その伝統を受け継ぐ姿勢で今日の民族自決は叫ばれてきた。にも拘らず、多数の頁をチェコの問題にさく日本のジャーナリズムはヤン・フスについて語るところがなく、それで済ませてゐる。

彼は、何よりチェコの民族言語の綴字法を定め、チェコ語で新約聖書の翻訳を手がけた最初の人である。彼はチェコ語で説教する、ベツレヘム教会の主任司祭、かつ説教師であつた。

彼はイギリスの宗教改革者、ジョン・ウイクリフ（一三二〇—一三八四年）に学んだ。ウイクリフがラテン語聖書を自国語の英語に訳した最初の人であったやうに、フスもまたラテン語聖書のチェコ語への最初の訳者であったのである。このフスの影響が後にドイツのルーテルに及んだ。ルーテルはじめて聖書のドイツ語訳を果したのであった。

このやうに宗教改革は、何より聖書の自国語訳といふ国語運動に発したことを思はねばならない。

アルプスから東の地、中欧において、この種の民族運動は、フスによって十四世紀におこされたのである。彼が単に宗教史上、チェコ国民教会の父とされるだけでなく、さらに広くチェコ民族独立、自由の騎士とされる所以については詳しくこれから述べることにしたいと思ふ。

（昭和四十三年十一月号）

第六章 チェコの民主主義とフスの宗教改革

ヤン・フスは一三六九年頃、ボヘミア地方のフシネスに生まれた。一三九六年、カール

大学（後のブラハ大学）から文学修士号を得て、更に神学の研究のため大学にとどまった。一四〇〇年、カトリック司教を拝命、一四〇二年にはベツレヘム大礼拝堂の主任司祭兼説教家となった。かくて一四〇〇年以降、フスの活躍は大学人として、また宗教家としての両面にわたった。

私がもとめたブラハ出版アロイス・スポボタ著の英文版案内書「ブラハ」には、「ベツレヘムの礼拝堂こそはチェコ国民にとって最も神聖な場所の一つだ」と書いてある。

その理由に、ブラハの貴族達が近隣の主教や教区司祭らの意志に抵抗して一三九一年に建てたチェコ人のための礼拝堂であることをあげ、更に第二の理由として、一四〇二年から、一四一四年、これが終焉の旅となるとは露知らぬ身のスイス国コンスタンツで催されたカトリック宗教会議に出席するまで、チェコ民族の真実の魂を呼びつづけたフスの最後まで拠った礼拝堂であったことを記してある。

一四〇二年はフスにとって、また、チェコの歴史にとって二重の意味で記念されるべき年である。大学人としてのフスが、カール大学の総長に選ばれた年であると共に、チェコ国民教会の牙城、ベツレヘム教会の主任司祭となった年である。この二つの事柄は、フス

といふ同一人格にとつての一つの事実の両面にすぎなかつた。その一つの事実とは、

眞実を愛し、眞実を護り、眞実を語り、眞実に耳を傾ける

ことであつた。フスはこれを大学で講義し、ベツレヘム礼拝堂で説教をした。

フスが学び、かつ今や総長の位置についたカール大学はパリ大学、イギリスのオックスフォード大学と比肩される東欧の學術の中心であり、オーストリアのウィーン大学や、ドイツのハイデルベルヒ大学より四十年も早い一三四七年の創立である。創立者のチェコ国（ボヘミア国といふ時もある）王カール一世の名をとつて大学の名としたのであつた。

そもそもチェコ侯国が、ボヘミア地方のチェコ人の部族諸國家を統合して、これらを主体とし、プルシエミスル侯の下に統一されたのは九世紀の終りの頃のやうである。ボヘミア地方の南に続くモラヴィア地方（今日のチェコスロバキアの中央部）のチェコ人はモラヴィア侯国をつくつた。この二つの侯国は、強大な中央集権力を發揮してゐたポーランド王国に所屬してゐた。つまり、ポーランド王国が全面に出て、西スラブ族の統合國家が出来上つた最大の理由は、西に敵国ドイツをやり、その侵略を防止するために協同の力を必要としたからである。

しかるにポーランド王国が弱体化したため、謂はば本家筋のポーランド王国に代つて、分家筋のチェコ侯国がスラブ諸部族を統合することになった。チェコ王国となったのは十二世紀のことである。

ヴァーツラフ二世（一二七八—一三〇五）はチェコ国王として、ポーランド、ハンガリー二国王をも兼ね、三国を統治するやうになった。この治世時に、ドイツの圧迫に苦しんだポーランド人はチェコ王国の中心地、ボヘミア地方に移住してきた。このポーランドによつて、チェコ人は大いに刺戟され、自覚を促されるものがあつた。それは民族意識の昂揚である。ヴァーツラフ二世統治の末期に、文語体としてチェコ語が登場し、ラテン語、ドイツ語がすたれはじめたのはこの傾向を示すものである。

カール一世（一二二六—一七八）がチェコ国王の王位についた頃、神聖ローマ帝国では、国内の有力な諸侯が集まつて、皇帝を選挙し、選帝侯を定める習慣があつた。

チェコ国のカール一世は既に「王」であり、「侯」ではないから、選挙からは外されてゐたのであるが、その格別の実力と人望のゆゑに、一三四六年、特に選ばれて神聖ローマ皇帝になつた。神聖ローマ帝国の皇帝となつた彼はカール四世と称した。

このカール王の時が、チェコ王国の黄金時代であつて、今日のポーランドの南西部（シレジア）、東独南東部（ルサティア）同中央部（ブランデンブルグ）、ルクセンブルグを併せ領土としたほどであつた。

このカール帝の下にあつて、チェコ王国の首都ブラハは東欧随一の繁栄を誇る文化都市となつた。同じ西スラブ人が、「黄金のブラハ」と呼び、彫刻家のロタンが「北のローマ」と呼んだのも、実にチェコ国中興の祖、カール帝時代の都市造りと諸文化施設の偉大さに負うてゐる。

今日のブラハでこの黄金時代を今に伝へるものはブルタバ川にかかるカール橋である。この川には十三の橋があるがこの橋が一番有名である。市内電車はこの上を走ることを避けてをり、文化財保護の意図は明瞭である。橋の両端に古い塔があり、十六の石のアーチからなつてゐる。橋の両側に聖者の肖像が並んでゐる。

この橋を西に渡れば中世の名残りをとどめる小地区（マラー・ストラナ）に出て、丘の上にはブラハ城（フラチャニ城）がそびえ立つ。カール橋東側のブルタバ川畔からみると、城の中央に高く教会の塔がみえる。これが城内にある聖ビート寺院である。

カール帝の一三四四年に北フランスから工事人を招いて工事を開始し、以後チェコ工事が引継いだ。その後何回も手が加へられてをり、十四世紀以後の各時代の代表的な芸術様式が折重なるやうに残されてゐるのも興味深い。

聖ピート寺院の背後にまはつてみると、創建当時の最古の部分が残つてゐるし、正面に回れば、入口扉の上部空間に黄金のモザイクによる宗教描写がみられる。

三部作をなし、中央部は、「最後の審判」の場面をあらはし、イエス・キリストの下方にカール帝とその皇妃を配してゐる。作者は、イタリアのヴェニスから招かれた芸術家達で、ビザンティン芸術の伝統をひくものであつた。このやうに城内の聖ピート寺院によせられたカール帝の宗教心は、そのままチェコ国内のカトリック教会及び、神父達の手厚い保護と優遇にあらはされた。カトリック・キリスト教会が経済的にも大いにうるほつたわけである。

カール帝のなした大事業の一つはカール大学の創設である。私は、古い図書館を案内され、古文献蒐集の莫大な量と、その整理のほどに一驚したが、特に医学関係文書が、医学の非常な進歩を示してゐたことに強く印象づけられた。

カール帝の時期にはじまるチェコ国民主義をその頂点にまでもたらした者がヤン・フスであった。一四〇九年、カール大学の総長に選ばれたことは、カール大学におけるこの種の運動の勝利を意味した。カール大学は、純粹にチェコ人のために創られたにも拘らず、大学の教師の多くはドイツ人であり、チェコ人学者が少数であった。

この状況の中で、フスはイギリスの宗教改革家、ジョン・ウイクリフの改革理論を殆どそのまま祖述し、講じた。ウイクリフのカトリック批判の主眼点は、教会の土地所有と、秘跡に対する自由解釈であった。

カール帝の死後、帝位についたヴァーツラフ四世（一三七八—一四一九）及び王室は全体として当初フスを支持した。しかし、ローマ法王庁はブラハの主教に対してフスによる宗教改革を取締るやう厳しく命じたのである。

フスによる宗教改革は、その先蹤をイギリスのウイクリフに仰いだとはいへ、墮落したカトリック教会と、チェコ人を圧迫するドイツ人に対する二つの抵抗であった。

一四一二年に、ローマ教皇ヨハネス二十三世はイタリアのナポリ国と戦ふことを密かに

計画し、その軍資金を得るために免罪符を売らしめたのである。フスのカトリック批判は、単に思想上の問題に止まらず、腐敗の事実を目前にしての現実批判でもあった。

大学に立てこもる多くのドイツ人学者とウィクリフの改革論をめぐる論争は、フスの勝利に終わった。彼の学長就任はこのことを物語る。

しかし、フスによって点ぜられた宗教改革運動は、チェコ国民主義の色彩ゆゑに決定的な弾圧を蒙らざるを得なかった。

一四一四年、カトリック教会の内部を正すといふことで、スイスのボーデン湖畔のコンスタンツなる町で開かれた宗教会議に召喚された。しかるに彼は、彼の改革的意見のために異端としてそこで捕へられ、翌年の一五年に火刑に処せられたのであった。

コンスタンツの宗教会議はフスに判決を下し、聖職者の権限を剝奪した。このための儀式すらとり行はれた。

聖服をとられ、髪も剃られて、「これは大異端者なり」と書いた帽子をかぶせられた。近頃はをさまったが、中国での紅衛兵による文化大革命運動によって、「造反派」「反抗派」とされた者がうけた辱しめの数々のうちで、何とこれに近似するものがあることか。

歴史はこのやうに繰り返されてゐるのである。

儀式がすんで司教が「汝の魂を悪魔に渡す」と宣告したのに対し、フスは「吾は魂をイエス・キリストに渡す」と言つて、十字架上のイエスさながら魂を神に委ねて、敢へて薪に火のつけられた火刑台にいさぎよく死んで行つたのである。

彼は生命にかけて「眞実」を守つた。眞実をかけた彼の情熱は、チェコ国民に燃える炎のやうに熱く昂まつた。「眞実は勝つ」といふフスの言葉は、第一次、第二次両世界大戦を通じてチェコ民族の標語となつたと言はれてゐるし、今回のソ連弾圧下においてもひるまぬ「自由化へのチェコ民族の叫び」は、フスの「眞実は勝つ」の精神伝統に根ざすのであらう。

フスは火刑に処せられた後、その灰は全部集められて、ライン川に棄てられたといふ。「汝の敵を愛せよ」を説くキリスト教が、その宗教の絶対性を主張せんがために、このやうな残酷な手段に訴へた憎しみと、不寛容の宗教史を何とわれわれは解釈したらよいのだらう。

イギリスの歴史家トインビーが、その息子のフィリップと対談した「二つの世代の間の

対話」で一番心ひかれる宗教論は、父のトインビーが、西欧宗教の不寛容性に心がうみ、疲れ、東洋の印度教、仏教、神道のいづれかに心ひかれると告白した個所である。この告白を迫る背景には、多分歴史家トインビーの脳裡をかすめる数々の歴史事件として、残酷な宗教史実があつたものと思はれてならない。

フスの最後については洵まことに涙なしではをられない。

捕へられたフスは火刑になる二、三週間前、一通の手紙を友人のチュルムのヤンに書き送った。

友よ、私の夢みた次の夢の意味を解釈してほしいんだ。ベツレヘム礼拝堂にあるイエスの聖画をことごとくこはしてしまはうとしたのは高位聖職者達だった。事実、連中は思ひの通りにしてしまった。ところが、翌日、私が起きて見たら、以前よりずっと美しく、数も多い聖画ができてみたんだ。私は喜びに充ち、それらの聖画を仰ぎ見た。画家や多数の群衆が声を揃へて次のやうに言ったんだ。

主教や司祭等にここに来てもらって、われのしつらへた聖画をこはしてもらはうぢやないか

と。

この夢解きはいかにあるか。手紙を受け取った一人の友のみならず、全チェコ民族に委ねられた課題ですらある。

おそらく、因習に束縛された宗教家の、繰返す弾圧にもかかはらず、「真実の宗教」は何回も弾圧の中から甦るといふ意味となるのであらう。

プラハの古い市街にあるベツレヘム礼拝堂は、フスの闘ひと生命の場所であった。さうして、二十世紀の今も、チェコ国民の「真実への情熱」を傾けた闘ひと生命の象徴的な砦となつてゐるのである。

(昭和四十三年十二月号)

第七章　ポーランド民族運動の拠点「カトリック教会」

ヨーロッパが、一つの文化、運命を共にする精神的共同体として意識せられたのは、中世紀全般を通じて、近東の地域とスペインに勢力をのびし、あはよくば更に侵攻を企てむとしてゐた回教のもたらした逆縁の恩寵なのである。回教徒団なる外敵に身をさらして、

一つの共同の敵にあたらねばならぬ時、ヨーロッパの内部に、騎士、王侯及び都市の間に内輪の争ひがあつたにも拘はらず、すべてのヨーロッパ人は、回教を奉ずるサラセン人の生活様式と文化に対して、これと異なつた一つの大きな単位、即ち運命を共同にする者であることを自覚するに至つたのである。

彼等をしてこのやうに自覚せしめた精神的なよりどころはそもそも何であつたかといふと、実にそれこそはキリスト教なのであつた。従つて、このやうな新しいヨーロッパの文化的、精神的運命共同体は、何より教会の言葉としてのラテン語によって最もよく培はれたとみられる。

ラテン語は、単に教会や神学者の言葉であつたばかりではない。広く学者の、また知識人にとつて共通の言葉ですらあつた。神学は勿論、法学、医学の著作はすべてラテン語で書かれた。知識人の文通はこの言葉でなされたくらみである。西欧は、共通の精神としてのキリスト教を鞆帯じんたいとし、ラテン語を共通語として広く生活様式の万般、芸術、建築、哲学の分野にも一つの色彩を加へたのであつた。即ち汎ヨーロッパ的性格を有つやうなものにしたのがそれである。

だから、ラテン語は、新たに生まれた各国の国語とは別に中世紀全体を通じて維持され、中世紀の大学は、ラテン語を媒介にして汎ヨーロッパ的な性格をもつてゐたといへるのである。

一九六二年六月のオハイオ州、ケニオン大学での卒業式、六三年のハーバード大学での卒業式に列席して面白いと思つたことがある。卒業証書は全部ラテン語で書かれてをり、それが読み上げられることだつた。殊に、ハーバード大学の時には卒業生代表の優等生が謝辞をラテン語で述べる慣はしがある。亡くなつた恩師の岸本英夫先生が私に言つてをられたことだが、壇上の教官達は、このラテン語の祝辞を解し得ぬとあつては教師の沽券こけん（体面）にかかはるといふのであらう。一人がさも解つたやうに笑ふと、一同それにならつて笑ふのださうである。事實は笑ふべき個所ではないのに。私が参加した時は、そのやうなへまはなかつた。この一例をもつてしてもわかるやうに、ヨーロッパ大陸の伝統から一応訣別したはずのアメリカが、二十世紀中葉の今日でも、依然としてヨーロッパの中世風の大学の古式にのっとりらうとしてゐることである。古式は何よりラテン語によらねばならぬのであつた。

汎ヨーロッパの意識を如実にあらはしたものがラテン語であるといふ点に加へるべき事実がある。それは十字軍の編成と派遣のことである。十字軍は、汎ヨーロッパ意識を軍事的にあらはしたものであるとみられる。

皇帝、王侯、騎士は、ただ一つローマ教皇の命によつて召集をうけ、ドイツ人、フランス人、イタリア人、イギリス人、ノルマン人等、皆一致してキリスト教を守る戦士として、遠く聖地エルサレムを回教徒の手から奪回するために赴き、戦つたのであつた。まさに兄弟として、キリスト教諸国家、諸国民が一致団結した。それは、またヨーロッパ対アジアの戦争であつたといふ見方をする人もあるくらいである。(後述するクーデンホーフ・カレルギーがさうである。)

ところが、イエス・キリストの代理者として、ローマ教皇が全ヨーロッパ・キリスト教諸国の上にふるふことのできた支配権について異議をさしはさむ者がやがて登場してきつた。それはドイツ皇帝である。ドイツ皇帝こそはローマ教皇より優位するといふ自己主張であつた。かくて両者の闘争はその後数百年も続くことになつたのである。

このドイツ皇帝とローマ教皇との間の闘争は、東ヨーロッパの諸国、例へばチェコスロ

バキアとポーランドのたどった運命を考へる上に極めて大きな影響力をもった歴史的背景であると思はれる。

ドイツ皇帝の意図は、ドイツの勢力拡張であり、そのためにローマ・カトリック教とドイツ騎士団（十字軍の一派）を利用したのである。

ドイツ騎士団は第三次十字軍遠征の時に、聖地エルサレムに向ふヨーロッパ諸国軍の傷病者救済を目的として結成されたものであった。しかし聖職者よりも騎士が中心となった修道士会であり、実状は極めて戦鬪的な団体なのであった。ドイツ皇帝は一一九八年にこれを独立の宗教騎士団として公認し、東方のスラブ人居住地区であったバルト海沿岸方面へ侵攻せしめてゐる。十四世紀はこの騎士団の全盛期であり、その所領は現在のポーランド北部、エストニア地方にまで及んだほどであった。

従つて、ドイツ勢力の進出を恐れる国々にとつて、ドイツ皇帝の対外政策は、キリスト教拡大の外形を装つてゐることを感ぜしめずにはおかなかつた。それゆゑ、ヨーロッパの一つの運命共同体たらしめる鞆帯としてのキリスト教が、逆に一国家の自立に対して、どのやうに働くものであるか。このことをよく見直し、かつ把へ直す必要があつたのであ

る。

この見方からすると、宗教改革は、ローマ・カトリック教の普遍主義、汎ヨーロッパ主義に対する民族的個別主義の主張だともみられやう。事実、既にみてきたチェコのヤン・フスの宗教改革は、チェコ語による国語運動であり、ラテン語といふ汎ヨーロッパ語に対する反対運動でもあったわけだ。フスが先蹤としたイギリスのウイクリフもまたイギリス語による国語運動の推進者であった。

しかし、汎ヨーロッパ主義の運動を展開し、そのやうな動きを歴史的に跡づけてみようとするクーデンホーフ・カレルギーの立場からすれば、宗教改革はむしろヨーロッパなる運命共同体の意識を内から破壊する動きであるとみられた。彼はこのことを「ヨーロッパ国民」(鹿島守之助氏の邦訳あり)の中で書いてゐる。ついでにふれておくと、カレルギーの父は、オーストリア・ハンガリー国の日本駐在代理公使であり、秀れた東洋学者であった。母は青山光子といふ日本女性である。明治二十八年に日本で最初に演ぜられた歌劇はゲーテ作の「ファウスト」であったが、その時、ファウストを演じたのが素人の彼の父であったといふことを三浦環女史が彼女の自伝「お蝶夫人」に書いてゐるといふ。さうし

た父と母をもつて生まれて来たのが著者である。

さて、ポーランドは、独立国家としての形成を十世紀末になしとげた。この場合、西にドイツ皇帝によるゲルマンの侵攻、東には後にロシア帝国となって強大化するキエフ侯国の侵攻を前にして一国の保全を図る必要があった。このため、西スラブ族としてのポルスカ人（ポーランド人は自分達をさう呼んだ。農耕人を意味したポラーニから来た語）に共通の国民意識を与へるものとして、キエフ侯国のものでもなく、また、ドイツ国のものでもない特色あるキリスト教を受け容れたのである。それはどのやうなキリスト教であったか。

キエフ侯国は十世紀末にウラジミール大公によつて東方キリスト教たるギリシア正教を国教として受容してゐる。

一 昨年の夏キエフを訪れた。私はドニエプル川の右岸に立つ「ロシアの町の母」と言はれる古都キエフを満喫した。暗いモスクワやレニングラード、あるいはシベリアに比べて明るく豊かな、正にソ連の穀倉にふさはしいところだった。街ではじめてかねて話にきいてゐたロシアケーキにお眼にかかった。西瓜も買ったが実にみづみづしかった。キエフ修

道院を訪ね、地下納骨所をみつけた時の喜びも一入だ。色々な思ひ出の中で今もありありと目に浮かぶのは、ドニエプル川を見下してゐるウラジミール大公の銅像である。彼は十字架を背負つてゐた。

インツェリストの案内人は、川で洗礼をうけてゐる国民をはるかに眺めてゐる像だと説明してくれた。「ロシア年代記」には、大公のギリシア正教を国教として受け入れた理由として個人的な、また偶然の事情をあげてゐるが事實は必ずしもさうではなささうである。彼は、スラブ社会に君臨する上に必要だとしてギリシア正教を政策的に利用したらしいのである。ローマ・カトリック教との教義上、儀式上の差よりも、大公にとって重要なギリシア正教の性格は、皇帝権の尊重であつた。儀式にはギリシア語でなくスラブ語を用ゐさせ、大公の権限強化とスラブ意識の滲透に役立たしめようとしたのである。

このキエフ侯国のかかげる宗教政策に対し、一国の保全のためにポーランドはギリシア正教を危険とみなした。一方、ドイツ皇帝のかかげるゲルマン侵攻戦略の一環としての宗教政策にも警戒しなければならなかつた。ドイツ国内のマグデブルク司教座を中心として、ドイツ皇帝はローマ・カトリック教を布教する政策をとつた。そこで、ポーランド

は、ドイツ司教座中心のローマ・カトリックでもなく、さりとしてまた、ギリシア正教でもないキリスト教を、直接、ローマ教皇直轄のローマ・カトリック教として受容しようとしたのである。

ドイツ皇帝とローマ教皇との間の闘争はむしろポーランドにとって幸ひであった。この方策をとったのはポーランド建国の父、ミエシエコ一世（九六〇—九九二年）であった。

私がポーランドで買ひもとめたアーノルドとズイチョースキイなる二人の共著の英文版「ポーランド略史」（一九六五年刊）によると、ミエシエコ王はドイツ侵略の危険をさけるため、同じ西スラブ族の国家であるボヘミア（チェコ）国のボレスロウの皇女ドブラバをめとり、紀元九六六年にローマ・カトリック教に入信、洗礼をうけたとある。これが、ポーランドが今日まで東欧における強力なカトリック教国となる端緒であった。私がポーランドを訪問する前の年、つまり一九六六年は、ポーランド国キリスト教布教千年の記念すべき年にあたってゐたのである。

ミエシエコ王がカトリック信者となり、「神の栄光」によつてポーランドを統治するといふ姿勢をとったことは中世において極めて重要であつたと著者達はこの本の中で指摘し

てゐる。

「神の栄光」といふ背景は、具体的には、隣国ポーミア及び、ローマ教皇直接の支援を意味したものであらう。現にローマ教皇は教皇直属の司教座をポーランドの首都ワルシャワにおき、ドイツのマグデブルグ司教座と相對せしむる形をとつた。

かくして、ポーランドのカトリック教は、ポーランド統一と自国防衛のための精神的靱帯となつて今日に至つた。

ポーランド・カトリック教団は、ドイツ・カトリック教団と結ぶことを潔しとせず、終始、ローマのヴァチカン、更にフランスのそれらと直結してきた。一七九五年に行はれたドイツ・ロシア・オーストリア三国によるポーランド分割の後も、教会はポーランド民族運動の抵抗の拠点となつたし、一九三九年、ナチス・ドイツとソ連に国を奪はれた後も、カトリック教会は同様な役割を果してきたのである。一九三九年から四五年まで、実に二千七百人の多くの神父達が、反ナチス抵抗運動のために貴い生命を失つたのである。だから、共産党支配下の今日のポーランドにあつても、マルクス流に「宗教は阿片なり」の命題をかかげることはできないのである。そんなことを言へば共産党の国民的基盤はくづれ

る。

九月二日、私はブラハから寝台車でワルシャワに向つた。ウィーンで買った全線指定切符はブラハ①から、チェコ国境のブレロン②を経て、ポーランド国境の駅、ゼブリイドヴィス③、更にカトヴィス④を経てワルシャワ⑤に行くやうにドイツ語・英語・フランス語で書いてある。東欧の国際性はこの三カ国語によく表はれてゐやう。

車中、ワルシャワ住ひの医師と知り合ひになり、彼の好意で「ホテル・ヨーロッパ」に一夜の宿をとることができたことは前に述べたことがある。早朝、ホテルについて、宿泊券を渡された時は本当にほっとした。

昼近くまでぐっすりベッドに入つてから、さて起き上つての最初の仕事は、日本学科のコタンスキイ教授と連絡をとり、ホテル滞在を延長してもらふことだった。

つい昨日まで旅に出てゐて今朝私の手紙を見たといふ電話の返事があり、昼すぎホテルに私共を迎へにきてくれた。早速、延長を交渉してくれた。あやしい人物に非ずといふわけでやっと承諾されたといふ。何でも近日中に、フランスのドゴール大統領一行がみえ、高官達が泊るので警戒を厳重にしてゐるためださうだ。それを予約なしに日本人がとび込

んで来たのだから問題なのは当然である。そんなことが後でわかった。

街に出てみた。「一九三九年、九月はもう沢山」と大書し、左側にピカソの書いた「廃墟の絵」がある大看板が目についた。この絵は、第二次大戦前、スペインでファシストの暴動があり、その情景がシンボル化されてゐるのである。

これらの看板は近く訪れるドゴール大統領に対する示威運動らしくみえた。私がポーランドを離れ、ハンガリーのブタペストに滞在してゐた時、私と入れ違ひにポーランド入りしたドゴール大統領の外交攻勢は、「中央ヨーロッパの概念をかかげて、ポーランドをソ連及び東ドイツから引きはなし、西歐ヨーロッパ、就中、西ドイツに接近せしめる方策」であつて、これを根気よく説いてゐるといふことを英字新聞でよんだ。えらい奴である。その辺を前もって察知してゐたポーランド共産党政府が、西ドイツによつて、一九三九年の痛いめに再び合はされてはかなはない、といふ意味での軽気球をあげてゐるやうに受けとられた。

ポーランドの誇る偉大な二人の科学者は、コペルニクスとラジウムの発見者キュリー夫人である。

コベルニクスの像をみてから、ワルシャワの街を貫流し、バルト海にそぐヴィスラ川のみえるあたりまで歩かうと思った。ヴィスラ川に接近したあたりがワルシャワでも一番古い街並を残してあるところであり、見逃すわけにはゆかないからである。

大統領官邸に近く、同じ道の側に屋根の上にペリカンの像をおいた建物があった。コタンスキイ教授に聞いてみたら、養老院といふことだった。屋根下の壁に Res Sacre Miser と書いてある。犠牲的 (Sacre) な慈悲 (Miser) を事 (Res) とする建物との意味で養老院となるのださうだ。ペリカンは母が己れの着物を子に与へる鳥類である。そこからペリカンをもって自己犠牲の愛を象徴する所以が訴へられるさうである。

この養老院の前方、丁度車道と車道の中央にあたるところに幼児イエスを抱くマリア—聖母子像が立てられてをり、新しい花が供へられてゐた。コタンスキイ教授の説明によると一五三三年にヨハネ三世が異教の回教王国トルコの軍隊を敗滅させた時、その感謝を表明して建立したのださうだ。

もしさうだとすると、ここでもキリスト教の神や聖者は、一国の戦勝をもたらず軍神として機能してゐることがわかるので、人類の思ひは共通だと思つた。(昭和四十四年一月号)

第八章 祖国よ生きてあれ——ポーランドの教会復興——

キュリー夫人の家に近い歩道に真新しい花や旗が掲げられてゐた。謂はば、家の壁にはめ込んだ塔婆代りのものである。

W TYN MIEJSCU DNIA 10 SIERPNIA 1944

HITLEROWCY ROZSTRZELALI 7 POLAKOW

と刻んである。一九四四年八月十日、ポーランド人七人がヒットラーにより射殺された、と読むのである。

彼等は、祖国ポーランドのためにナチスと闘ひ倒れた。その不滅の死をたたへるために、ポーランド国民は彼等に「聖者」の名を与へるにやぶさかでなかつた。

ポーランドの自由のために闘つて死し、ポーランドの血で聖者となりし所

(MIEJSCE USWIECONE KRWIA POLAKOW POLEGLYCH

ZAWOLNOSC OJCZYZNY)

といふ標示はこのことを物語つてゐる。

元来、カトリック信仰では、死後二つの審判があるとしてゐる。「個人的審判」と「最後の審判と名付ける人類全体の審判」の二つがそれである。死後いち早く死者の前に待ち構へてゐるものは「個人的審判」である。ここで、ある者は、生前の罪状により地獄におとされるか煉獄におとされるかする。たとへどんなに有徳の信仰者といへども、直ちに天国に行くことをゆるされはしない。ローマ教皇であっても例外ではない。このことは意外に異教の人達には知られてゐないのである。

天国に入る一番の早道は、煉獄にあつて「潜在的に聖者」である者にのみ開かれてゐる。

聖者となるのは、自からなるのではない。教会の權威によつて、聖者の列に加へられるものであることを「教会法、第一二七六条」で規定してゐる。この教会の權威によつて、聖者とするには手続きがある。先づ、「奇蹟をあらはした者である」といふ確認が必要である。この証拠をもつた申請が、幸ひにローマ教皇の承認するところとなつても、聖者の資格が有効となるのは、その承諾から五十年経つてである。だから、どんなに有徳な信仰

者であつても、天国に入るためには最低五十年間は煉獄の世界にあつて天国行きを待たされるのである。だからこの間は「潜在的聖者」にとどまる気の長い話だが、それだけ聖者の列位は嚴重だとも言へるのである。

かうしたローマ・カトリック教での取扱ひを認識してかかれば、祖国のために殉じたものが、その流したポーランドの血によつて聖者とされるといふことは、見方によつては破天荒である。この破天荒が可能となるのは、「聖者」の用語が、教會的文脈を離れて、まさにポーランド国民感情の文脈の上で自由に生かされてゐるからであらう。

祖国に殉じてポーランドの聖者となる
は、

祖国日本に殉じて靖国の社にしづまる英霊となる

と同一の発想である。こんなことを思ひ浮かべながら、ワルシャワの古い街々を巡つた。

DAMIECI KOLEGOW CECH SZEW COWI 1939～1945

一九三九～一九四五年没の靴屋達 (SZEW COWI) の「座」(CECH) の仲間 (KOLEGOW) の記念 (DAMIECI) のために、とポーランド語で書かれた記念碑もあった。

江戸の下町をみれば今も東京にその名残りとどめるやうに、何所でも古くから、同一職業の商人や職人が相寄って、商人街、職人街をつくつてゐた。ご多分にもれずワルシャワもさうであつた。

靴屋をはじめ、職人組合は「座」(CECH)を組織してゐた。商人は商人でギルド(GILD)を組織してゐた。これらの「座」や「ギルド」が単位になつて市民防護団をつくり、ナチスドイツの軍と闘つたといふ記念碑は一般市民の慰霊碑と共に各所にある。極端な言ひ方をすれば、ワルシャワ市内全部がこの種の慰霊碑で埋つてゐる。

市内にはユダヤ人収容所跡、また反ナチス運動抵抗者収容所跡が今も記念施設として残されてゐる。殊に後者の正門前の大木には犠牲者の思ひ出や慰霊のための掛け物がぶらさげられてゐて、何とも言へぬ凄惨な感じをそそる。

元来、このユダヤ人収容所はユダヤ人街を中心に急ぎ設けられたものであつた。ヒットラーの軍が侵入してきて手掛けた仕事の一つに、各キリスト教会、ユダヤ教会に、ユダヤ人信者の名簿を提出せしめることがあつた。何のためにこのことが必要かは、当時の段階ではポーランド人には誰一人として知る者はなかつたと言はれる。提出をこぼれば生命は

ないし、こばむ理由もないとなれば致し方ない。

世にいふユダヤ人刈りの基礎資料はかうして敵の手に入ってしまったのである。

私共を案内したコタンスキイ教授は、元来、生まれ育った住居がここに隣してゐたため、収容所建設のために立退きを命ぜられた一人であつたし、最後にはナチス抵抗運動者の一人として、ここから遠からぬ「反ナチス運動抵抗者の収容所」に監禁された身であつた。だが、消えぬ心の深い傷を意に介さぬ第三者のやうに淡々とした素振りであつた。それほど時間も経過したわけであらうか。

ユダヤ人収容所のまはりは金網で囲み、大きく「ペスト」と書いた標札を張りめぐらしてゐたといふ。ペスト菌があるから危険！立寄るなどいふ式に、外向きは伝染病患者隔離所の体裁をとつた。事実はこの内側で、飢餓と悪性の病気でユダヤ人の自然消滅をはかつたのである。

私共のとまつたホテルの近くは、いはば東京の丸の内、その皇居前広場にあたる所に無名戦士の墓がある。陸軍の衛兵がおごそかに警護してゐる。運よく一月一度の護衛隊交替式に際会した。市民の人垣で写真をとるのも容易ではなかつた。大勢の群集の中に東洋人

はわれわれ二人きりである。われわれを除く他は同朋としての深い感激にひたつてこの儀式を見まもり、感情的にこの国民儀礼に参入してゐたのである。

街々にある第二次世界大戦の犠牲者の碑、ユダヤ人収容所、反ナチス運動者監禁所、無名戦士の墓と、ワルシャワの全市は、くまなく第二次大戦の悲劇的追憶にまつはりつくやうにしたてられてゐる。この祖国の破壊は、ナチス、ヒットラー軍のなしたところ——勢い悲劇的回想はドイツへの敵愾心をそそることになるのである。

一方、新生ワルシャワの象徴は三十七階の高層建築「文化科学宮」である。附近には高層建築物はないから、クリーム色のこの建物は、文字通り「宮殿」(Palac)の名をほしくまましてゐる。場所も、ワルシャワの新市街「新世界」(NOWY SWIAT)と平行するワルシャワコウスカ大通りに面してゐる。この建物は、ポーランド全労働者、農民の浄財を基金に、ソ連が大幅に援助して建設されたものである。ソ連の威力を誇示したともみられ、

建設のソ連

破壊のドイツ

といふ二元対立は、ポーランドを色どる基調とみられた。このために、ポーランドの共産党政府は腐心してゐると私はみてとつた。だが、市民は黙しつつかの二元の間を微妙に曲折し、流動してゐるところがある。大国に囲まれた小国ポーランド民衆の生活の智慧がこの種の流動性を生んでゐるとみられた。それが時として、ワルシャワ大学生を中心とした反ソ連的自由化運動（昨年おこつた）のやうな形をとつたり、また、隣国のブラハ事件にあつて、チェコの親独的傾斜を否定する反独的姿勢をとらしめたりするのである。

新世界でファッション・ショーをみた。自由化はここまで来たかと驚いた次第だが、この自由化の行きつくところは、チェコのそれと違ふものがあらう。いくらドゴールが数日滞在して「東独、ソ連を除く中央ヨーロッパ」構想を打出しても、ソ連と手を切り、ドイツと結ぶやうな自由化は實際上、力関係からみてあり得ないことである。特に全ポーランドを破壊したドイツに対する敵愾心をこえ、それこそ「恩讐いんじゆうの彼方」へゆくことは国家勢力としてはあり得ない仕組みにがちりさせられてゐる。

それにしても、新しい世代のドイツ人の心意こそどうなのか、ヨーロッパを旅しつつ一番考へさせられたことだった。人類史上最大の極悪人のレットルをおされたドイツ人は国

内ならいざ知らず、国外では何時も背中に指をさされる思ひに違ひないと。たまたまブタペストからウィーンに行く汽車でドイツ人親子と同席する機会があった。父は鉄道職員、娘は高校の三年生だが英語が巧みで、私共と親との会話を間に立って通訳してくれたほどである。ドイツでは、戦後、中学から英会話を教へてゐるさうだ。

この子の話だと、小学校の歴史の時間ではヒットラーについてはふれずに通すといふ。逐次高学年にすすみ、批判力があるやうになってから、微妙な人間ごと、国際問題などを教へるやうにするのは賢明なやり方だと大人顔まけの評価をしてゐた。

彼らはルーミアアの親戚のところへ夏休みに行つて帰国するところだった。父親が車中の読物にするために携帯したのかどうかよくわからぬが、一冊の一般向け「ドイツ史」を私にみせた。勿論ドイツ語で書かれたものである。

ヒットラーがポーランド侵入を試みたのは、そしてやがてそれが第二次世界大戦の発火点となつたのは、列強によるヒットラー暗殺計画が未然に発覚し、これによつてヒットラーが激怒したからだ、その記述の個所をひらいて私に説明するのだった。

偶然のことだったかも知らぬが、旅する者が自国の歴史書を携へてゐたことに驚きも

し、ヒットラーの世界侵略に対する弁護論を用意してゐて、たちどころにその証拠に歴史書の必要個所をみせてくれた鮮やかさには更に驚かされた。

その子はその後忘れずにクリスマスカードを送ってくれた。その後このことを思ひつつ、私はこんな想像を逞しくした。

凡そドイツに国籍をもつ者が欧米を旅する時は、四面敵中にある思ひである。それで、何時も歴史の弁証を必要とするのではないかと。

ワルシャワの旧市部に中央教会が立つてをり、正式の名称は「ワルシャワ 聖ヨハネ会堂」である。これはワルシャワ最古の教会の一つで一二七〇年にマゾヴィア (Mazovia) の領主ヤヌス (Janusz) によつてつくられた。この建物ができる前には、これと隣り合せて、十三世紀にできた木造の教会があつて教区の教会として活動してゐた。

十六世紀に正面塔が建てられたが、ひどい嵐でこはされたので十七世紀になつてバロック型で再建された。

十六世紀末、ワルシャワがポーランドの首都となるや、マゾヴィアの領主、後のポーラ

ンド国王はこのヨハネ会堂に王室の特別の保護を約束したのである。

このやうに由緒ある教会が一九三九年の空襲により無惨に破壊された。再建されたのが一九六〇年である。折よく私が訪れた時、内部で「教会復興展」が開催せられてみた。

入って目につく一番大きい特色は、一ユダヤ詩人の一節が高く掲げられてみたことである。

「神よ！ 何卒吾を祖国に帰し給へ、そして、祖国が純粹になるやうにさせ給へ。

よし祖国は貧しくとも、生きてあるやうに！」

この詩の作者はJ・ツウイン (J. Tuwin) といふユダヤ系ポーランド人である。彼が一九四〇年から四四年にかけて作った叙事詩「ポーランドの夜」(KWIAATY POLSKIE)の一節である。

このやうなユダヤ人の詩が、キリスト教、カトリック教会にかかげられることはポーランド・キリスト教史上つひぞなかつたことである。彼は南米に亡命してみたが戦後帰国し、惜しくも十一年前に亡くなった。

師のイエスを裏切ったイスカリオテのユダは「この盗人奴のユダヤ人めが！」といふやうな語源的解釈が、成り立つとせられるくらゐ、キリスト教の敵はユダヤ人であると伝統的にせられてきた。

そのユダヤ人が教会復興の全体を性格づける呼びかけの言葉を用意したといふことは想像を絶する転換であると言はなければならない。

このかつての狭いキリスト教徒、ユダヤ教徒といふ宗派意識をこえ、教会再興を願はしめる最大の根基は、ツウインの詩にみえる、

神よ、祖国は貧しくとも、純粹に、生きてあらしめ給へ

といふ、永久の祖国生命に対する大衆の悲願、全国民的祈願にほかならないことを知るべきである。

展覧会場には、九世紀頃、聖母マリアに、

神よ勝利を与へ給へ

と念じた騎士の歌が美しく背景の音楽として流されてゐた。

中央教会の中央祭壇には、イエスを抱く聖母マリアの像が祀られてゐる。この聖母子像

の前で、祈って与へられぬものはなしといふ固い信仰が今に伝はつてゐるといふ。

すると、聖母マリアに「神よ勝利を与へ給へかし」と祈る中世騎士の歌が、背景の音楽としていかに効果的であるかがますますよく納得されてくる。さうしてこの中央教会を舞台とする教会復興展がめざすものを鮮やかに浮き立たせようとしてゐる。その一事こそは

祖国の復興

であつた。教会のために祖国があるのではない。祖国のために教会があるといふことをこれほど明瞭に告げるものはないのである。

(昭和四十四年二月号)

第九章 祖国なきところに宗教はあるか

——キユリー夫人の生家を訪ねて——

人類学、社会学、社会心理学等の最近の社会科学の諸分野では、一つの文化の中で生成され、維持され、継承される人間の考へ方、感じ方、振舞ひ方、つまり行動の型態を「主観文化」と呼ぶことがある。この主観文化は、外に現はされた文化現象——文学・芸術・

宗教・教育・政治等、客体化された「客観文化」に対応する概念である。

今これを政治に例をとると、政治を本来どう見、うけとめてゐるかの基本的考へ方、感じ方は主観文化の一部をなす政治文化である。それに対し、具体的な政治制度は客観文化としての政治形態になる。

何故このやうに多少理屈めいたことを前置きにするのかといふと、主観、客観の二面に文化を分けて考へることが、共産主義または他の強力な階級思潮の圧迫下にあるアジア、アフリカ、そして東欧圏の文化を理解する上に必要な視点となると信ずるからだ。

例へば東欧の鉄のカーテン中のチェコやポーランド、ハンガリーの場合、共産党治下の、共産主義体制を必然的に生み出す主観文化と軌を一にするものであるのかといふと、さうはゆかない。この三国の文化的精神風土は、決してソ連を志向せず、むしろ西に向いてゐる。三国の主観文化は本来的にソ連的でなく、「西欧的」なのだ。

勿論、このことは第二次世界大戦を契機として、ソ連が軍事的に進出し、三国における共産革命を力でもって仕組み、推進した歴史事情と深くかかはつてゐる。だが、依然として一国の主観文化は西欧型であることに変りがない。かうした事態のところ、東欧諸国

の客観文化としてソ連型を無理矢理に押しつけ、陰でこれらのあやつり手となったソ連そのものに多少西に向く自由化がはじまった。さうなれば、本来、眠れる竜であった彼等の主観文化が、息を吹き返して西欧に向かうとするのも無理がない。ハンガリー事件、ワルシャワ事件、チェコ事件の累発はかう分析すればよく理解できるであらう。

さて、同じ本来的に西欧を向く主観文化といっても、具体的には西欧のどの文化を指すかといふと国々によって多少異なる。ポーランドの場合ではフランス文化であることに注意したい。

一九六六年、滞日したワルシャワ大学のコタンスキイ教授が帰国にあたってのお別れ会が東京、恵比寿のポーランド大使館で、大使の主催でひらかれた。私は招ばれて行って、夕食の料理に驚いた。全部が完全にフランス料理である。それで私はポーランド人の生活の根底にある様式について聞いたのだが、その時はじめて「西へ就中、フランスに向く文化」がポーランドのそれだといふことを実感した。彼らのソ連観が田舎者の文化に対する嫌悪に近い感情でつくられてゐることもわかった。

このやうなポーランドの主観文化の性格にフランス文化への強い傾斜がみられるのは、

ポーランドの歴史そのものがその解答を出してくれてゐるやうに思へる。

十八世紀におけるポーランドは、大ロシア帝国、北にあるフリードリヒ大王のプロイセン王国、西南にあるマリア・テレシアのオーストリア、ドイツ連邦国の三強国によって内政干渉を受けるに至つた。

ポーランド王アウグスト三世の後を誰にするかの国王選挙にあつては、大ロシア帝国イェカティエリーナ女帝の寵臣が、彼女の武力干渉によって国王にされた。それがスタニスワフ二世である。これは全体としてポーランドが大ロシアの勢力範囲に入ることとみてもつたプロイセンのフリードリヒ大王と、オーストリアのヨゼフ二世は、共に相はかつて、このやうなロシアの東欧政策は勢力均衡を破るものであるとして、却つてポーランドを三国で分割する案を出したのである。

一七九一年三月五日、三国分割下にあつたポーランド愛国者達は国内のロシア勢力を一掃するため兵を起したが敗れた。勇將のユゼフ・ポニャトフスキ（一七六三—一八一三）はフランスに逃れ、後にナポレオンの軍に入って勇名をはせた。また、農民兵を組織した名將タデウシュ・コシチューシユコ（一七四六—一八一七）は、アメリカへ逃れ、後にワシン

トンの副官となつてアメリカ独立戦争に偉勲をたてたのである。

この後、ロシアは、西欧諸国がフランス革命にかかづらひ、オーストリアのごときも、フランス革命軍との戦闘に追はれてゐるすきに、更にポーランド分割地を拡大して行つたのである。

かうした情勢の中で、ポーランド人はむしろフランス革命の強い影響をうけ、革命軍を組織して武装蜂起した。ポーランド人が分割支配した三国に対して強い敵愾心を抱いてゐることを知り、むしろポーランド国復興をはかり、これによって三国を牽制しようとしたのはフランス王ナポレオン一世であつた。

彼は、一八〇九年にはプロイセンの分割地域をば、ザクセン侯をいたたくワルシャワ侯国に返還せしめ、フランスに範をとつた憲法を制定せしめた。しかし、ナポレオン自身、ロシアのモスクワ遠征に失敗してから、今度はロシア皇帝アレクサンドル一世が兼ねて王となつたポーランド王国ができあがつてしまつたのである。これは一八一五年のことであつた。

アレクサンドル一世の後、ロシア皇帝となり、同時にポーランド国王を兼ねたニコライ

一世は、ポーランド王国の憲法を改正し、王国の弱体化をおしすすめた。これに反抗し、フランス革命思想に強く動かされたポーランド人は一八三〇年から翌年にかけて革命行動に出た。だが一八三一年九月に鎮圧され、完全にロシアによってポーランド国家は滅亡した。ロシアの圧制下に呻吟するポーランドの運命はこの時から始まったのである。

ポーランド史は、一応一九世紀後半の約五十年間を受難時代としてゐる。しかし、今日もまたその受難時代の延長ではないと誰が断言し得よう。

実はこの第一次受難時代のさ中にポーランドが生んだ偉大な科学者、キュリー夫人がワルシャワの古い市部にそのうぶ声をあげたのである。

一八六七年十一月七日、ワルシャワの、古市場から程遠くないフレタ街に、数学と物理の教授であるスクロドフスキの次女として生まれた。

この一角は、第二次世界大戦で完全に破壊されたが今日は見事に復興されてゐる。街並を形づくる家々の配列を尊重して古型を復元しようとする努力は、共産圏、自由主義国の別なく行はれてゐる。

私はソ連ウクライナ的首都、キエフにある大修道院（キエフ・ラボラ）を独り訪れた

時、中心のドームを原型に復興しつつあるのをみて、「宗教否定の共産圏においてすら、なほこのやうな宗教施設の復元化がある。これは一体何を意味するのだらうか」と省みたことがあった。

キュリー夫人の生まれた時、母は若い娘たちのための寄宿学校を開いてみた。そこが彼女の生家であり、いま復元されて記念の研究所となつてゐるところである。私は、この記念の生家の前で、キュリー夫人の生涯にあらはれたポーランドの典型的な主観文化を思ひみたのであった。

五才になった彼女（愛称はポーランド語でマーニヤ）は、色の青白い、金髪のはつとした、少し出張った額の下の眼は灰色の子であった。驚くほど早熟で感受性が強く、読書力は姉のブローニヤをはるかにこしてゐたと言はれる。

さて、子供等の小学校にはおそろしいロシアの督学官がときとしてやつてくる。ロシア支配下のポーランドが教育制度としてもった暗い面であった。この時、きつと質問をかけられるのは彼女であった。鐘が鳴ってロシア人督学官の到来が知らされると、すべてのポ

ーランド語の本が、先生と生徒の暗黙の了解によって即座に姿を消したのである。何故ならロシア語のみが許された唯一の言葉であり、母国語の教科書も、母国語による教育も許されてゐなかつたやうである。

彼女は非常に正確にロシア語を話すことができた。彼女は督学官の前で、イエカティエリーナ女帝以後の王統をついだロシア皇帝の名、また、ロシア帝室の全構成員の肩書きを間違へず暗誦する。すべて完全なロシア語でなされた。

いはば彼女が全校生にかはつて、ロシア式教育の見事な修得振りをご披露するのであった。しかし、これは幼い彼女に極度の神経の緊張を迫るものであった。だから、督学官が行つてしまふと、わつと泣いて身をくづしたほどである。「年端の行かぬうちから、彼女はロシア帝政の抑圧を身をもって体験した」といはれてゐる。(ワーニイ・コットン著、杉捷訳『キュリー家の人々』七頁参照)

彼女の父は、ロシアの上司達が希望するやうな柔軟性をその勤務振りにおいて示し得る人ではなかつた。だから、父の教授の地位は甚だうだつの上らないものにとどまつた。それが一家の生活を不如意にした。彼女が幼くして味はひ、成長期に闘はねばならなかつた

家庭の貧しさは、一に父が異国人の圧制下に「ポーランド魂」を發揮したところにあつた。

十四才の少女時代、ロシア政府の經營する女学校に通つてゐたころ、勉学の興味とは別に、少女の愛国心はしばしば辛い試練にあふことがあつた。

例へば、彼女のある級友の兄が警察にあげられ、夜明けには絞首台にのぼるだらうといふことを知つた。そこで彼女と級友のカージャはこの運命をになつた兄をもついま一人の級友とともに、「息づまる一夜をあかし、その時の感動が彼女たちの愛国心を倍加した」といはれてゐる。

父のスクロドフスキー教授は、この上もなく広い教養の持主であるから、彼は子供達にロシアの圧制に抵抗するやうに国民を助ける詩人達の詩をよませたといふ。

キュリー夫人の愛国的な夢の呼びかけは、かうした彼女の家庭と教育環境から生まれたものである。彼女は長ずるにおよんで、自分の愛国的な夢の呼びかけに昇華して行つたのであつた。

途中彼女にも女らしい恋愛の時があった。愛人カジミール・Zが彼女との結婚をためらってゐることを一八九一年九月、カルパチアの山中で彼に会って確かめ、遂に決定的な別れをした。

これが、一時そこから離れたと自分でも思った学問の道に、再び新しく生きるやうにさせた強い原因とみられる。フランス・パリへの出発は、祖国ポーランドの人たることをやめ、永久にフランス国籍の人たらしめる運命的な第一歩となった。

一八九四年春、二十七才の彼女は、三十五才のパリー生まれのフランス人ピエール・キユリー氏に出逢った。ソルボンヌ大学で三年前から勉強してゐて、物理学の学士試験に合格したときの彼女であった。ラジウムという霊妙な物体の発見につらなるキュリー夫妻の偉業は、この時の出逢ひに発したのであった。

夫の業績に捧げた彼女の著書の巻頭には、世界がさらされるかもしれない放射能の危険について、ノーベル賞受賞に際して亡き夫が述べた言葉をあげてゐる。

犯罪人の手にかかればラジウムは非常に危険なものになりかねない。……人類は自然の秘密を知ってはたして得をするであらうか。その秘密を利用できるほど人類は成熟してゐるだらうか。……

キュリー夫人は、科学者の道のなかに一種の聖職者、宗教家の使命をみてゐたといはれる。

弟子が研究生生活に入りたいといふ意見を表明したとき、彼女が与へた忠告と警告は、あたかも「宗教の門に入らねばならぬといふのに類してゐた」と書かれてゐる。

彼女は科学研究のなかに、知ること讃美することへの渴きをみたす手段をみつけてゐたのである。あたかも、宗教者が誓ひをたて、修道院のなかに神を識り、神を讃美する渴きをみたすやうに。

だが、私はここに一つの疑問をもつ。かうした宗教者の求道生活にも比せられるやうな科学生活に没頭したキュリー夫人に何故具体的な宗教が積極的にかかはることがなかつたのかといふことを。

既にみてきたやうに、幼くして培かはれたポーランド人としての愛国心の夢の呼びかけは、異国にあつて充たさるべくもなかつた。国境にかかはることのない自然の真理、その前にぬかづく敬虔な科学者の道のみが、聖なる美への愛にかはりえたのではなかつたか。一体、宗教は、よしそれが人類普通の救済を説く宗教においてすら、宗教受容の基盤に一国の独立がぬきにされてゐては、その生々しい働きはないのではないかといふことを思はざるを得ない。

東欧諸国におけるカトリックのあり方を省みながら自づと湧起してきた考へだが、いままた、キュリー夫人における科学と宗教の関連を思ひ浮べて、さう思つてみたのである。

私の家内の恩師は、御茶の水の女学校時代に物理を教へて下さつた湯浅年子先生である。家内は、一九六三年の滞仏中、ソルボンヌ大学、キュリー研究所に、いまは誰一人知らぬ者のない日本女流物理学者の第一人者湯浅先生をお尋ねしたが、どうしても探し得なかつた。

帰国してからわかつたのだが、日本からの来訪者が多く、ために研究生生活が妨げられる

ことをおそれて、居所を明瞭にしてをられないのだといふ。それが本当なら、湯浅先生自身、尊敬する生涯の師、キュリー夫人にあやかつてをるのである。

家内は私に言った。「私が訪ねあぐねたことを知っていたただくだけでよいのです。それがかへって先生の生き方のお邪魔にならずにすんだのだから」と。

ポーランドのワルシャワ巡りで、私が一番妻に尽し得た最大のことは、キュリー夫人の生家を案内してやれたことだ。かうして歴史に出会ふことは、真に生きる一つの生き方だからである。

(昭和四十四年三月号)

第三篇 「日本のいのち」の人類史的意義

(編者註) 本篇は、国民文化研究会主催の第十九回「全国学生青年合宿教室」での講義録であり、昭和五十年同会刊『日本への回帰 第十集』に収録されたものである。

冒頭「小林先生」とあるのは、小林秀雄氏のことであり、この前日に同じ教室で、「信ずることと知ること」(同『日本への回帰』所載のちに文春文庫『考へるヒント3』及び新潮カセット文庫『小林秀雄講演』所収)と題して講義をなされた。

「日本のいのち」の人類史的意義

徹底して知るといふこと——本質の直観

昨日の講義で小林先生は、知るといふことは万人に通じるやうな知り方でなければならぬし、同時に万人に通ずるやうな仕方であったことを表現していかなければならないと、さういふ意味のお話をされました。私はそのことに関しまして、万人に通じるやうに知るといふことは、知り方を徹底することなしにはありえないことだと思ひます。知り方を徹底すれば、それはものを考へるといふことは何であるのかに、どうしてもつき当りません。万人にわかる仕方を知るといふことを徹底すると、「ものを考へる」といふことをどうしても本当に考へざるをえなくなるわけです。さうして、それは「ものを信ずる」といふことに近づいて来る。さういふ意味で私は大変至らないながら、徹底して知るといふことを営んでまわりました。その場合に私がとりました方法は「比較」といふことです。例

へば人間が生けるといふことを徹底して考へる場合に、人間でない生きものの生き方との比較においてそれを知って行かうとするわけです。

そこで単純な例ですが、ダニといふ生きものを考へてみます。ダニには目玉といふものは特別になく、身体全体の皮膚感覚でもって光を受け取るやうになってをります。それで身体全体で光を受けると、その感覚から動き出します。たまたま高いところにダニがをりまして、その下のある生きものが通ります。多くの場合哺乳動物です。すると、その哺乳動物の皮膚から、専門的に申しますと、核酸といふ、すっぱい酸の臭ひが発するんださうです。その臭ひが一つの行動標識になります。「おい、落ちろ」といふ信号になってダニに通じるんです。その臭ひをかぎ、行動開始の信号を得て、ダニは高い所からぼつと落ちます。落ちますと、その落ちた哺乳動物の皮膚の上で、大体二〇度から三〇度ぐらゐの、いはゆる温血動物の適当な温度にぶつかるゝと動き出すやうに仕組まれてゐます。この適温が「動け」といふ第二の行動の指令となるらしいのです。そして、動き出してから毛のなゝい部分に到達しますと、「刺せ」といふ信号が出るんです。それで、ぶすつと刺し、哺乳動物の血を吸って、大体豌豆ぐらゐにふくらんで栄養をたっぷり吸ひ込みます。それがダ

二といふ生きものの活動生命の終りです。このダニにみられる姿は非常に簡単な生物の生き方の典型です。実は、ユクスキュールといふ大変注目すべき動物行動学者が、『生物から見た世界』といふ研究書の中で、そのやうな研究をやつてをるのです。そこで彼は、例へば今のダニに代表されるやうな下等な生物の生き方は、さういふ一定の信号のみをうけるとそれに基づいて決つた行動のみをおこすやうにきちんと決められてゐることを分析して、それは要するに「確実に生きるため」であると結論しました。実は、ダニを取りかこんでゐる世界そのものは、私ども人間の場合と同様、非常に広大なものです。しかし、さういふ世界の中で生物は確実に生きるために必要な刺激だけを選んでそれに反応して生きていく。世界は広大であるが、関係をもつて生きる環境は非常に狭められてゐる。これは一番確実なるが故に、一番簡単な生き方をさせられてゐる典型的な姿なのです。

その点、一体人間の場合はどうでせうか。人間にとっては、ただ生きる、確実に生きるといふことは自明なことなのです。それでは、「確実に生きる」といふことのほかに、人間にはなにが加はつてゐるのかと問ひ直してみませう。さうするとあるではありませんか。それは一言にして言へば、「豊かに生きる」といふことだと思はれます。では、豊か

に生きるといふのはどういふことを考へてみます。人間を取りかこむ広大な世界といろんな関係をきり結んで、自分の生きる環境世界を非常にひろげて豊かにしていくといふことなのです。そこで、豊かで広大であるためにはどういふ働きがあるのかといふことを突きつめてみたいと思ひます。

例へば、ここに十字架があつたとします。この十字架を、例へば「あ！ 十字架！ あれは死刑の道具だ」とかうお考へになる方も多いと思ひます。ところが、キリスト教徒にとっては、単なる死刑の道具ではなく、それは神聖なシンボルです。なぜか。イエス・キリストは十字架において死に、そして三日にして死から蘇つた。パウロが新約聖書の中で言つてゐますが、それはイエスの死と復活といふ事件に対する意味付けです。それによると、人間の祖先は神の命に背く根源的な罪をかしてをり、その子孫なのだから、所詮救ひにあづかれない。だから、十字架のイエスと一緒に接ぎ木されて一緒に死ぬ。そして、今度はイエスと一緒によみがへつて来るほかない。その象徴物が十字架なのだ、とかう言ふのです。

ところが、今度は十字架を使ったすごい小説が書かれ、また映画化され、日本でも上映

されました。それが『エクソシスト』です。そのなかで、十四歳の女の子に悪魔がついて、その少女がものすごい姿を呈するわけです。その中で一番の衝撃的な場面は何かといふと、その少女が十字架を使ってマスターベーションするところです。それで、ニューヨークなどでは、たくさんの人が卒倒した。日本でも二、三卒倒した例があると報道されてみますが、それはマスターベーションの場面ではないんです。ところが、ニューヨークなどではそれが多い。なぜか。今言ったやうに、十字架に関し、或る特別の視点——例へばキリスト教のやうな——を持たない人にとっては、単なる品物にすぎません。死刑の道具にしが見えない訳です。ところが、キリスト教を信ずるものにとっては、その十字架は根源的な罪を背負った自分が救はれていく、かけがへのないものなのです。キリスト教徒は、十字架と価値的に結びついてゐるのです。それをいなくことにおいて値打ちがあるのです。ところが、こともあらうにそれがマスターベーションの道具に使はれたとなるとどうでせうか。それは冒瀆以外の何物でもありません。ショックなんていふものぢやないから、それこそ卒倒してしまふのです。これは単にものものとして見ることでずんでることではなく、価値的に結びついて、値打ちあるものとして、自分に関係を結んで行く見

方がある、といふ非常にいい例です。

もう一つ、今度は目には見えないのですが、耳で聞いて言葉で聞ける場合をみてみませう。「キャン ユー シー ザ スター イン デイ タイム」って言ったら、君たちはなんと答へますか。「真昼間に、あなたは星を見ることができませんか」、と聞いたら君はどう答へますか。今の英語教育を学んでをれば、普通なら「ノウ アイ キヤント」と答へるだらう。ところが、昨日の小林先生のお話を聞いてゐるみなさんは、「イエス アイ キヤン」と言へるかもしれないでせう。小林先生は柳田先生が子供の頃の貴重なお話をなされた。柳田先生が十四歳の時、茨城県の布川で、隣の小川家の土蔵の前にほこらがあつてその中が見たくて、あけて見たら、蠟石ろうせきがあつた。それでびっくりして、青い空を見たら真昼間に星がまたたいてゐたといふ。それでさうした神経、さういふ神経があるが故に柳田さんの民俗学は本物だつていふことを昨日おっしゃつた。今日の私の話は違ふけれど、昨日の小林先生のお話を聞いた諸君は、「キャン ユウ シー ザ スター イン デイ タイム」と言ったら、「イエス アイ キヤン」と言へるはずである。ところが、馬鹿の一つ覚えみたい「ノウ アイ キヤント」と答へるなら、さう答へる人は、心が

閉ぢてゐるといふことでせう。心が開かれてゐれば、あらゆる場面を考へることができ
る。一辺倒にならないんです。しかも一番大事なことは、真昼間に星を見ることができ
るといふこと、それは人間の特徴でもあるといふことです。先程申しましたダニは、空間世
界で正確に生きるために、極めて狭められた空間だけに自分を取り結ぶ。だから、「スベ
イス バインディング アニマル」と言ふのです。まさに「空間を結ぶ生きもの」なん
です。ところが、人間は「スペース バインディング」は当たり前でして、同時に、「タイム
バインディング ビーイング」なんだ。まさに「時を結ぶ生き者」なんです。過去
も、現在も、そして未来も、時間的に、そして空間的にも無限へとはるかに飛ぶので
す。それが「豊か」といふことの実体なんです。その豊かさの最たるものの中に、昼間星を見
ることがある。さういふことができるのです。ある観点だけにとらはれてものを見るに
止まれば、「ノウ アイ キャント」ですんで了ひます。ところが、「イエス アイ キャ
ン」と言へる、その一番大事な経験として、人間は昼間星を見得る、昼間夢を見ることが
できる、といふことなのです。昨日柳田先生が書かれた『故郷七十年』の中の「或る神秘
なる暗示」のお話を聞いてみて思ったのですが、十四歳の柳田少年は、蠟石におばあちゃ

んの魂を見ることができたのです。しかし、一方で生きてゐる人の魂も見得るし、感ずることもしる。これは人間にのみあり得ることなのです。

この柳田先生が、終戦間もない頃でしたが、ぼくが当時まだ国学院大学の助教でして、国学院大学に神道学科の大学院を作らうとした時にお出ましになったんです。ところが、当時熊本大学の法文学部長で文部省の大学設置委員だった方が、正面切ってクレイムをつけた。「柳田先生は年寄りだ」といふことが第一。ところがもう一つは、「民俗学は学問ぢやない」と言ふことだったやうです。ところが、ぼくは柳田先生のそばにゐたからよく知つてゐるのですが、柳田先生は、民俗学といふふうに「学」をつけるのををこがましいとおっしゃつてゐたのです。本当はつけないだとおっしゃつた。つまり、柳田先生は学問といふことを非常にきびしく考へられた方なんです。まるで生字引みたいな方でしたが、さういふ先生が、やっぱり学と名付けるのはをこがましいとおっしゃつた位でした。

これも終戦直後でしたが、ぼくが東京の成城のお宅へ伺つた時、柳田先生は、「ぼくのやうな老骨が、この敗戦の日本に直面して生き残つたといふことは、せめてもの日本の幸

ひである」とおっしゃった。それで、ぼくは非常に胸にジーンと来たんです。

そのころ、当時東大のフランス文学の先生だった辰野隆や今井登志喜といふ西洋史の先生たちが、おれたちは今こそ愛国者にならうと東大の文学部で誓ひ合つたのです。さういふことがあつた時、柳田先生はぼくに向つて「今こそぼくは国学を書く」とおっしゃつた。そして『新国学談』といふものを書き出されたんです。その第一冊が祭日の研究で『祭日考』といふ本。次が『山宮考』。その次が『里宮考』。それで、その『祭日考』といふ本を先生がぼくに贈つてくださった。それはつまり、「若い諸君が、おれの学問を越えてくれ」といふことだったんです。それで、ぼくは感激して、「よし、先生が一生を賭けた国民信仰といふものを、ぼく自身で調べてやらう」と決心して、山形県とか、能登半島とか、対馬とか、いろいろ各地で専らフィールド調査をやつた。このことは、先生のさういふお氣持に応へようと思つたからなんです。その精神、つまり先生がいはれる〈国学〉といふのは、国民の信仰のことです。それは、生きてゐる人も、死んでゐる人も、魂と心を通はせ合つてゐる世界のことなのです。さういふ姿を、先生は全国いたるところで採集なさつたんです。ところが、その国学の精神がお弟子さんにはわかつてゐなかつた。終戦

の時、柳田先生は、敗戦のこの機にあつて、せめて自分は『新国学談』を書くと言はれ、その時に、やっぱり学と言はなきやあいかんかといふ自覚をおこされて、民俗学とおつけになつた。ところが弟子たちは、民俗学は社会科学の補助学、やれ歴史科学の補助学だとか、なんとか言つて論争ばかりやつてゐたんです。国民信仰を、本当に明らかにする学問だといふことを、だれも言はないし、気がついてゐない。

ところが、あの亡くなつた三島由紀夫さんが、『日本文学小史 その一』の中で、この柳田民俗学の亜流を批判されてゐます。私はそれで三島さんは偉いと思つた。それはかういふことです。民俗学では、よく常民といふ言葉を用ひる。コモンピープルだけでも、柳田先生は、国民といふ意識でこの言葉をおっしゃつたんです。ところが今の亜流たちはそれを人民といふ言葉におきかへてしまふのです。常民、即人民なんです。これは階級的に区別せられた人民です。さうすると、ちやうどマルキシズムと同じやうな考へ方で、要するに、下部の常民、即人民の営みが上部構造を決定してくることになる。それを三島さんが批判した。但し、この場合三島さんは柳田先生や折口信夫さんを批判したのではなくて、その他の弟子たちにむけられた言葉なのです。普通マルキシズムやフロイドの学説に

ついで批判する人はあります。しかし、常民のまさしくその点を批判したのは、後にも先にも三島さんだけであって、ぼくは感服したんです。

とにかく、柳田先生のいはれた国民の信仰といふのは、生きてゐる人の間でも、死んでゐる人の間でも魂と心が通ひ合ふ世界といふことだったのです。

それに関連して、ちよつと皆さんにご紹介したいことがあります。私は宗教学といふ特殊な学問をやつてゐるのですが、この学問が開かれたのは明治三十五年なんです。それを開いた人は姉崎正治です。この人のペンネーム、姉崎嘲風と申し上げたほうが文学者として有名だからみなさんのご記憶に浮び易いでせう。この人は高山樗牛と本当に刎頸の交りをした人です。昨年はその姉崎先生がお生れになって一〇〇年目にあたりました。それで東大の図書館で記念会をやつた時に、ぼくは頼まれて発表したんです。それを機会にいろいろ調べてみました。宗教学の現代的性格は「サイエンス・オブ・レリジョン」といふ、そのサイエンスつまり、人文科学的性格について肝心なことが失はれてゐるといふことに気がきました。で、その姉崎先生のことを調べてみてのことですが、先生がご自分でお選びになつた論文集『己弁集』といふのがあつて、その中にかういふ話があつたんです。明

治三十九年、日露戦争が終つて、春の靖国神社のお祭の時に先生がお参りに行つたといふんです。さうすると、ある未亡人らしき人が男の子を連れて敬虔な祈りを捧げてゐる。そして何か子供にいろいろ語つてゐる。それを見て、自分はかう思った、といふんです。あの人は、ただ拜んでゐるのぢやない、おそらく彼女の夫は戦死したのだらう、そして、この靖国神社に祀られてゐるのだらう。彼女は、まぎれもなくその亡き夫とお話をしてゐるのだといふふうに思へてきた。そして、それを見てゐて、また私とその人達の語らひの中に入つて一緒にお話してゐる気持になつた、といふのです。さういふのを、交流、感応といふ。それは神と人との交流、神人の感応である、さういふことがあることがわからなければ、宗教の研究なんかはとてできないと、さう書いてあつたのです。それをぼくは昨日、小林先生のお話を聞きながら思ひ出したのです。つまりそのやうに心が通ふと、生きてゐる人同志の間だけではなく、死んでゐる人との間にも心が通つて話し合ふことができ。さういふことが、ぼくにはわかると姉崎先生は言はれるのです。徹底して学問すればそこまで来るのです。生半可な勉強がだめなんです。

ぼくは小林先生のお話を聞いてゐて本当にさう思った。要するにいけないのは不勉強と

いふことなのです。学問が足らなければ、さつきお話ししたやうに、ある視点でしかものを見ようとはしない。ところが、小林先生は、親は子供を見る場合に視点を持たないと言はれた。母親は、子供が何を思つてゐるか、何を感じてゐるか、何を苦しんでゐるか、全体としてぴたつとわかる。それは相手の子供といのちが通つてゐるからです。通つてゐるから、本質をつかむのに、特別の観点にとらはれることもない。それをベルグソンは直観と言つてゐるのです。日本人にあつては、ごく普通のお母さんやお父さんが、さういふことを実際にやつて来てゐるではないかと、小林先生は言はれた訳だと思ひます。さうすると、さういふふうには本質を直観して、いのちを通してゐるのが日本人ではないかといふことになるのです。さういふふうには、死者も生きてゐるものも、お互ひに心を通はしあつていくといふことの中に、豊かに生きる、非常に広大な世界ができてくるのではないか。さういふことをぬきにして「人間の豊かさ」といふことを短絡的に考へるならば、それは世上で言はれる福祉国家論としての「福祉」以上のものでないのです。そこまで来ると、知るといふことの徹底性は、相手のものと交はる、相手とつながつてゐる世界に到達すること。それは、相手と価値的に結び合つてゐる世界に至り着くことになるわけです。

もう一つの例は、これは昨年木内信胤先生が取り上げられたあの虫のお話です。これはなごらくアメリカで日本語を教へた池田摩耶子さんの経験です。川端康成さんの『山の音』にてでくる「八月十日前だが虫が鳴いてゐる」といふ一節が、アメリカ人にはわからないといふ話です。言葉としてはわかるが、意味がわからない。それは、アメリカ人には虫の音を聞くといふ耳がないからです。虫は鳴いてゐるのだが、それが精神生活の中に入つてこない。人間が外界と関係をとりに結ぶ、その関係の中に入つてこないのです。ところが、日本ではどうか。

明治天皇様の御歌

さまざまの虫の声にも知られけり生きとし生けるものの思ひは

これの実感はすごいと思ひます。ささやかな虫の声にも、その生きものなりのいのちの叫びを感得して共感されてゐるわけです。小さな虫の生きる世界にまで心を及ぼされ、交渉をもつてきてゐるのです。そのやうな精神が本当にわかれば、平和とか共存とか、そんな抽象的な言葉を言はなくても、「ああ、それだ」といふことになる。共に生きるといふことは、実はさういふことなのです。ところが、外国では虫は害虫なのです。害虫だから

自分の生きる精神生活の中に意味をもって登場するわけがない。したがって、「八月十日といふ、暦の上の立秋の前にすでに虫が鳴いた。ああ、秋だなあ」といふその兆し、さういふことがなかなかわからない。だから池田さんは虫の文化論、ひいては日本文化論をやらなければならなかったといふんです。しかし、池田さんは、この明治天皇様の御歌は知らない。それを言ってもらひたかったのです。

自然をめぐる東と西

それでは、人間同士が神や仏に心を通はせるだけではなく、小さな虫にまでいのちを通はせるといふ、さういふ契機を、西洋では何がシャットアウトしてゐるのか、それを考へてみたいと思ひます。一つには彼らの自然観です。それは旧約聖書、創世記にまで遡るのです。すなはち、この世のあらゆるものをお造りになった神といふ創造主に対して、人間も虫も草も木も鳥もすべて「造られしもの」です。ところが違ふ点が一つある。それは神が人間のみに、人間以外のものに名づけることをお許しになった。この名づける働きによつて、人間に他のものを支配することを任せた。さうすると神の立場から見ると、神、次

に人間、次に他の被造物としての自然となつて、自然は人間に支配されるものといふことになる。かういふ考へ方は、実に旧約聖書に遡るのです。この考へ方で言ふと、自然は、人間が本当に豊かに生きていくうへにいのちを通はす相手にならないのです。まして、心の鏡にはならないでせう。

さういふ点で大変面白い話があるのです。イスラエルの首都エルサレムにヘブライ大学といふのがあります。もう引退されましたが、そこにマルティン・ブーバーといふ、二〇世紀の哲学を考へる上に忘れられない先生がゐりました。このブーバーが中心的主著として書いたのが、ドイツ語で『イツヒ・ウント・ドゥー』訳して『我と汝』といふ本です。その中で、彼はなんと言つたかといふと、人間といふものの生き方の根本的な姿は、自分が相手のものを呼ぶ、その呼びかけの言葉で規定できる、といふのです。それはどういふことかと言ふと、自分が相手のものを、「それ」といつて、完全にものとして扱つて言ふ時。それから、「あなた」といふ人格として言ふ場合。ところが、単に「あなた」ではなくて、「永遠のあなた」と呼ぶ時がある。といふやうに、相手に対する三つの呼びかけ方のちがひで、人間の生きる根本的態度はきまるといふんです。それについて、評論家の佐古純一

郎さんがそのブーバーのところへ会いに行つてたづねた。ブーバーさん、あなたは、相手を物として扱ふ場合にイット（それ）と呼ぶと言つてをられるけれども、さういふ形が、「あなた」といふふううに人格的に呼びかける方に移つて行くことがある。更にそれが、西洋流に言ふと神である「永遠のあなた」に移つてゆくと言はれるが、神によつて造られ、人間によつて支配される「もの」、それが永遠の神を感じるやうになつてゆく契機はないはずですと、紋切形に言つて了つた。さうしたら、逆にブーバーにやられちゃつたんです。佐古さん、さういふことをおっしゃるのは、あなたが「キリスト教的偏見」にとらはれてゐるからだ、さういふあなたこそをかしい、と逆に言はれたといふのです。

かういふふううになつていく例はたくさんあるんです。日本だったら、例へば林武さんが「美に生きる」といふ自叙伝に書いてゐます。林さんが、もう絵がかけなくなつて、もうおれは絵を描くのはやめにした。せめて村の役場の書記にでもなつて生きようと言つて絵筆を捨てて、いつもの道を歩いてゐた時に、むかうの木がひゆうつと浮んで来た。それで、林さんは、はあーつと言つてひれふしたといふんです。その木が大きく生きて林さんにのしかかつてきた。いつもはなんでもなく思つて歩いてゐた杉の木が、生きて自分を圧

倒して来た。それで林さんは目があいたのです。これは、杉の木といふ「それ」「もの」が、「永遠のあなた」になるといふ大変いい例です。かういふ例は、東山魁夷さんの『風景との対話』といふ本にも出てゐる。林さんや東山さんの場合のやうに、日本人にはさういふところがあるのです。ところが、佐古さんにそれがわからないのは、彼がクリスチャンだからです。かういふふうに或る定められた信仰の教へによって特定の視点を持つといふことは、考へ方のわく組みに自分をはめこむといふことです。さういふのを教条主義といふんです。その教条主義のために、素直に感ずることができないわけです。ところが、素直に感じた林武さんや東山魁夷さんは、「それ」が「永遠のあなた」(ザウ)にまで移りゆくといふことをちゃんとおっしゃつてゐるんです。そんな例はたくさんあります。大仏次郎さんの『帰郷』といふ小説を読んでご覧なさい。やっぱり、ちゃんとした人はみんなさういふ体験をもつてゐる。その中で大仏さんが強調されてゐるやうに、それは体験の中から湧いて来る実感なのです。それを素直に認めれば、こんな教条主義になるわけがないのです。

さういふことで、プリントの二枚目、リン・ホワイトといふ人のところを読んでくださ

い。これはアメリカの加州大学の歴史学の先生です。

キリスト教徒にとっては、一本の木は物理的事実以上の何物でもなく、神聖の森といふ考へ方もキリスト教徒とは無縁である。それはまた西洋の精神とも無縁である。二千年近くもキリスト教の伝道師は、神聖な森を伐り倒してきた。それは、自然に心があることを前提とすれば、偶像崇拜になることを恐れたからだ。(青木靖三訳「機械と神」)

これをご覧になるとおわかりのやうに、神聖な森、これは自然ですが、それはキリスト教徒にとってはいのちのつながりとしては無縁なものだった。また西洋の精神とも無縁だった、といふのです。それは、先程申しあげたやうに旧約聖書以来でてきてをり、ギリシャ哲学以来さうなのです。自然は人間によって支配せられるものだといふ、大体紀元前一、〇〇〇年近くからの考へ方なのです。だから、二、〇〇〇年近くまでキリスト教の伝道師は、神聖な森を切り倒して来たといふのです。それを日本では、例へば、あの高千穂の峯のやうに、切り倒さないで残して来てゐる。このやうに自然を守ってきたといふこと、それが神を守るといふことと同じなのです。それは日本を守ることになつてゐる。そのやうなことは、かういふふうと比較してくれば、すつとわかるんです。かれらは、自然に心が

あるといふことを前提にしたら、偶像崇拜になると思つてゐるのです。

今から十七年ばかり前、日本で戦後はじめて人文科学の国際会議を開いたことがありません。その時に、単に会議をするだけではなくて、日本の宗教施設を見せてさしあげようといふことになった。それで、伊勢に参つた。その時に、今は亡くなったフリードリッヒ・ハイラーといふドイツのマーブルク大学の先生、この人は『祈り』といふ本を書いて、ヨーロッパでは宗教学者としては最高峰の人なんです、そのハイラーさんが言ふには、自分たちは、今まで心のない自然を拜むなんていふのは、とんでもない下等、低級なる宗教であると思つてゐた。ところが、今ここ伊勢に来てはじめて非常に洗練せられた高度の宗教としての自然崇拜があるといふことがわかつた、といふことを言つたんです。

その後、有名なトインビーが来られた。トインビーは、三回目の訪日に伊勢に行つたんです。その時に、かれは伊勢神宮の神楽殿の揮毫帳に「この神聖なる場所で、私はあらゆる宗教の根底をなす、根源的に一つに結ぶものを感じます」と書いた。これはすごい。やっぱり実地に見なければだめですね。つまり、実感しなければならぬ。トインビーも、ハイラー先生も、見て、そして実感したんです。

次にルドイッヒ・クラージェスといふ哲学者によつてこの問題を考へてみたいと思ひます。クラージェスは、日本の哲学界ではほとんどとりあげられてゐないのですが、これを大きく問題にしたのは、今、東京女子医大の精神科の主任教授をしてゐる千谷七郎といふ人です。プリントに出しておきました『人間と大地』を翻訳した人です。そのクラージェスが西洋の自然観をどう見てゐたかといふと、やつぱり、チャウドリン・ホワイトと同じやうに、ここにも唯一の神の信仰といふものとの比較、対比においてその自然観が出て来てゐます。例へば、プリントの二行目、「唯一神がいのちの樹からひき離れた神々とは、常に變移してやまぬ感性界の心である」と。唯一の神といふ立場から見れば、この世で神に値するのはただ一つ、たった一柱の単数であり、神々といふ複数は認めない。だから、いのちの樹から神々は引き離された。その引き離された神々とは、實際は常に變移してやまぬ感性界の心なんです。宗教的に表現すれば、神々といふほかはない。実感される心も、唯一の神といふ考へ方に教条主義的にとらはれれば、これを全部切つてしまはなければならなくなる。といふことは、心に実感せられて来ることながらをみんな切つてしまふといふことです。彼は、その場合にその切り取られた一番大事なものを一応象徴的に大地ととら

へたんです。これは、自然と置きかへてもいい言葉です。そこで四行目、「すなはち人間と大地の心との連関放棄」——人間と自然との交はりを西欧では、ことさらに断ち切つてしまつたといふ。それはどのくらゐ西洋の精神の不幸を生んだか知れないといふのです。泣いたり笑つたり憤つたり、変移してやまない感性界の心は素直に感ずるものなのです。それを宣長は「もののあはれ」と言つたと、昨日小林先生のお話にあつたでせう。その実感を押へつけようとするから精神は歪み、心の病気が生ずるのです。精神病理学者の千谷さんがクラーゲスの自然哲学を大きくとりあげられるのは、さうした点についての透徹した分析をクラーゲスにみたからです。ともあれ、さういふ実感、素直な感応を断ち切らうとするのは、考へ方のわく組み、教条主義におちいることなのです。

日本は「いのち」であると呼べること

さて、その教条主義といふことに關聯して、親鸞について話をします。これは、去年おきた本当に新しい問題なのです。それは、ぼくの友人で、親鸞研究のオーソリテイの一人である松野純孝博士が、『親鸞——その行動と思想』といふ本の中でちよつとふれたことで

す。

御承知のやうに親鸞は九十歳で亡くなりました。その彼が八十五歳の時、「唯信鈔文意」を書いた。その中で言はれたことを、このプリントに出しておきました。「仏性すなはち如来なり」——如来といふのは、仏様を尊ぶ言葉です。仏性とは、人間の中にある悟りを開きうる根本的性質をいひます。その仏性といふのは、いはば仏様とおなじだといふのです。「この如来、微塵世界にみちみちてまします」この仏になりうる根本的性質は、極小の世界、つまり、あらゆる世界にまで充滿してゐる。ところが、「すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり」と。それはまづなによりも一切群生海、これは衆生海といつてもよい。つまり、仏性、すなはち如来はこの世に生きてゐるすべての人間の心に満ち満ちてゐるのだといふのです。御承知のやうに親鸞は、「弥陀の本願は、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と申してをります。この言葉の意味するところを利己主義だとおとりになればそれは浅薄な理解です。これは、ありがたいといふことを言はうとして、そこまで一人の心に切りつめて来て把へてゐるわけの言葉だからです。ほかの人はいざ知らず、私如きもののために、弥陀のご慈悲がみんな一身に集つてゐるといふ。これは本当にありがたい

といふ実感の言葉なのです。しかし、そこには、阿弥陀様におすがりしてゐる親鸞といふ一人の人間がまぎれもなくある。つまり、人間至上主義なんです。ここには、人間を越える世界はありません。そこまでは、実は親鸞八十五歳までの考へ方なんです。ところが、松野君が注目したのはその次の、「草木国土ごとく成仏すととけり」、といふ言葉なのです。つまり、更に、草木国土、この日本の国、自然、草、木、川みんなが阿弥陀様のご慈悲で成仏するといつてをられる。それで、松野君はびっくりしたわけです。不思議なことですが、親鸞が亡くなってから大変な月日が立ち、これだけたくさんの人が親鸞を研究してゐながら、このことには誰も気がつかなかったのです。親鸞の思想には、自然が救ひの一番大事な条件になるといふことが八十五歳まで入ってきてゐなかつたのです。これは一体どういふことだらう。そのなぞ解きは、日本全体でやつと今はじまつたところなのですが、私にとっては、そのなぞ解きはもうとつくにすんでゐたんです。

親鸞は三十五歳の時に先生の法然上人と共に罪を背負つて流された。法然は、はじめ土佐国とありましたが、実際は讃岐の国、親鸞は越後に流されてゐます。越後の場所は国府のあつたところ、現在の直江津といふところです。親鸞は京都生れの方でして海の生活を

知らなかった。その海を知らなかった親鸞が、罪を得て、今の直江津市の居多浜に近い所に五年間ゐたのです。ぼくも新潟に住んでゐたからわかりますが、日本海岸の冬といふのは、雪はそんなにはないんですが、シベリヤから吹いてくる嵐といったらものすごいんです。そのやうなところで、親鸞は毎日海を見てくらしてゐた。五年目に罪が許され、救免状がとどきます。いいことは重なるもので、そのとき親鸞と妻の恵信尼との間に長男が生まれた。さうして、いよいよ罪が許されて故郷の京都にもどらうかといふ時に、師の法然がなくなつたといふ知らせが入ります。そこで、親鸞は、あと二年間直江津に滞在して喪に服し、亡き師の菩提を弔つたのです。そして三回忌の法要を終へて、春一月、旧暦の一月二十九日にいよいよ直江津を出発した。つまり正味七年間直江津にゐたことになります。

実は俄然それから親鸞の著作の中に海のことばが出て来ます。例へば、群生海、これはただ衆生でもいいんです。それを群生海といふのは、この七年間の生活経験があつたからでせう。海はあらゆるものをみんなのみ込んでゐる。濁流をのみ込む。また海自身において、あらゆるほこりやきたないものをみんな吸ひ込んでしまふ。さういふ海といふ自然の持つ浄化力に親鸞は気がついたのです。それが一つ。

それからもう一つは雪です。一夜雪が降ると、きれいな銀世界になります。しかし、その雪の下には、みんなの真剣な生活がある。泣いたり、笑ったり、苦しんだりしてゐる血なまぐさい生活がある。それは紛れもない事実です。しかし、雪が、さういふものを全部包んできれいにしていくといふこともまた紛れもない事実なのです。親鸞が聖徳太子に傾倒なさって、その聖徳太子のご精神のどこをくんだかといふ、これは私どもにとつての非常な研究課題ですが、例へば、聖徳太子には「世間虚仮唯仏是真」といふお言葉があります。親鸞はこの雪と、雪に包まれた泣き笑ひの人生との対比の間に、この太子のお言葉に對する実感をこめてゐたのでないかと思ひます。

それからもう一つは、大地です。これは例へて言ふと女性の力なんです。一家の中であらゆるほこりを吸ひながら、全部を清らかに育成して行く。母の偉大なる愛なんです。だから、全世界宗教史上、いたる所で大地は母の神として表現されてゐることがわかります。親鸞が、その大地の力をとりわけ強く感じたのは関東に移つて来てからです。最初は、今の群馬県に移ります。それから常陸の国の稲田といふところに移り、そこに一〇年ゐました。親鸞の名著、『教行信証』はこの時に書かれたのです。この稲田といふところ

には、ぼくも行きましたが、このあたりの大地の、あらゆるものを育てていく力は大変なものです。

さうすると、

- (一) あらゆるきたないものを浄める力
- (二) あらゆるものを包み込む力
- (三) あらゆるものを美しくする力
- (四) あらゆるものを育てる力

それらは海、雪、大地といふものによって象徴せられる「自然」ではないか。今までは、親鸞にとって「弥陀の本願」は「ひとへに親鸞一人がため」であった。つまり、親鸞は、阿弥陀様ありがたうといふ実感を、阿弥陀様と自分といふ、人間的な取り結びに限定してみた。ところが、その限定をはなれて、海も山も川も大地も、雪も言ってみればあらゆる自然、日本のあらゆる自然がみな阿弥陀であり、菩薩であるといふ、さういふことになった。それで、松野君は驚いたのです。それは学界での大変な問題です。

さうすると、もうみなさん、わかって下さったでせう。昨日、小林先生が信ずるといふ

ことは人それぞれによって違ふんだ。だけれども、民族の統一感の中にあるといふことで、それぞれ違ふ信じ方をしてゐてもこと足りた、とおっしゃったことの意味が。昨日のお話の核心は、実はそこなので、それをぼくは承つて、ああよかった、ぼくのお話したいと思ふことを、小林先生がちゃんと方向づけをしてくださった。これは明日はちゃんとお話してできると思つたんです。さういふ気持、わかつてくださると思ひます。

親鸞が以上のやうでした。それから、道元の場合について申し上げます。涅槃経といふ中国で訳した漢訳仏典の中に、「一切衆生、悉有仏性——一切衆生ことごとく仏性あり」といふのがあります。「ことごとく」は漢文訳で「悉」と書きます。この世に生きてゐるあらゆる人には、みんな仏になりうる根本的な性質がある、かういふ言葉なんです。それを道元は、さういふ漢文は十分承知しながら、「一切衆生、ことごとく仏性有り」ととらないで、ことごとくありといふのを熟語に読む。すなはち「一切衆生、悉有は仏性なり」と読んだのです。すごいでせう。さうすると、どういふことになったのかといふと、道元は、この世の生けるもの、ありとしあるものはみな仏性なり、仏性そのものである、ととつたのです。それは、前の、ことごとく仏性あり、とどこが違ふか。これについて少し説明し

ます。

涅槃経の中にあるやうに、この世の生きとし生けるものは、みな根本的には悟りを開く性質を持つてゐるのだ、と読んだ場合におこり得る可能性が二つあります。その第一は、人間の中には仏性はあるが、仏性だけだとは言つてない。だから、悟りを開くのに邪魔になるもの、悪魔の性質があるかもしれないといふ可能性が残つてゐる。それが一つです。第二には、人間以外の生きものにさういふ悪魔の性質があるかもしれないといふ可能性があることになります。しかしかういふ二つの可能性が残されるやうでは思想の自覚として、徹底してゐないのです。ところが道元は、「この世の生きとし生けるもの」、そして、「この世にありとしあるもの」はみな仏性である。それ以外にほかに何もない、悪魔の性質は何もないと言つたんです。これは、親鸞が群生海の心に弥陀の如来の精神がみちみちて、しかも草木国土みな成仏するなりといふこととおんなじ精神ではないですか。つまり、この日本の自然、あらゆるものがみな仏だといふ思想ですよ。だから、仏教的にさう言つた。これを神道的に言へば、北畠親房の有名な「大日本は神国なり」といふ表現になるのです。そこで問題は、どうしてそんな人達が揃ひも揃つてさういふことを言へるやう

になったのかといふことです。親鸞も道元も、実は仏教精神、仏教の考へ方といふものを徹底してここまで来たのです。しかし、それだけではすまない。まだたくさんあります。一遍、については、申し上げる時間がなくなりましたが、矢張り同じです。どうしてさういふ方向に、期せずして、そのやうなことを徹底せしめて言へるやうになったのか。

それには、「さう言はせるものが何かある」ことを考へなければいけないでせう。それは、決して妄想ではないのです。それを小林先生はイマジネーションと言はれた。私にはもつと確実な、確実な実感があるのです。たしかに日本には、優れた日本人に、ぎりぎりのところで期せずしてさう言はせるものがあり、それが不思議に働らくのです。それが小林先生のおっしゃる民族の統一感なのです。それをぼくは「日本のいのち」と言つてゐるのです。さう、「いのち」と言つていいぢやないですか。単なる自然や山ではない。単なる川でもなければ、単なる海でもない。自然も山も川も海も大地もみんな含んでゐる。そして、あなたも、君も、虫も、そして天皇様も、体制もみんな含んでゐる。それは「いのち」といふほかないのではないか。だから、敢へてぼくは「日本のいのち」と言ふのです。

人類が究極的に求めてゐるもの

ぼくがかねて勉強して来たねらひは、人間として全世界の人類は、どういふことをねらって生きていけばいいと思つてゐるか、といふことです。だからぼくは、とにかく人類の残した知恵といふ知恵に素直についていってみようと思つたのです。そして人類の一番優れた人達は最後に人間はどうなつたらいいと考へてゐたか、そのねらつてゐるところに、できることなら自分を合せてゆきたいものだ。それがぼくの一念でした。さういふことが、ここでいふ人類史的意義といふことなんです。それで、みんながねらつてゐるのは、国も、自然も、人も虫もみんな一つになつて、いのちを通はしていくといふ考へ方、それで十分だといふことなのだといふことに至りました。にも拘らずそれが世界では必ずしもさうなつてはゐない。なぜか。さつき申しましたやうに、西洋では唯一つの神をたてるといふことによつて、後は全部教条主義的に切つてしまつたからです。

最後に時間がなくなりましたが、プリントの一番最初の、実は人間のものの考へ方に大きく二つあるといふことについて簡単にふれておきます。一つは、親から授かつたこの

身、この心、それはいろいろ問題はあるけれども、それによつていとなむこの実人生をおいて、ほかに救ひの場所はないといふことを本当に確信し得てゐる、さういふ考へ方のタイプです。それともう一つは、それでは所詮だめだ、だから、もう一回死んでやりなほす。二度生れ変らなければならぬといふ考へ方のタイプです。かういふ考へ方は、例へば、ハイデッガーといふ有名なドイツの哲学者が、『ザイン・ウント・ツァイト』（存在と時間）といふ本の中で言つてゐます。人間が持つて生れたこの身、この心は、我々が好むと好まざるとに拘らず、この世界に投げ出されてゐる、これをゲウオルヘンハイト（被投性）といふ。ところが、それではだめだ。新しくあの世に所屬轉換をして、永遠を確保しようとして、それを投げ出して行く。これが、エントヴェルヘンハイト（企投性）。ハイデッガーはこのやうに説明してゐます。それから、ウィリアム・ジェイムス。彼は一九〇一年から二年、アメリカで最初にヨーロッパに招かれた学者で、アメリカの学問といふものの独立宣言をした人といつていい。有名なドイツのヴントのお弟子さんです。そのジェイムスが、人間が最終的に永遠を確保する道は何かといふ時に、やはり二つのタイプがあると言つてゐる。一つは、この親から授かつたこの身、心で明るく現在にその永遠を確保

できると信ずる人、これは健やかな心のタイプ。もう一つは、さうではなくて、所属転換をして生れ変つて行かうといふ人、これを病める魂のタイプといつてゐるのです。

あと、ちよつとふれてないことがあります時間がなくなりました。

とにかく、日本では、国土も、歴史も、自然もみんな一つとなり、虫にまでも心を通はしてゐる。それは人類のすべてが求めてゐるものなのです。それは求めても簡単に得られるものではないのです。

イタリアの政治学者で、ダント・レーブといふ人に、「ザ ノーション オブ ザ ネイション」(国家の観念)といふ本があります。その中で、彼は、「ネイション・ステイト」すなはち国民・国家といふ場合のネイションといふことは、支配者たる君主が實際さういふことを言ひ出して利用するためだったといふことを言つてます。

ところが、日本では自然も、歴史も、国民も、天皇様も、国土もみんな一つなのです。だから、それをぼくは日本のいのちといふ。それで完全にこと足りるのです。人類はさういふ一つのもの、総体のいのちを求めながら、実際にえられないから苦しんでゐる。だから、それがダント・レーブの指摘するやうな事態になつてゐるのです。ところが幸ひにも

われわれ日本人は、そのやうに人類が求めに求めてゐるものを現に立派にもつてゐながら、それと気づかずにゐるのです。しかし、一番始末が悪いのは、まさに、その「あるといふこと」がわからないといふことなのではないでせうか。

第四篇

『国民同胞』誌から

——戦後日米の宗教思想にふれて——

(編者註) 本篇には、国民文化研究会の月刊『国民同胞』誌に掲載された諸論から、八章を選び収録した。〈愛国〉の問題から健康法まで、話題は多岐にわたり、いづれも〈同胞〉への切実な語りかけの思ひのこもった論考である。

第一章 アメリカ合衆国・愛国者の日

第二章 自国サディズムの典型——極東文化裁判としての教科書検定訴訟——

科書検定訴訟——

第三章 明暗二態——歴史改定主義の重大な影響——

第四章 「神の死」の思想——東と西——

第五章 聖徳太子・親鸞の信仰系譜——故我の怨念と本然我

の執意とをめぐって——

第六章 日本人の感性は衰滅したか——捨命の宗教を思うて

第七章 親切さと不親切さの吟味——オリエンテーションと

オリエンテーションの相違から——

第八章 すこやかであるために——健康法あれこれ——

第一章 アメリカ合衆国・愛国者の日（昭和四十一年五月号）

今、本学（国学院大学）の日本文化研究所に、ハーバード大学神学校ドクターコースのハンツベリー君が研究にきてゐる。昨年の四月十九日、彼の家に私共夫婦は晚餐会によばれた。大抵、夕食を共にするのは、土曜か、日曜のことで、この日は月曜日だし、はてをかしいとは思つたが、別に理由を聞かずに済まして了つた。その後、アメリカの話をするやうに依頼されたことがあつて、資料を整理してゐたら出てきたものがあり、はつと氣付いた次第である。私はうっかりして忘れてゐたが、四月十九日は、「愛国者の日」であつた。

アメリカ独立とは、イギリスの国王指令による代官の支配を脱して、アメリカ本土に自からの政治支配を確立したことを意味する。そのために、当初、農民を中心とする義勇兵士が結束して立ち上り、イギリス駐屯軍を打ち破つた。この闘ひは、アメリカ東部のマサチューセツツにおこつた。それがやがて、全米に戦場を拡大するに至るのであるが、そも

そもこの独立戦争の発端は厳密には何時何処でかと言ふと、ボストン郊外の、アーリントン、レキシントン、コンコードにおいてであつた。時は一七七五年四月二十日である。その前の晩、一人の愛国者が徹夜で、イギリス駐屯軍の動勢を看視し、合図によつて、馬をはしらせ翌二十日の黎明に、上記の村々に警鐘をならして、義勇兵士にイギリス軍の来襲をつげたのである。彼の名は、ポール・リビア、職業は銀製品屋、今も彼の家は、ボストンの港に近い高台の一角に歴史的建造物として保存されてゐる。内々に、ボストン駐在のイギリス駐屯軍がアメリカ義勇兵士を襲ふかもしれぬと言ふ不隠な空気があり、いよいよ今日明日あたりが危いと言ふ時、ボストン市民で秘密裡に自発的に動き出した内偵と通報者が彼だったのである。彼は友人と示しあはせ、自らはボストン市とケンブリッジ市の境界を流れるチャールス川の対岸にあつて、馬に乗り、何時でも馬を走らせる待機の姿勢にあつた。若し、イギリス駐屯軍が、行動を開始し、陸上から行くやうだったら一つのランタンの明りを掲げよ、若し水上から行くやうだったら二つの明りを掲げよ。場所は、今日もオールド・ノース・チャーチと呼ばれてゐるその教会の塔の上、と言ふ打ち合せであつた。案の定、しるしのランタンが教会の塔の上にかかげられた。チャールス川の対岸で

待機してゐた彼は、この報らせをうけて、すぐ一大事と馬をはせた。これが四月十九日、夜中近くのことであつた。彼のしらせは、翌二十日の夜明け、村々の農民兵に伝はつた。遂にコンコード川をはさんで、四月二十日夜明けに両軍対峙し、遂にアメリカ義勇軍は最初の勝利ををさめるに至つたのである。アメリカ人にとっての、輝かしい独立戦争の勝利は東部の州のコンコード村における戦勝にはじまる。その戦勝は、実にボストンの一町民、ポール・リビアアの愛国的行為による、と言ふことから、四月十九日は「愛国者の日」として永く記念せられることになつたのだ。

私が、一九六三年六月、アメリカに別れを告げる時、ボストンで親しく交つたハラデイ夫人から記念品をおくられた。元来、彼女は家内の私的な好きな英語教師だったが、家内を通じて相識るやうになつた。スタンフォード大学出の歴史の好きな女性で、私がまた歴史が好きだと言ふので話が合つた。彼女は、薄いアルバムで、ボストン記念帖を作ってくれたのである。お世辞にも上手だとは言へぬ体裁のものだった。

表紙の裏には、「よき友、戸田さんへ、何時までもボストンの思ひ出を持ってくださるでせうね。ジャネット・ハラデイ」(英文)と書きこみ、ボストンの町で普通どこにでも

売ってゐる絵葉書をはりつけたものであった。ただ違ふのは、一々、自分のペンで説明が書いてあることである。殊に、ポール・リビエアの絵葉書をはった下には、ヘンリー・ロングフェロウの「リビエアを讃へる詩」を黒いインクで書いてくれてゐた。

お聴きよ、私の子供達よ。

お前達は、ポール・リビエアが夜中かけて馬をはせた

あのおとに耳を傾けるでせう。

時は一七七五年、四月十九日

かの有名なあの日、あの年を記憶してゐる人は

今は生きてゐない。

(拙訳)

にはじまる、子供のための詩である。作者のロングフェロウは、十九世紀、エマソンの四つ年上であつて、ハーバード大学でスペイン語とフランス語を教へてゐた有名な詩人だつた。その彼が、「子供に、尊い歴史、尊い先人の偉業」を語りつがうとしたのであつた。

「お聴きよ、私の子供達よ」

この呼びかけは、正に歴史の継承を目的とした生々しい声である。さうして、又そのことを、手づくりの記念帖に書き込んで、帰国する異国の友に、「己が国の変らざる思ひ出」としておくってくれる一アメリカの市民、ハラディ夫人の心情もまた、「歴史の継承」の系列に位置すると思はれる。更に又、遠く、異国日本に勉強に来てゐて、何かと不自由な中を私共を招いて夕食の会を、かの記念すべき、「愛国者の日」にひらいたハンツベリ―夫妻の心境もまた、祖国の歴史を祝ひつつ、その伝統の継承に参画するもののやうにうけとれる。特に、この日をうたはず、暗黙のうちのことすすめた彼らの心根は心にくいばかりである。

戦端をひらいて、初の勝利ををさめたコンコードは、樹々の深い、実に美しい郊外の住宅地で、秋の紅葉した頃の美しさは、たとへやうがない。日本から友達がみえると、必ず案内することにしてゐたし、私自身、疲れて気分の転換をはかる時は、必ずと言ってよい程、この地を選んだ。ここは、私の好きな思想家、エマスンゆかりの地である。彼に愛された文学者ソロウの小屋跡のある池（ウォルデン・ポンド）は塵一つないやうに美しく且

つ旧姿をとどめてゐる。

彼の小屋が建てられた池のほとりの土地はエマソンの所有地を借りたのだった。義勇兵士と、イギリス駐屯軍が相對峙したと言はれるコンコード川は、原始の川を思はせるやうに、どす黒い。川には丸木の橋がかかり、たもとに一軒の土産物屋がある。それも四月から、九月最初の月曜日である国家の祝日、レイバーデーまでで、あとは閉つて了ふ。橋を渡つた正面に義勇兵士（ミニッツ・マン）の銅像がある。若い農民兵が銃を持ち、腰に牛の角をつけてゐる。初めは何のための角か、わからなかつたが、やがて、当時の弾薬入れ、つまり薬莖やつきょうだとわかつた。これについては、色々面白いあげつらひの思ひ出がある。この種の銅像は、ニューイングランドには沢山ある。たいてい、公園の中にだが、単にみられるための銅像ではなく、「愛国者の日」にはボーイスカウトや土地の各種団体によって花輪がささげられ、現実に崇敬され、生きてゐる。ここにも、歴史の顕彰が歴然として生きてゐる証拠をみる。

さて、コンコード川の傍に立つ義勇兵士の銅像の台座正面には、かの有名な文学者エマソンの「コンコード讃歌」と題する詩が刻んである。この詩は、一八三七年の六月四日、

この場所（橋の手前正面）に「戦勝記念碑」が建設された、その日につくられたものであった。

アーチ型なせる丸太の橋

川にかかる

その橋のかたはら

四月のそよ風なびき

彼らの旗なびく

ここぞ、かつて武装せる農民兵士ら

立ちしぞ

世界にこだまする銃声、火を吹きしぞ

（拙訳）

エマスの詩情は、当時の農民兵士の銃の如く、彼らへの追憶をこの一点に凝縮して、燃焼するかの如くである。

私は幾度もここに立ち、この詩を口ずさみ、感慨あらたなるものを覚えた。

まことに偶然の一致と言はうか、この戦ひのあつた橋の手前、向つて左手に牧師館が残つてをり、土産物屋と同じで、春からレイバーデーまでの間なら内部をみせてくれる。

案内人のおばちゃんが、例へば二階の窓から外をのぞき込みかげんに、さも当時のありさまをそのまま見たやうに「エマスのお父さんは当時子供でしたが、この窓から、独立戦争の闘ひをみてゐた人である」と説明する。

さてよ、エマスの誕生は一八〇三年、独立戦争は一七七五年、その間二十八年がある。成程、今かりに、父が三十才頃にエマスが生れたとすると、エマスの父は独立戦争の当時、三つか、四つの子供と言ふふうには計算され、成程、話はうまくあふ。真偽の程は別として。

エマスの祖父は牧師の職にあり、この牧師館に住んでゐた。エマスの父はこの牧師館で育つたのである。

エマスン自身、晩年は、コンコードの町中の家に住んだ（今日も保存されてゐる）が、それまで、彼の祖父が住み、父が子供の時育つたこの牧師館に住んでゐたのである。

何れにしろ、祖父伝来の家が、コンコード戦の主要地であり、弾も飛んでこよう程、目先にある。この地理的因縁は、エマスンのこの歴史的事件に対する心理的因縁を深くする要因であつたと思はれてならぬ。

かくて、彼の詩魂は、アメリカ史の輝かしい発端に結びつき、その銃声に触発されて、花と咲いたのである。

ロングフェロウやエマスンと言ふアメリカ文学史上の偉才は、何れも、このやうに、歴史の息吹に直接する作品に、自己を燃焼させてゐるのである。

余談になるが、「緋文字」や「七破風の家」で鳴る特異な作家、ホーソンは、エマスンが、コンコードの町中の家に移り住んでから、この牧師館に住んだことがある。

「この窓ガラスの楽書きは彼のものです」と例のおばちゃんが意味ありげに説明してくれたが、今はそれも懐しい思ひ出の一つとなつた。

アメリカ大陸の発見はコロンブスにより一四九二年になされた。その大陸に、白色人種

が移りすむやうになるのには、その後、百年程時の経過を要した。

一六〇七年、イギリスは今日のヴァージニア州、ジェームスタウンに初めて公式の植民を試みてゐる。

ジェームスタウンは絵に描いたやうに美しい海岸にあり、砦も昔のままに復元され、砦の衛兵も当時の服装そのままで振るまつてゐる。狭い砦の中央に、教会があり、「闘ひつつ祈り、祈りつつ闘ふ」姿は、植民開拓と不可分に結びついてゐるのに気付くだらう。アメリカの記念物は、かりに復元するにしても、当時の場所に、当時の現寸のままに現場を復元するのが通例である。同時に、当時の生活も復元する。つまり、当時代人の服装そのままに、また、立ちゐる振舞も保存しようとして試みる。

つまり記念物は、或る時代の時間的な距たりを超えて、そこに過去を過去のままに生かす仕組である。

この種の企ての最大の規模は、ジェームスタウンから数マイル離れた所に位置するウイリアムスバーグなる町の復元である。

ウイリアムスバーグは、イギリスがアメリカ植民地における主都としたところである。

ここに、国王の命をうけた代官（ガヴァナー）がゐた。

アメリカ独立のための謀議は、この主都において、愛国者達の間で秘密裡におしすすめられたのである。その謀議を行ったとみられるホテルも室も残つてゐる。ロックフェラー財団は、巨額の富をつぎ込んで、歴史の町、ウイリアムスバーグの完全復元にのり出した。今尚、完成途上にあるが、大方は復元せられた。アメリカは金に任せて何でもよくやると言はれるが、今世紀の最大の企ての一つとして私はこの復元を重くみてゐる。すると、これは、単に金に任せて、何でもやる式では出来ないものだと言ふことがわかる。単なる経済第一主義では出てこないことなのである。

つまり、アメリカ建国史上重要な歴史の町を、如実に復元すると言ふねらひは歴史の保存のためには、全力を尽すと言ふ、歴史主義が中心にあることであることがよくわかる。

訪問者は、先づ、立派な建物の「インフォメーション・センター」で、何時でも自由にアメリカ建国史の一駒をとったパラマウント映画社製の、カラー・フィルム映画をみせられる。約一時間の作品だ。

次に、このセンターから、バスが数分おきに町に出てゐる。切符を一枚買へばどこで降りやうと、どこで乗らうと自由である。

つまり、歴史の町、ウイリアムスバーグの町の中を、好きな道を、好きな建物を選んでそこに行けるやうになってゐる。今、映画でみてきた歴史の町に、今、現実に自分が生きてゐることになる。これは夢かとはばかり。

センターには、きれいなホテルもついでゐるし、味のよい、且つ清潔な大きなカフェテリアもある。幾日でも、のんびりと歴史の町に生きることが出来るやうになってゐる。

町には、当時の床屋があり、当時の床屋さんが、当時の髪型をつくつてゐる。銀製品屋も同じことだ。

たとへて言へば、かりに東京の京橋、日本橋地区全体を全く二百年前の姿に復元し、そこに復元された建物の生活も完全に復元する仕組である。

「歴史を生かす」「過去を生かす」とは、かくの如く具体的なのである。勿論ウイリアムスバーグの床屋は、夕方五時になればお勤めだから吾が家に帰る。廿世紀の近代人に戻るのには勿論であるが。

人は言ふかも知れぬ。「アメリカは歴史の若い国だから歴史がほしいのさ」と。だからと言って、このやうな具体的且つ大規模な歴史保存が出来やう筈がない。

日本は歴史の古い国だから、ほこりのついた古い歴史は捨ててもいいなどといふそんな理論が出てきたらそれこそ世界の笑ひ者になると思ふのだが、近頃の「明治百年を捨てて……戦後二十年をとる」と言った巷の世論には、こんな臭ひがする。

第二章 自国サディズムの典型

——極東文化裁判としての教科書検定訴訟——

(昭和四十四年八月号)

第一次訴訟と川井証言

家永訴訟としてジャーナリズムを賑はすやうになった教科書検定訴訟は、実は二つの裁判を含んでゐる。提訴者は東京教育大学文学部、日本史学第二講座担当の家永三郎教授。

彼は昭和廿八年以来、高校日本史(三省堂版)を刊行してみたが、昭和卅五年の高校教

育課程の改正に應ずるやうに、従来の「日本史」を書き直し、昭和卅七年に検定申請を行なった。処が、文部省の検定基準に照して、特に「記述の正確性」「内容の選択」の面で非常に多数の欠陥があるために不合格となつた。当時、検定審議会に關係してゐて、現在駒沢大学にをる森谷教授が、「余りに間違いが多いので、出版元の若手にでも書かせたと思へぬ位ひどいものだった」と公開の席で酷評されるのを聞いたことがある。それ程の代物であつて、学者の良心に照らして恥づかしくてならぬ所なのに、訴訟手段に出たのだから、「何か異常なもの」が原告本人にありさうにうかゞはれる。

彼の教科書原稿は全部で三三三箇所欠陥が検定基準に照らして指摘されてゐる。それを彼自身次のやうに分類してゐる。

- (1)思想審査にわたるもの 八〇件 (2)些細などうでもよいもの 一三六件 (3)文部省の主張自体の誤つてゐるもの 五件 (4)家永本人が誤りとして承認できるもの 九九件

この原告本人の分類の当否は一応こゝで問はないとしても、僅か三百頁程の本の中で、本人が九九件の誤ちを自認せざるを得ないといふのだから、ひどい代物だと云はざるを得ない。

検定申請をした翌卅八年に前年不合格となった原稿を訂正して改めて検定申請を行なひ、数々の修正意見が付された上で合格し、教科書として出版された。

然るに、最終の検定完了後一年以上も経った四〇年六月になって突如国を相手どつて百八十万円の損害賠償請求の訴訟をおこしたのである。理由は、先の昭和卅七年の不合格処分と、卅八年条件付合格処分は、学者の良心を侵害し、精神的苦痛を与へ、印税収入を失はせたからといふのであつた。

この方を便宜上第一次訴訟と呼び、目下駒田裁判長係の下に進行中である。

去る七月十八日、午前から午後の前半にかけて、家永側の証人として久司高朗（教科書共闘会議議長）なる者が証言した。証人は鬭争経歴豊かで言論の雄らしく、出版会社に於て検定を受ける際の文部省側の非道振りを自身の体験談として言葉巧みに、力をこめて力説した。傍聴してゐて私はこれを国側がどう反論するか、心を痛めてみた。国側代理人として反対尋問に立った宮野教科書検定課長は

「あなたは先程の証言の中で、普通選挙法の下で選挙権をもつ資格は、納税額十五円以上の者とされ、国民のパーセントにもみため、と教科書原稿に書いた所、削除を命ぜ

られたと言われた。しかし事実には照らしてその事はおかしいように思われる。現にここに見本として教科書をもってきておる。例えば『日本書籍』刊行の分では九〇頁『東京書籍』刊行本では一二〇頁にちゃんとその記述があり、検定により削除するような事は全く考えられない」と。

すると、証人は全身に怒りをこめた姿勢で、

「その教科書は卅五年の高校教育課程改正前のものでしょう。同じ教科書でもどんどん変ってきてとるんですよ。そんな古いものを持ち出して物を言われても困る」と、唾を吐くやうに答へた。

「では、この教科書の出版年月日を調べてみませう」と国側弁護人がもた／＼してゐた時、駒田裁判長は「『日本書籍版』は昭和卅六年、『東京書籍版』は昭和四十二年ですね」と即座に云ひ切った。

これで証人の偽証は明瞭となった。これを野球なら九回裏の満塁逆転ホームーと云ふ所なのだらう。それにしても裁判長は立派であった。彼の父は大審院判事だったさうで、息子の彼も、よき日本の法曹界の伝統を継ぐ人の一人と思はれた。

久司証人に代って、午後の後半に国側の証人として出廷されたのが本会の川井修治氏である。家永側は川井氏の証言にまともに立ち向へぬので、証言中の言葉を詮索しようとした時、やはり駒田裁判長は、「そんな抽象的な言葉についての尋問は本法廷上必要とは認められない」と、きっぱり打ち切った。秩序ある堂々たる裁きだと感服した次第だ。

川井氏の証言は、歴史家の一般的性格から入り、直接、家永教科書原稿に対する批判としては、彼が伝統を批判し唯物史観へ強く傾斜してゐることを実証しようとした。家永本人も、原告側弁護士達も、時折にたく／＼して薄笑ひを浮べてゐた。お前の思想はマルキシズムだと、はつきり云はれて、さて「さうではない」とは反論出来ぬから、にたく／＼する外はないのである。せいぜい反論の骨子は、「色んな考へ方の歴史観で教科書は編まれるのがよくはないのか」と云はせようとする位。その色々な歴史観の一つである唯物史観による教科書記述も許されてよからうと云ふ腹の底の論理はみえすいてゐた。だから、川井氏の証言も、その莊重な言葉遣ひ（私は氏と会ったのが終戦来この時がはじめてで、長い時が経ってをつたから、初対面のやうに新鮮に感じとつた）と共に、家永史観の本質を明確に剔抉した点で、教科書裁判史上記録に留めおかれることだらうと思ふ。

第二次訴訟の異常性

右の提訴後、昭和四一年に、今度は既に合格し教科書として使用されてゐる日本史を三四個所改訂したいと改訂検定を申請した。その結果、六個所が不合格となつた。原告はこの不合格分についても不満として、四十二年に不合格処分取消請求の訴訟をおこした。

これを便宜上、第二次訴訟と呼ぶ。裁判長は左翼偏向とのうはさの高い杉本良吉氏で、国を敗訴に追ひ込むので有名である。この第二次訴訟の方が第一次より二年遅れて出発しながら今月中に一切の陳述を終り、結審の上、早ければ年内、遅くも来春には判決が下ると云ふをかきな事態になつた。後から出たものが先に出て明年の安保改訂期にうまくつながらるといふタイミングも異常なものがある。

前述の如く、原告本人の提訴にも俯に落ちぬ異常さを感じる上に、杉本裁判長の訴訟のすゝめ方にも異常なものがある。ずる／＼と杉本ペースにまき込まれた国側も国側で、何とも異常づくめである。かうした形で、重大な歴史の一駒がゆがめられてよいものだらうか。

私は先に「ココム」(中共貿易の制限に関する)の判決が下った時、同じ杉本裁判長のとおり運び方として、この第二次訴訟の行手に極めて暗示的であるとすら思った。若しココムの判決論理をこゝにうつし、適用すると、

教科書検定は思想審査の危険をはらみ、違憲性が強いが、現下の教育行政法の下にあることは、その運用にあたって国側に故意の悪意があったとは思はれぬ。

と云ふことになる。実質的には違憲を打ち出し、国を敗訴とし、しかし、検定と云ふ教育行政上の立て前は一応認めるといふ形で、原告の主張をチェックするといふ折衷案となるのではないか。これは一つの私の予想でしかなく、勿論かうさせじと最後の最後まで法律論争に全力をあげる国側に大きく期待をかけるものだが、それ位の予想を立て、今から次の段階を考へるべきだと云ふ一人の考へなのだ。

祖国に向けられたサディズム

教科書問題によせて最近「時の課題」八月号、「教育ニュース」第三二四号の何れの場合も、巻頭言に簡潔に問題の性質を説明するやうにと求められた。その時、考へついたの

は次のやうなことだった。

人間には変態者がをる。その一つは相手の異性をいじめることに性的快感を覚えるタイプである。精神病理学上、これにサディズムの語をあて、「加虐性態」の訳語を与へてゐる。このサディズムの反対がマソヒズムである。逆に異性から虐待されることに満足するタイプでこれには「被虐性態」の訳語をあてゝゐる。

このサディズム、マソヒズムの用語は精神病理学上の文脈を離れて広く一般通常の言語レベルに拡大、使用される迄になつてゐる。この場合、当事者の相手は「異性」とのみ限定されないのである。

例へば「己が祖国」を虐待することに性的快感とまでは言はぬにしても、大いに心が満足すると云ふタイプがあれば、今日の言語用法からは、充分「彼はサディストである」といふ言ひ方が成り立つまでになつてきてゐる。敗戦後の日本の思想界、学界、わけて国史学会、教育学会に一貫する通弊は、かうした「祖国に対するサディズム」によつて強く傾斜してゐると言つてよいであらう。

原告家永側の証人の証言や、受けて立つた国側の証人に対する反対尋問は、揃ひも揃つ

て、よくもまあこれが同じ日本人の発言かと思はせられる程に、祖国の歴史に対する自虐的態度にみちみちてゐるのに驚かされる。まさに「自国サディズム」のあられもない現出だと思はせられた。

この自国サディズムをば、うまく内に秘めて表を論理の衣に包むのに二つの型がみられるやうである。

その一つは、七月五日、第二次訴訟の原告側証人兼子仁（都立大助教授、教育行政学）の証言に典型例をみる。彼は、国家が公教育に介入し得るやについて、教育基本法十条「教育行政」の項について、宗像誠也の理論をそのまま継承し、本条は、単に教育の外的条件整備を規定したもので、教育内容の条件整備でないと主張した。そのあとで、国家に教育権があるのは誤ちであると強調し、宣しく教育は「国益本位」でなく、「人権本位」であるべし、と結んだ。私は傍聴してゐて、ノートをとり乍ら思はず、キュリアス・コンドラストとコメントを書き留めた。

国益本位 対 人権本位

と対照し、前者を捨て、後者を取ると云ふ奇妙な対照的思考、これを私は第一の型である

とみる。これは国家をないがしろにして、個人主義本位で行けと言ふ主張なのである。この国家を無視しろと云ふことを、「国益本位を捨て、」と云ふ論理の衣で包む。これが自国サディズムの陰性タイプである。

第二のタイプは、原告・家永自身の発言にみられる自国サディズムの陽性タイプである。去る七月十二日、午後第二次訴訟法廷で彼自身、はっきり自分の口から言ったことだが、今次大戦に際して、自分は戦争犯罪人ではないが、消極的に戦争遂行に加担したことに一種の原罪めいたものを感じてゐる。そこで、その贖罪行為として、「国のあやまち」を指摘し、正すことを自分の使命として、このことを、「新日本史」なる教科書の根本のねらひとしたといふのである。

そこで、この教科書を学んだ者は、二度と戦争をしなくなるやうになる。さうすることが、憲法前文にあらはれた平和主義を教育にとり入れることになるとの意図である。

私に云はせれば、歴史教材にことかりて、広島原爆記念碑に刻まれた永久の悪文の如く、「もう戦争はしません、誤ちは繰り返しません」式の洗脳教育をやらうと云ふやうにみえる。それが心底からの贖罪意識でもって殉教者気取りであるのだから事態は変にねち

ねちしてゐる。

この「国のあやまち」と云ふ評価はどこから来るのか、そもそも問題だが、おしなべて戦後のニューレフトは「国のあやまち」を自から正すと言ふ良心意識で固まってゐるから始末がわるく、実質は自国サディズムであることを気付かずにある。例へば、ライシャワー大使との「近代化論争」において、東大、井上光貞助教授（当時）の露呈した心情は、史実の客観的、実証的分析による結論ではなく、日本人として過去の戦争を必要以上に恥づると云ふ自省自戒の心情であつた。然も、終りまでそれをはつきり言はずに、実証史家のポーズをとるのだから性質が悪い。井上光貞の思想態度は、家永と同じく、自国サディズムの陽性タイプであると言つてよい。

家永の意識では「国のあやまち」は日本の今次大戦突入において極まるから、このことについては、イデオロギー的偏見も、先の自国サディズムによる曲解をもつものでもない。言はずもがなの論証を試みようとするから、A・B・C・D包囲陣にも眼を向けるのは勿論、アメリカ歴史学会長、故ビーンズ教授の「アメリカが仕掛けた戦争である」と言つた

良心的発言にも耳をかさない。

それどころか、ソ連が終戦間際に、国際信義をふみにじって日ソ中立条約を一方的に打破し、満州に侵入した事実も書かない。却って、昭和十六年四月の「関東軍特別大演習」にはふれる。これはバランスを欠いた記述ではないかと言ふ検定側のコメントに対し

「この演習はソ聯侵入をねらったものだから、日ソ中立条約に対する潜在的な背信行為」

と強弁してやまない（詳しくは、家永著「太平洋戦争」、一〇五—六頁参照）。『関特演』を「条約違反の未遂あるいは予備、陰謀」と規定するに至っては、極東軍事裁判のキーナソ検事の再来としか思へない。

去る四月、慶応大学の中村菊男教授が国側証人として出廷し、この『関特演』の多様な性格を証言した所、原告側弁護人は強引に家永説に彼をひき込まうと、巧妙な法廷戦術をとった。

私は思はず、「これは極東文化裁判だ」とつぶやいた。家永側は、勝者として連合軍側にあたる「国共合作出先機関」なのではないのかと疑ってみた程だ。

この裁判は、日本がみづから敗戦処理をなしうるか否かを、はからずも証明する機会となったやうに思はれる。だから「敗戦処理の文化的側面」と云ふ把へ方が正しいやうに思ふ。

第三章 明暗二態

——歴史改定主義の重大な影響——

(昭和四十六年十月号)

怖るべき事を耳にした。

友人の梶村昇君(亜細亜大学教授)の報告であり、間接的になるが信頼出来る情報であると思つてゐる。

事は九月二十四日の午後一時第四チャンネルのテレビ番組「青島幸男のワイドショウ」に、大森實がゲストとなり、中核派委員長を呼んでのインタビューがあつた。中核派は、先の成田代執行に反対して過激な行動に出た暴力集団の一派とみられてゐたから、大森 学生達が三人の警官を殺したのを何と思ふか。

委員長 それはあたり前だ。まだ三人ではすくない。我々は機動隊を全滅させる覚悟だ。

次いで、両者の話は革命論に移り

大森 革命は民衆の支持を必要とするが、君達にはその支持がない。

委員長 商業新聞が我々のことをさう書いてゐるからであつて、それは間違つてゐる。涉

谷では民衆の支持があつた。どうしても、これからも革命に向つてやりぬく。三日後にある天皇の外遊は阻止する。天皇を襲つて傷つけてみせる。あゝいふ戦犯者は生かしておけぬ。

梶村君の報告を聞いてみて憤りのやり場がなくなつた。大森實は、別にこの暴言をたしなめた形跡もなかつたさうだ。大体テレビといふ公器を使って公衆の面前で、殺意を堂々と表明して済んでゐる。あつてかん日本もいゝ所だ。

俺は誰々を殺す、と名指で殺意を表明してゐる場合、当の相手や、関係者は、勿論これを訴へ出て刑事事件にすることが出来るのではないか。戦前の法律にはそれがあつたやうだ。

ましてや、憲法で日本国の象徴と規定せられてある上御一人の陛下に対し奉つて、事も

あらうに、テレビを通じてのかゝる暴言は断じて許されぬ筈。それなのに宮内庁も、政府当局もその後何らの処置もしてないやうだ。日本の末期現象も、この一事に極まったやうに痛感される。身の置き所のない思ひで震へた。

晴れのお旅立ちの前日は台風二十九号が急襲したが稀にみるスピードで伊勢湾から北々東にすゝみ、太平洋にぬけて了った。翌二十七日は雲一つない日本晴れで天地相和したのである。まさに台風一過、かのおぞましき青年の熱意も行動も遠くに消し飛んだ如くで、安堵した次第だった。

偶々二十七日は伊那谷の旅先に居ったが、帰京の時間をずらし、伊那市から高遠に入った。目的は、近代音楽教育の先駆者であり、且つ又、台湾統治の教育面における蔭の功勞者、伊沢修二の生家を訪ね、彼を育んだ風土や文化環境（藩校、進徳館など）を知ることだった。スコットランド民謡曲から「螢の光」を選曲したのも、「紀元節奉祝歌」を作曲したのもこの人である。

その彼が、郷土の先覚の霊を祭る「高遠祠」の建設計画をすすめ、その社前の石柱二本

にそれぞれ

仰之愈高（之を仰げば愈々高く）

望之愈遠（之を望めば愈々遠し）

と彫刻するつもりで書きのこした筆蹟を郷土館で買ひもとめることが出来た。高遠の町名にかけた讃辞ではあるが、一地方をはなれて、謂はば「日本祠」といふへ大和心の社Vの前に掲げてよい讃辞だと思つてとても有難かつた。「仰ぐ」「望む」敬虔な態度から、かの「紀元節の歌」は作曲せられたと思ふ。

悠久の歴史を支へた力は、上御一人を神の如くに仰いだ国民と、更に、天照大御神の御光を仰ぎまつた歴代天皇にあられる。先輩の小田村寅二郎氏の近著『日本思想の源流』（日本教文社刊）は第百十六代桃園天皇の御歌

もろおみの朕（われ）をあふぐも天てらす皇御神（すめらみかみ）のひかりとぞ思ふを抛り所にして、このことに大いにふれられてゐる。

中核派委員長の怖るべき暴言は「悠久の日本を仰ぎ望み」、「愈々高く、愈々遠く」の感を持ち得ぬ所から発せられたことが思ひ合され、そのやうな結果を来した現代教育の趨勢

を伊沢修二の霊前に恥ぢたのだった。

両陛下をお乗せした機が日本晴れの大空に高く舞ひ上った……といふニュースを耳にして、神意不可測なり、と感じ入った。それは同じく高遠でのことだった。

高遠から茅野市に道を取り、杖突峠に立って思はず快哉を叫んだ。八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰、鷲ヶ峰が鮮やかに、稜線も山肌も眼前にあるが如くである。眼下に諏訪湖の家々が一軒残らず眼界に入ってくるやうだった。

諏訪大社上社は足許の山蔭に、はるかに下社の秋宮、春宮、のあたりを望み、中津国皇化の故事が偲ばれ、美しき日本、有難き日本に心から謝した。

だが、具体的に政治、外交、経済の諸分野をみると、この日本に危機の様相は深まって来てゐる。私が、三島由紀夫さんのことを何回かとりあげ、その憤死を扱った頃にも盛んに書いたことだが、あの事件を頂点として、不幸な予感が段々当って来てゐる不気味さが今の日本の一方にある。

アメリカが中共と手を結べば大東亞戦争勃発前のA B C D包囲陣に近い形が出来るので

はないかと、この夏前あたりから信友同志諸君がよく話しあってゐた。案の定ニクソンの中共への世に謂ふ「日本の頭越し外交」が始まった。続いて、輸入課徴金附加、ドル防衛処置と相繼いで日本攻勢が始まつてゐる。この一連のアメリカの打った手は、国益優先のために過去にこだはらぬといふプラグマティズムに立脚してゐること位は大抵の人が言ふが、その先にある一つの前提にふれる人がすくない。

それはアメリカのアジア政策が元来、中国第一主義だといふことだ。この米中協調にひびが入り、俄に中国封じ込めの政策に変わった転換点が南北朝鮮の激突である。

所が、この朝鮮戦争が、ソ聯の仕組んだ落とし穴であつて、それにうまく落ち込まされて了つたといふことを周恩来首相が、中国の信頼してゐる日本の或る政治家に告白してゐるのである（中丸薫「頭越し外交を恐れるな」『文芸春秋』十月号所載）

この周発言に応ずるやうに、アメリカでも、ニクソン政策の転回を歓迎する一般ムードの中に、日本にあらぬ濡れ衣を着せ、日本を悪役に仕立てて「アメリカは日本の仕組んだ罠に引つかゝつて朝鮮戦争に介入した。さうして年来の友邦国中国を敵に廻して了つた」といふ式である。

故ケネディ大統領の特別補佐官として活躍したアーサー・シュレジンガーがその著『信賴の危機』（一九六二年刊）の中で、冷戦から脱出するための流動的なリズムある営みの一つとして歴史解釈上の改定主義（レビジョニズム）があるといつてゐる。これは、官製の公式な歴史解釈に挑戦し、歴史の再評価を迫る動きである。今迄、身動きのとれなかつた歴史解釈が、どうにも動きのとれない行動を生み出してゐる原因であることに着目し、解釈の仕方を改定しもっと動きに融通をもたせるやうにする考へ方の改定である。

この筆法を以てすれば、米中蜜月関係の正常な歴史に立ち戻るために、ソ聯はいざ知らず、日本が悪役に仕立てられるといふ歴史改定主義が生じてゐることを我々は重視しなければならぬ。吾々は政治や経済の専門家でないから、その分野での解決にはあづかれぬが、この改定主義の正否については明確な立場をとり得る。

今、臨時ニュースが入つて、両陛下の最初の外遊先、コペンハーゲンで反対ピラをまいた日本人が逮捕されたことを報じた。爆弾を懐中にしてゐたとか。中核派委員長の暴言と彼等と関係があるだらうか。又、状勢は暗転。

第四章 「神の死」の思想——東と西——（昭和四十八年一月号）

一九六六年の四月八日号の「タイム」誌の表紙には、黒字に赤インクで「神は死んだか」(Is God Dead?)とあった。従来 of 慣例を破って文字のみを載せたのである。表紙の様子も変ったが、何よりその言葉がショックングであった。「神は死んだか」、の文字は大きな衝撃を与へずにはおかなかった。

この課題に関する記事は「宗教欄」で六頁にわたる広いスペースがさかれた。ここで「神の死の思潮グループ」としてアメリカの三人の過激な神学者の名があげられてゐる。

エモリイ大学のトーマス・J・アルタイザー（三十八歳）、コルゲート・ロチェスター神学校のウィリアム・ハミルトン（四十一歳）、フィラデルフィア市のテンブル大学のポール・ヴァン・ビューレン（四十一歳）である。（いづれも一九六六年の時点で）

この「神の死の神学」を主張するキリスト教運動は、今や全アメリカをおほひヨーロッパにまで浸透してゐる。

実は「キリスト教の神（ゴッド）は死んだ」といふ標題は、何も彼等急進学者達が急に言ひ出したものではなかった。今を去るおよそ一世紀も前に、有名なドイツの哲学者ニイチェがはじめて叫んだ言葉である。ナチス・ドイツは、その運動のもつ反キリスト教的性格を正当化するために、哲学者ニイチェと、キリスト教異端派の神秘思想家マイステル・エックハルトなどを大いにかつぎ出し、純正ドイツ魂の先駆者として仰いだことは、かのローゼンベルクの作とされてゐる『廿世紀の神話』に明らかである。

神は黙してゐた

ポーランドのアウシュビッツ収容所におけるナチス・ドイツによるユダヤ人の殺戮は、目をおぼはんばかりで、戦後、事態が判明するにつれ、強い批判が生じてきた。その批判の矛先は、何あらう神の限らない愛を信ずる筈のキリスト教自体に向けられた。即ち、ローマ法王はナチスのこの残忍な処置を承知しながら、却つてこの世に愛をもたらずキリスト教の名において、黙認したのではなかったかと。

そこには、神の裁きはなく、神は黙してゐたのではないのか。全世界のキリスト教がこ

く一部の例外を除いて、このユダヤ人大殺戮を暗々の裡に認めてゐたのではなかつたか。何がそのやうな無慈悲を許し、可能にしたのであるか。その非は、第一に、専らローマ法王に向けられたのであつた。

その波及するところ、前法王ヨハネス二十三世は一九六三年六月三日、死ぬ直前に神に祈つた。キリスト教徒のユダヤ迫害について、ひたすら恕しを乞うたのである。つまり、ユダヤ迫害を許した最大の因は、キリスト教の反ユダヤ主義であることを卒直に認められたのである。彼は愛の宗教であるキリスト教が、事實は呪詛の宗教と化してゐたことを自認したのであつた。

「ここに告白いたします。久しい世紀のあひだ、われらは目をおぼはれて盲となり、あなた、イエスが選ばれた民族、ユダヤ人の美を見る事が出来ませんでした。……われらがユダヤ人の名に向けてゐた不正の呪ひをお許し下さい。彼等の肉によつて、われらがあなたを再び磔にしたことをお恕し下さい……」

最初にイエスを裏切り、十字架に磔した者は誰あらうイスカリオテのユダであつたと聖書にみえてゐる。

言語学的にみて、ユダ (Judas) の名はユダヤ人を意味する Judaios である。従つて中世では、ユダは、憎むべきユダヤ人の典型であるとみられるやうになつてゐる。イスカリオテが彼の出身地を意味する別名ではなく、最初のキリスト教徒がユダの裏切り行為を特徴づけるために、ユダにつけた侮辱的な名前であるらしい。と言ふのは、イスカリオテなるラティン語は泥棒、盗賊を意味したからである。さう解されるところに、ユダヤ人への憎しみの程がうかがはれる。

「この盗人のユダめが！」と言ふ呪詛は、キリスト教徒の対ユダヤ人観の根源である。従つて、ナチスによるユダヤ人迫害は、キリスト教徒の目からは、神に背いた民族の上に、天なる神が下された当然の業火であつたかも知れないのである。

しかし、ひとたび、純粹に愛の保証をめざすキリスト教本来の建て前からすれば、この事態は、神が黙して決して愛の御手をさしのべられなかつたことになる。神の愛といふ建て前と、神は愛を下したまはなかつたといふ事実との間の矛盾を痛感するものにとつて、もはや神はいままさず、神は死に給うたといふことになるのは、理の当然であつた。

今更言ふまでもないが、広島、長崎における原爆投下は、キリスト教国アメリカによつ

てなされたことである。神はなぜ、これを黙認し、神の罰を、かかる暴挙を敢へてした白人の上に下さなかつたのか、といふ声もありうる。

評論家の竹山道雄氏がオランダで色んな人に質問した時、ある青年がこたへて「ゴッド・神などと言ふとみなわつと笑ひますよ」と言つたと書いてをられるし、知的に最高の地位にある二人の人の答へも、同じやうに否定的だつたといふことである。（昭和四十二年六月七日、読売新聞・夕刊）

全体として言へることは、聖書から発展したキリスト教といふものと、根底にある聖書そのものにある思想との喰ひ違ひ、ギャップが第二次世界大戦を山場にしてあらはれてきたとみられる。戦ひの終つた一九五〇年代から、急速に超越神ゴッドの不在を実感せしめる意識が強まってきたのである。

行動の聖人イエス・キリスト

しかし、神の死の思想の直接の因は、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの強制収容所を転々とし、遂にヒトラーの直接命令によってフロッセンブルグで無慈悲にも処刑された

三十九歳の青年神学者にあつたとみられてゐる。

彼の生涯——身体をはったその生き方が、彼の神学思想の証しであつたし、また、その思想は彼が直面し、闘ひぬいた体験から生じたものであつた。体験と思想の一致としてある彼の神学は、伝統の中に安住するかにみえたキリスト教界の心ある人士に、深刻な影響を残さずにはおかなかつた。この青年教徒こそ、誰あらうデイトリッヒ・ボンヘッフアーである。

『キリスト教の本質』の著者ハルナックは、誰一人知らぬ者のない神学界の最高峰である。そのハルナックから、いち早く、天才的な神学徒と折紙をつけられたほどのボンヘッフアーである。あたかも大作曲家シューマンによつて、天才音楽家現はると喧伝せられた二十歳の青年ブラームスに比せられる。

彼は、果敢な反ナチス地下運動に入った。この運動の仲間はずしでも神の福音を説く教徒ではなく、ただの世俗人であつた。彼はこの抵抗運動を通じ、一九四三年、ナチス秘密警察に逮捕され、遂に処刑されるまで強制収容所にあつた。その二年間の収容所での思索を通じ現代のプロテスタント教会の欠陥について大いに省みるところがあつた。

イエス・キリストが敵のただ中で生きられたやうに、キリスト教徒も修道院の孤独の中ではなく、この世のただ中で敵にとりかこまれて生きなければならない（ボンヘッファ―著『交はりの生活』）といふ彼の言葉は、修道院と教会の中で静かに神の声を聞き、神に直接することを建て前とした宗教から、世俗世界のまったで神のみ声を実現するために傷つき闘ひ抜くこと、神の営みが、この地上の人々の雄々しい営みとなるやうなキリスト教への転換を力強く示唆したものであった。

神としてあり、救世主（キリスト）としてあるイエスを、死後の天国や、また教会の至聖所にあがめ求めるのでなく、世俗の地上世界に働くイエスとして把へられねばならぬとしたのである。

修道院や教会における聖人は、すくなくも二十世紀中葉の現時点においては、そのままの形では指標の意義を失つてゐる。この世での、愛と犠牲にみちた行動の人こそ、もし名付けるならば聖徒であるべきである。キリストは、そのやうな典型的な行動の聖人であつたはずだ。イエスといふ固有名の存在者は、この世での救ひのために闘ひ、そのいや果てに十字架上に死し復活した。かくてイエスは文字通りイエス・キリストになつたといふの

が正しい聖書的意味である。今日こそ、この聖書の意義は恢復せられなければならぬとしたのであった。

神学の世俗化、都市化の問題を扱った『世俗都市』（一九六五年刊）の著者、ハーヴェイ・コックスは、ハーバード大学神学校で社会倫理を教へる若手神学者である。ボストン市の黒人地域に住み、黒人のための公民権運動や、ベトナム反戦運動に加はり投獄されたほどの経験の持ち主、実行の人でもある。彼は、このベストセラーの第二章「世俗的な仕方について語ること」の冒頭に、一九四四年四月三十日、前述のボン・ヘッファーが収容所の独房から一人の友人にあてた手紙の一文をあげ、現代の世俗人にとって、神といふ言葉が殆んど何の意味をもたなくなったことにふれてゐる。

「我々は宗教が全く存在しないやうな時代に向かつて進んでゐる。……宗教なくして我々ほどのやうに神について語るのだらうか。……世俗的な仕方でのやうに神について語るのだらうか。……」

このボン・ヘッファーの一文は「現代の非宗教化」についての深刻な質問なのである。コックスはこの影響を受けて、愛と犠牲にみちた政治行動、社会行動のキリスト教的意味を

明らかにしよとした。『世俗都市』の出版に先立つ二年前、即ち一九六三年三月、イギリスのウールウィチ教区の主教 J・A・T・ロビンソンの書いた『神への誠実』は圧倒的な人気を博し、英語圏だけでも、たちまち数十万部を売り尽したと言はれる。この本のフランス語訳は「神なき神」といふ標題にかへられてゐる。「神なき神」といふ題目は、「神への誠実」の内容を際立って多くり出してゐる。なぜなら、神に誠実ならんとして、神を求めれば求めるほど、外界に超越する人格神として神を求めることはできなくなる。神は人間の内奥にいます。その意味で超越神は死に、内在神は生きると言はざるを得なくなる。しかし、依然として、外界の超越神に眞の神をみようとする限り、この神学的視点は「超越神の死」を宣言しなければならなくなると思ふ。

この見解を強力に押し出すに、あづかつて力あつた条件はヨーロッパ社会にみられる「神の存在を疑はしめるに充分な世相」についての実感であつたらう。

無信の地上楽園観に対して

ローマ法王はナチス・ドイツによるユダヤ人の大量殺戮を知りつつ、遂に神の名によつ

てナチスの罪責を指弾しなかった。反ナチス運動に身を挺した若きボンヘッフアーにとってキリストの神は黙してゐるにひとしく、キリスト教の神は死んだと同じやうに映じた。そこで独り、二十世紀の地上の人であるキリストの似姿にならうとした。イギリスのロビンソン師にとつても、実感は斜陽国家ブリテンの様相と同じで「神へ誠実」たらんとする程、教会の教へる超越神から離れなければならなくなった。

かうしたヨーロッパ大陸、イギリスをおほふ「神のない世界」といふ悲観的な世界観が「神の死の神学」の下地を用意したとみられる。

しかし、その思想的影響をうけて一九六〇年代から盛んになったアメリカでの神の死の過激神学の背景には、ヨーロッパにみられるやうな悲観的社会観はない。もしあるとするなら、当然、原爆投下国としてのアメリカの罪意識がキリスト教国アメリカをおほふはずである。

原爆投下を、戦争の早期終結の名義の下に敢へてしたキリスト教国アメリカにキリスト教の良心はなかったのだらうか。鬼畜の如き悪の心は、神の見放し給ふところである。もはやアメリカにキリストの神はほほゑみ給はず、アメリカ社会から神は消えた……といふ

ことなのだらうか。

かうした声がアメリカ・キリスト教会の教団内部からあがってしかるべきであるが、それはなかった。却って、それは教団とは無縁ではないが、むしろ神学に研鑽する神学研究者の若い良心の叫びとしておこってきた。大勢をみるに、第二次大戦後、急速に増したアメリカの富が世界最大の繁栄をもたらし、どこからみても、偉大な社会を現出したと自負するに足るといふことになってきて、ヨーロッパの悲観主義、西欧の道義的没落感とは全く別のものが生まれて来たのである。さうして生じたアメリカ特有の楽観主義は、今やこゝと改めて神の救ひを必要とするにはあたらぬほどの、この世の地上楽園観に酔はす魔力をもった。多くのアメリカ人にとって「神の光」は、かうした楽園思想に随伴して実感せられたものだと言ふ言ひ方も出来るかもしれない。

しかし、神の死の神学が真剣に叫ばれる神学者達の内心にあるものは、実は、かうした神を必要としない無信の地上楽園説に対する痛烈な批判なのである。イエス・キリストを地上に再生するのは、個々の世俗人の博愛にみちた自己献身の営みである。この実践をぬきにして、ただ教会の神に敬虔であるのは繁栄下の自己満足であり、虚偽の姿勢だとする

批判である。

一九六四年十月二十三日、アメリカ・ユニテリアン・ユニバーサリスト牧師、ゴールド・スウェイト氏が東京芝の帰一教会で講演した「アメリカ神学の新方向」はアメリカにみちみちたこの種の樂觀的ムードを、よくあかしてくれてゐる。私のアメリカ現地における実感も、当時、全く同じであつた。ベトナム戦の行詰りからくるここ数年の「アメリカは何所へ行く」といった悲觀の様相は到底考へられない位の時代であつた。

ゴールド・スウェイト師は、一九五五年までが教会メンバーの増加時の上限であり、それ以降、年々下降の傾向が顕著になつてゐることにふれ、アメリカ人の大半が宗教を必要としなくなつてゐることを感じ出してゐると言つてゐる。（「創造」第十七卷第六号）

その要因として、第二次大戦後の物質的繁榮によつて、人生の目的が物質的利益の獲得におかれるやうになつたこと、つまり人生目的の甚だしい世俗化をあげてゐる。次に、今一つの原因は科学の隆盛が、あらゆることを説きあかし尽す役割をもつやうになつた点をあげてゐる。神話とされてきた聖書の多くの事柄は、科学によつて説明されるやうになり、科学上の発見は聖書上の多くの事柄を神話や文学をみるやうに啓蒙し、これらを信仰

上の事実とみることに對してすら、激しく挑戦してきてゐる。科学は不信仰の種子をまき、教会に背を向けさせるムードを生んだとみてゐる。

しかし教会が、アメリカ社会で衰へてきたもつと大きな重要な理由は、もはや伝統的信仰が、アメリカ人の今日の生活的状況に適應しなくなり、無意味になつたからだと言ふ。

そこで、この教会衰退の傾向に挑む神学上の試みとして、古い神学と聖書の言葉で語られた「神」を、世俗の新しい言葉で語り、解釈し直さうとする企てがはじまつた、といつてゐる。「教会における儀式と祈りの中にある超越神」は死に「世俗社会における正義のための行動の中にある聖」に移行した人間行為の新解釈に関心が向けられたのである。

神の死と神の再生と

この推移は、「超越神の死」といふ意味では、まさしく「神の死」であるが、「内在的な神」の待望といふ面では「内在的の神の誕生」にほかならないと私には思へる。

この「内在的の神の誕生」は東洋、わけて日本の宗教の根本理念である。日本の宗教は心

の中に体験できる「内在神」を神とみてきてゐる。その立場からすればキリスト教的理解の超越神ははじめからこの世になく、何を今更、神の死でさわぎたてるのかと言ひたくならぬ。

しかし、この内在神の顕在をあらはに実感せんとする営みにおいて、いづれが真摯か、誠実かは別の問題とならう。

敗戦直後、「この世に神も仏もあるものか」と呪詛の声をあびせかけた日本人はすくなくならなかつた。それは字義通りにとれば、まさに神や仏の死の宣告である。しかし、敗戦の廃虚からの奇跡的な経済復興に対し、直ちに「神武景氣」や「岩戸景氣」の語が用意されるにいたつたところを見ると、「史上の最初にして最高」といふことを形容するにしては、余りにも神々の活躍した神代や、神代が歴史時代につながる、丁度その結び目の栄光の歴史時代の始源を懐古する念が強すぎる新語のやうに思はれてならない。にぎにぎしく、この世を照らす天照大神が岩戸からお出ましになつた、その光明にあやか程の繁栄ぶりといふのであるか。それとも、天上の高天原と海上の彼方の常世国の、縦横二つの永遠の幸をたたへる極楽上からの靈性を、一身にうけられた現人神・神武の御登場なされた、かの

光栄の時にあやかるといふのであるのか。

いづれにしても、不朽の神霊の不可思議な作用のしからしめる所と感じた、その感じを新語にあらはしたとみれば、神はまさに如実に力強く生きたといふ実感を、ジャーナリストティックな言葉に表現したことになるのだらう。

しかし、「神も仏もなかった」といふ敗戦直後の厳しい自己批判に対して、かうした新語のはんらんが、直ちに神の再生を思想的に自覚せしめたといふやうにとるのは、どうも安易にすぎるとはあるまいか、と思ふ。

むしろ、一度「神も仏もないのか」といひ、呪詛にも近いなげきを思想的に定着せしめることをしてみなくてはいけない。その上で、神の死を本当に痛感するには耐へられない心情の奥底から、初めて「神まさにいます」といふ実在への叫びが生じてこなければならなかったはずだと思ふ。

その点で三島由紀夫氏が、「不朽の栄光をば白蟻どもが嘲笑ふ、悲しみの日に皇祖皇宗のおんみ霊の前にぬかづいて、ただ齋き祈ります人としての深みにおいて神であられた天皇が、どうして、現人の神であられたまふのを自らやめられ、ただの人間となりたまふの

であらうか」と、敗戦の翌年の元旦の詔書をなげき悲しんだ（『英霊の声』）のは、ある意味で、西欧における「神の死」の宣告に似通ふ発想である。

どちらも、第二次世界大戦の悲劇的な事件を契機にしてゐる。しかし日本語にすれば、ただ「神」となつて同じ意味のやうにとられ勝だが、西欧の場合は「超越神の死」であり三島氏にあつては「人間神の死」であるとの違ひがある。

三島氏は、人としての祭祀のつとめの深度の極みにおいて、人間天皇は、はじめて神であられるとした。その現人神に日本人の生存根拠を見出し、そのために生命をかけることになつた。その姿はボンヘッファーと同じやうに、思想を肉体の行動と一つにみる三島氏の思想の当然の帰結である。

敗戦を契機として、神は死んだ。それでよかつたのだ——戦後は、その意味で神のない世であるとする、流行の思潮がある。しかし、何時も変ることなく、否年々にその数を増しつつある民衆の初宮詣が、かうした流行の思想を越えた彼方で、神は実在にましますといふことを身を以てあかしてをり、それが「神の死」といふおぞましき思想を暗黙のうちに批判したことになるのであらうか。

第五章 聖徳太子・親鸞の信仰系譜

——故^こ我の怨念と本然我の執意とをめぐって——

(昭和四十八年七月号)

私が独り物心がついて、自主的に積極的に求め、真に吾が物にしようとした仏教は何かといふことを、述べなければならない。

私は旧制度の新潟高校に入学した年、倉田百三の「出家とその弟子」に心を動かされた。同時に恩師山下政治先生(当時、中国哲学担当。その後、七高、一高、東京学芸大と籍を移され、本年三月停年退職)の御指導で、黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読会を毎週行なった。この輪読会が母胎となり、同信団体「信和会」を結成、「信和寮」を建てて、私はその責任者となった。そこで後輩達との同信同朋生活を卒業まで送った。

かうした青春時代の体験は、聖徳太子—親鸞といふ思想系譜を、私の生きる本道とすることに決定的な方向を与へることになったのである。

昭和十八年、東大宗教学科の卒業論文に私は「聖浄二門の宗教論諍史」といふ題目を選んだ。この研究の要点は、新仏教の浄土宗を代表する法然の「選択本願念佛集」とこれに対する批判書、旧仏教華嚴宗の清僧、明恵によって書かれた「摧邪輪」とを比較検討し、そこにあらはれた聖浄二門の決定的な宗教論諍の性格を解剖した。そして、最終的に論諍の結着は、実に親鸞の『教行信証』によって為されたといふ結論を導き出したのである。

今年（昭和十八年）は親鸞生誕八百年記念の意義ある年である。それによせて、いろいろと親鸞にちなむ本が出てゐるが、注目せられるのは、作家の野間宏さんの『親鸞』（岩波書店）である。その本の中で『教行信証』は、念仏禁止を朝廷に求めた貞慶の「興福寺奏状」に、徹底的に反論するためのものであったと書かれてゐる。この野間さんの見解は卓見だとみられてゐるやうだ（例へば朝日新聞、四月三十日、読書欄）が、私はさうはとらない。私のは学生時代の卒業論文であったが、既に戦前、聖浄二門の謂はば「正」と「反」の論諍を止揚し最終的な帰結を与へた「合」の、つまり論諍の彼方の、まさに浄土の思想であつたことを明らかにしたからである。

親鸞仏教の生誕は、歴史的には、親鸞が二十九歳の建仁元年（一一〇一年）京都洛中の

六角堂に参籠し、百カ日の願、後世の事（死後の助かり）をかけられた時、九十五日目の
暁に聖徳太子の御示現にあづかり、この聖徳太子のお告げに導かれて、法然の門に入るこ
とになった時とみてよからう。

このことが、はっきりしたのは、親鸞の妻、恵信尼の書状が、大正十年、西本願寺の宝
庫から見つかったからである。恵信尼はこの書状で、

九十五日のあか月　しようとくたいし（聖徳太子）のもん（文）をむすひて（結び
て）　しけん（示現）にあつ（預）からせ給て候ければ
と述べてゐる。

私はこの個所を、

太子のおことば（文）をはじめから終りまで完結して唱へてゐたら（文を結ぶといふ
鎌倉時代の言ひ方はこの意味である）、太子の直接のみ教が聞かれた

と、とつてゐる。直接のみ教の内容は、「吉水にいる法然の門に入るやうに」といふ御指
示であったことは間違ひない。すると、この霊告が下されるまで、親鸞が唱へてゐた「聖
徳太子のみ教（文）」は一体何であったか、といふ事が問題にならう。

これまでの研究で、支配的な考へ方はこの「太子の文」が、妻帯をすすめた「行者宿報女犯」の偈文であらう、といふことになってゐる。

しかし、それは私の納得し難い所である。何故ならかうした「聖徳太子の文」であるなら、親鸞は、はじめから、「女犯」「妻帯」について、太子の決定的なみ教を仰いでをることとなり、何も敢てその上、法然の吉水に入門する必要はないと考へられるからである。大体、法然は童貞を守り通した清僧であつて、ライバルの明恵も、この点では法然の破戒を問題としてとりあげることが出来なかつた程である。

鎌倉期の仏僧を悩まし続けた性の問題を、本当に解決するといふのなら、従来解釈されてゐる「太子の文」女犯の偈」で足りる筈であり、何も妻帯してない清僧の法然の弟子となることによつて、悪人正機を実行に移して、妻帯の弟子となることはなからう。何としても私には解し難いのである。

太子の三経義疏を披見する余地は、親鸞にはなかつたかもしれない。とすれば太子の直々のみことばとして、一般に知られてゐたものは、文献以外にあるものでは、かの有名な天寿国繡帳に見える、「世間虚仮、唯仏是真」ではなかつたらうか。

このみことばは、「国家の事業を煩となす。但、大悲息むことなく志益物（衆生救済のこと）を存す」と仰せられた現実の世間と国家を凝視する、観の力と深くかかはってゐる。変化と煩忙の心わづらはしき現実生活は否定すべくもないが、安定はその中でひたすら常住真実を「仰信」する以外にはない。時に「無知」（勝鬘經には、「無知女人」とある）と痛感され、時に「凡夫」と痛嘆されたその人間把握は、八地以上の菩薩、更には仏位の如来に対照すれば、到底、救ひからは見捨てられた、はるかなる底辺の存在として人間を痛苦されてをられることになるのである。そのやうな、遠く距てられた凡夫、無知の我等が、常住真実を仰ぎ、信じまつる時に、我等は凡夫ながらにそのまま救ひとらせられるといふ。このことを「仰信」と太子はおっしゃった。この仰信が、信仰深化の心理段階を一挙に縮小し、如来にをさめ、とらしむるといふみ教なのである。親鸞は、ここを弥陀の本願力が、凡愚の大衆の摂取不捨となるといふ文脈に展開した訳であらう。

昨年、梅原猛氏は「隠された十字架―法隆寺論―」によって古代史学会に大きな話題を投げかけた。この本の魅力は、藤原氏が太子の怨霊を恐れ怨霊鎮魂のために法隆寺を建て

たといふ新説にある。しかし、ごく最近、国史学の秦斗、坂本太郎博士によって「何事も死霊に結付けねばやまぬ怨念の解釈」と評され、徹底的な学術上の論駁を受けた。（『日本歴史』一九七三年五月号に掲載された「法隆寺怨霊寺説について」参照）

坂本博士は、太子が、特に人の恨みについて、その害の大きいことを戒められてゐることを、憲法十七条中の、第十条、第十四条、第十五条の三条と、更に前述の「世間虚仮、唯仏是真」のみことばを基にして述べられた。さうして「太子と怨霊の結付きは、あまりにも場違いである」とまで論断されてゐる。また日本書紀の太子関係記事はすがすがしいが、それは三経義疏の精神にも通ずるものがあるとも指摘された。さすがだと思ふ。一体に梅原氏は、三経義疏を本当には読んでほはをられないのではないか。読んだとしても、余りにも怨霊観にとらはれ、心ここにあらざれば、読めども読めず、となつて了つたのではなかつたか。そんな風にすら思へてならないのである。

実は、前にふれた高校時代から縁を結んだ信友先輩と勝鬘経義疏の輪読会を、もうかれこれ十年近く、毎月一回、輪番制の自宅めぐりで営んで来た。今二回目の読み直しに入つてゐる。遅々たるものである。だが、同信の友ら、先輩との輪読会は、一人では見落し勝

な個所を、徹底的に思ひはかるよい機会となつて私には有難い、信を培ふ折であつた。それで気付いたことは、肝腎の問題の個所は、これまでの仏教学者の研究では何故かはづされてゐたり、間違つてゐる所が随分とあることがわかつてきた。何故、さうなつてきたかは、個々に論じなければいけないが、概して言へば、太子を偲念申し上げるのを忘れて「外道、自然の知」の知的驕慢におち入つてゐるからである。

さて、かうした輪読会で、法隆寺怨霊説に対する太子御自身の御批判の言葉として、当然導き出されてくるものがあることに気付いた。だから、われわれは到底、梅原説を受け入れることが出来ないのである。

勝鬘經義疏の序説の最後に、

「言ふところは、我は理として本然なりと雖も、但、故我に拠て未曾と云ふ」(原漢文)とみえる。

ここで言はれる「故我」とは、如来の教へを聞き、常住真実に目覚める前の、古い自分といふことである。しかし、「我」は、本質的に常住真実に目覚めたものであるといふので、「我は理として本然なり」と一方で云はれた訳である。

従つて、故我は、本然の我に目覚める前の我である。この故我にこそ、怨念はある。この怨念をもつて死んだ死者の死霊は怨霊であると言つて誤ちはない。

しかし、本然の我には、もはや故我の状態を脱してゐるから、怨念と呼ぶべきものはなく、あるとすれば、 \wedge 本然の我の執意 \vee であらう。

故我の怨念のもたらす怨霊 と、本然の我の執意がもたらす悲願の霊

とは明瞭に区別されなければいけない。

太子の霊は、その尽きせぬ大乘解脱の悲願として吾々に生きるものであつて、故我の怨霊としてのその太子がをられるのでは断じてない。

おそらく、親鸞の結んだ「太子の文」は、信仰内容として、この悲願につらなるものであらうと確信する。

聖徳太子―親鸞の信仰系譜は真に「大和国」にはじまり、「国を和ます」といふ二重の意味での「和国の教へ」、その教へ主「和国の教主」につらなるものなのである。それが、私の生活の支へとなつてゐるところから、私にとっての仏教、私に生きる仏教がこれだと申し上げたのである。

第六章 日本人の感性は衰滅したか

——捨命の宗教を思うて——

(昭和五十年一月号)

昔、中学生の時に修学旅行で金閣寺に行った。その後、大きくなって京都に滞在するとは数知れずあっても、何故か一度も訪ねたことはなかった。足利義満の栄華ここに極まる、といった批判が先に立って、どうしても足が向かなかったのである。

それが、金閣寺炎上にまつはる三島由紀夫さんの発想をじかに感じたくなったことと、田中澄江さんの評判作『花かぐら』の前篇の中心舞台である北山を毎週テレビで楽しんでみるうちに、ついついひかされて足が向いてしまったのである。

西に衣笠山、東に大文字山をかかへた北山の峯々を借景にとり入れた庭園の中にあつて、再建された金閣寺は決してきらびやかではなかった。その昔、若くして私が感じとつた「ぎらぎらするやうな金ピカ」のいやらしさはどこにもなかった。それどころか、少しもそれまで気付くことのなかった金閣寺垣、不動堂を出て裏門に続く土塀の曲線と対応す

る土塀内側のモウソウ竹の竹林、その竹林内にみえかくれする紅葉、といった数々の美しさには、ただただ眼のさめる思ひがした。思はず、これは齡のせいかなとつぶやいた。

さうして、ここは古京随一の環境ともいへるかと自分に思ひきかせた時、若い日の或種の偏見にも似た感性が痛く省みられて、とても「今時の若い者が……」などは、口はばつたくて言へることではないかと気付いたことである。

ところが、翌日、法隆寺の大宝蔵殿にあって、もとのもくあみに戻るやうな場面に出くはしてしまった。

思はず耳にした「胴のわりに足が長すぎるぢやないか。手に水筒を下げたりして……」の声の主は、ガールフレンドの肩を堅く抱いた当世流行の長髪の青年であった。世界彫刻中、最も簡古にして神韻をたたへた一代の傑作とみられる百済観音の左手にある薬壺が彼等には水筒とうつるのである。ユーモアにもならない無教養ぶりがここにあった。

宝蔵殿の最後の陳列室には、推古天皇御物の有名な御物「玉虫御厨子」たまむしのおくしが納められてある。台座の正面の向って右側には「飢えた虎に身を捨てて与へるの図」がある。暗がりになって、私は一生懸命それをながめやってみた。そこへ旭川の高校生の一団が入ってき

た。思はず私は御厨子から離れて席をゆづる姿勢をとった。しかし、そんな配慮は不必要であることがすぐわかった。彼らはがやがやさわぎながら、足早にただ通りすぎていった。中には、ボーイ・フレンドらしい男子学生に色目を使ってはしゃぐ女子学生もゐた。

有名なこの御厨子は、彼等の視界には全然入らないのである。ましてや、捨身施虎の精神を思ひみる糸口すら拓ける余地があらう筈もない。かうして彼等は、人生に貴重な一期一会の好機を団樂のうちに失って、しかも、それと気付くことがなく過ぎてゆくのである。さう思ふとむしろに悲しくなってきた。

私は亡くなつた評論家の亀井勝一郎さんが好きで、敗戦直後、吉祥寺のお宅を訪ねたら、「今『聖徳太子』を書いてをります。日本書紀を読むことが私の全てでして、それで充分なんです」といふお返事だった。その亀井さんがしきりと、この捨身施虎の図にふれて書いてをられる。

ところが、これまた齡のせいか、太子の直作『勝鬘經義疏』しょうまんぎょうぎしよを拝読してゐて、太子御自身の一番深いお氣持がこの図にかかはつてゐることを改めて知らされたのである。

『勝鬘經』といふ經文の本文には、正しい仏教の真理（正法）を體現するためには、三種

類の自分の所有物を「捨て」なければならぬ。その三つとは、身と命と財であるとみえてゐる。

さて太子はここを解釈されていふ。昔の注釈者は「捨身とは、みづから進んで奴隷になること」であり、「捨命とは、他人のために死ぬこと」であると区別してゐるが、捨身も捨命も、何れも、「死ぬこと」で同じである。ただ意の立て方がちがつてゐるだけであると説かれる。例へば、飢ゑた虎に自分の身体を与へることは「捨身」であり、義士が危急存亡の時に国家のために生命を捨てる場合は「捨命」であると。

かうした太子御自身の註釈は、そのまま太子御一家（上宮王家）の家庭教育の眼目、いはば家憲であつたらしい。それは太子のお子さまであられる山背大兄王が、蘇我入鹿の軍の襲来を受け、やむなく難をさけられた時、一たん東国におもむいて軍勢をととのへ、戻つてきて戦ひませうといふ側近の意見をしりぞけられた後のお言葉に明瞭に拝取される。「さうすれば勝つことにならうけれど、十年間、国民を使役すまいと心に願つてゐる自分として、自分一身のために、どうして国民に労苦をかけられよう。また後世、私のための戦ひによつて父母をなくすことになつてよいものであらうか。たとひ戦ひに勝つたとして

も、それでは丈夫ますしをとはいはれない。へ身を捨てて国を固めるVのも丈夫ではないのか」とおっしゃり、その通り「一身を入鹿に与ふ」とあって、一族共々に自害してはてられた。ここに上宮王家は完全に滅亡されたのである。

『日本書紀』皇極天皇紀のこの段は、「捨身施虎」の御精神が「捨身入鹿」の歴史事実となつて、信を現実に実現した「まこと」のあることを物語るのである。そのやうに二つのことを結び付けて解することができるばかりでなく、かうした捨身が、一に「皇室の安泰と国民の平安」を希求せられてのことであつて、まさに「国家危急存亡の時における捨命」にほかならぬことをも物語つてゐるとも解することができる。

崇峻天皇を弑逆しまつた大悪人が、こともあらうに太子の妃の父、即ち義父にあたる蘇我馬子であり、蘇我の武力をもつてすれば万世一系の皇室は全滅するの悲運を前にせられて太子の御苦悩はいかばかりであつたらうか。この危局にあられて、太子が皇統と国家の護持を念願せられ、その実現の道を「正法を摂受する」ための、三つの捨に見出されたことは明らかである。さうした御精神が、「捨身」と「捨命」とが共に「国家危急存亡の時に、一身を省りみず生命を捨て死ぬこと」において同じであるといふ風に、太子をして

解釈なきしめられた根本の動機であられたと拝察せられる。

さうして、この「国家のための捨命」が、御子の山背大兄王によって実行せられ、近くは、明治天皇の教育勅語に「一旦緩急あれば義勇公に奉じ……」と明示せられる国民精神の道統となつて、代々世々に生かされてきたのである。

ここにおいて、日本仏教の樹立は、その受容の最初の形態がすでに一身の解脱をはかる小乗仏教を超えたものであつたことは勿論、更に衆生教化の大乗仏教の精神もまた、国民・国家の救済といふ全体に統べをさめられることになり、個人宗教から眞の公共宗教に昇華せられたものであつたことがわかるのである。

ここにおいて、日本仏教は、国家の統一と国民の福祉に働らく捨命宗教であることにおいて神道と同じであるのである。各寺院の内陣の壇上に「聖寿万歳、天壤無窮」の牌がおかれたのは、このことを証明して余りある。

「死ぬこと」は人生最大の苦痛であり障害の最たるものである。だから、旧新約聖書もコーランも仏典もその他、洗練された諸宗教の聖典は、死苦の原因と、それからまぬがれる道について、眞に人類史的な悪戦奮闘の跡を残してゐる。さうした数多くの宗教的生命

観と解脱・救済の方法について熟知されてゐた筈の一人の宗教学者に、運命は皮肉にも上顎癌といふ不治の病を見舞つた。この癌と闘ふこと十年、遂にはこの憎みても余りある癌を目にして癌大明神とまで言はれる心境に彼はなつた。その人こそ誰あらう、元東大図書館長の岸本英夫博士で、奇しくも私とその初代助手をつとめた恩師である。先生は言はれた。

人間は誰でも自分の生命がいとしい。そのいとしい生命を捨ててこそ生甲斐があるといふ矛盾した生き者だ。(『死を見つめる心』)

と。生命の悲しみ、苦痛、傷害から遠ざからうとすることは、人生の本質的な部分を避け、避けてゐることであり、逆に人生の本質に迫り、享樂ではない筈の生甲斐のある喜びを感じしめるのは天賦の障害の克服に成功した時である。だから不快と障害に対して寛容であり得ない近代人は快のみが眞の喜びを与へるといふ迷ひの中にある。さう言ひ切つたのは動物行動学者でありながらユニークな文明批評論を書いたコンラート・ローレンツであった。

ローレンツの言ふごとく、感性の虚弱化と衰滅といふ倦怠がもたらした近代人に弘まる絶望の感、ことにこの絶望に打ちひしがれた若者の人生を再度生きるに価するものたらし

めるのは、打ち克ち^かがたい障害死や不幸や不快があることの意義を教へることであらう。しかし、ローレンツの口からは、遂に捨命の宗教を教へる言葉は出なかった。彼が黙して語らなかつた捨命の宗教について、われわれはさいはひ多くを語り得る。問題解決の道は、足許に用意されてある。

第七章 親切さと不親切さの吟味

——オリエンテーションとオリエンテーリングの相違から——

(昭和五十年八月号)

昔の教育を受けた者には聞きなれない言葉が近頃多いが、「オリエンテーション」もその一つではなからうか。

とりわけ意味付けするわけではないが、日本で新学年度の開始がたまたま桜の花咲く四月になってゐるのは文句なしに素晴らしいと思へる。欧米の学園で生活したことのある人ならば、きまつてと言ってよい位、比較するともなく比較させられて実感させられることなのである。例へばアメリカでは九月三日の国民祝日。レイバーデーが夏の季節の終る目

安になってゐて、大抵の観光施設はこの日に戸を閉めて翌年の春まで長い冬眠に入ってしまった。ニューイングランドではレイバーデーを過ぎると、日によっては自動的に暖房が入る時もある位になってきて、秋を縮めて足早に冬に近付くのがよくわかるのである。

レイバーデーから本冬の冬になる間に日本にいふ小春日和にあたる時候がないわけではない。彼らはこれにインディアン・サマーといふ名を与へてゐるのは面白い。たまたまインディアンの襲来があつてのこと、といふ体験にあやかり、突然季節外れの暖かい日があつてきたといふのでさう名付けたもののやうである。

このやうにして夏が終り、段々と冬になってゆくその最初の月、つまり九月の中旬頃にむかうでの新学年度がはじまる。

考へやうによつては、厳しく暗く自分にとちこもる時期にあたつての新学年と明るい希望にみちた春にあたつてのスタートとでは随分と学生の気構へに自然とちがひができてきてゐる。

さてその学年始めにオリエンテーション週間がある。戦後、学制改革の結果、このアメリカ流のオリエンテーション方式が日本の各学園に移し植ゑられた。

オリエンテーションといふ言葉でなされることは一体何なのかとみてみると、大学の伝統的性格、教育眼目の説明からはじまって、各学科の内容、単位のとり方、図書館や研究室の利用法などに及ぶ説明会なのである。つまり、新しい学園の環境に出来るだけ早く、また、うまく適応できるやうに教へる仕組のことなのである。成程、これならオリエンテーションといふ言葉そのまま、文字通りの意味であつて「方向付けの営み」と解したら間違ひない。

大学紛争を経験した大学当局は、とりわけこの種のオリエンテーションに大きな工夫をこらし、その効果に大きな期待をよせるのも無理からぬことであるが、昔流の教育を受けた人達の目には、そのところが却つて過保護で親切に過ぎるとうつるらしい。そのことを証明するやうな意見が『読売新聞夕刊』のサイドライト（四月十日）に載つてゐた。

その中で筆者は、英語のオリエンテーションにあたるドイツ語のオリエンテリングを引き合ひに出し、オリエンテリングの不親切さが必要ではないかと言ひ出してゐる。調べてみたが、オリエンテリングといふのは元來十九世紀の中ごろから行はれていた野外軍事訓練であつて、それをルール化してスポーツにしたものである。漸くここ十年ばかり

の間に日本にも輸入され流行してきてゐる。

競技方法は、山野に設けられた未知の標識、チェックポイント（普通は全体で6、8ポイント）を地図と磁石を頼りにして、一つ一つ捜し出して最終のゴールまでの所要時間を争ひ、最短時間をもって勝とする競技である。

早いもので、近くは埼玉県の高麗をはじめとして常設コースが随分とわが国にも出来てゐるらしい。そこでドイツ語のオリエンテリングは、地図と磁石を頼りに自分で工夫して、困難に打ち克ち「一定方向を定めて歩く」ことだとはっきり言へるものなのである。

このスポーツのもつ自主性、積極性こそは新しい学園生活を始める学生達にとって一番必要な心構へではないか。ところがオリエンテーションの方はどうもお仕着せの受身ばかりで過保護にすぎるきらひがあるから、むしろかうした親切な施しはやめにして、ここでオリエンテリングのもつ自主性、積極性、冒険性を打ち出し、全体として、一見「不親切」とみえる取扱ひをする方が、最終的には本当の親切になるだらうといふ主張なら理解できないことではない。

そこで私はかうした意味合ひでの親切さ、不親切さについて、何れが正しいのか吟味し

てみたのである。

そもそもオリエンテーションといふ英語はオリエント（東方）に向くことを原義としてゐる。この場合、オリエントのオリは「昇る」といふ意味のラテン語の動詞で、間違ひなくきちんと昇るのは太陽であるから、日の昇る方向、つまりオリエントは東方を意味するやうになつてゐる。

ところが興味あることは、ユーラシア大陸の西側に位置するヨーロッパ人達にとって、彼らがマホメット教徒と比べてどこが異なるかといふと、キリスト文明をもつてゐるからだといふ自覚がおきてきた。そのやうにお互ひは顔形がちがっても同じやうにヨーロッパ人として共通であると自覚させるそもそもその基盤はキリスト教文明を共有するからであるが、そのキリスト教の聖地こそは他ならぬ東方のエルサレムにあるといふことによつて事態は宗教的なものになつた。

そこで何時とはなしに「東に向く」ことは、聖地に向くことであり、それは生きてゐる間の祈りをする方向となつた。さうして、それが教会建築に具体化され祭壇は東側に、入口は西側に位置するやうにきめられたのである。人は教会の中であつて、祭壇に向いて祈

る。それは東方に向かって祈ることである。また死後人は顔が東を向くやうにして埋葬されるきまりである。

してみると、生死をつらぬき、まさに現世、来世を一貫して、東といふ一定方向にむくやうにすることがオリエンテーションの原義であり、その意味がキリスト教世界では実際に生かされてきた文化現象であることがここで理解されやう。

つまり、オリエンテーションとは、本来、

生死をつらぬき、人としての生命の方向を一定にする

といふ宗教用語であるとみるのが正しいやうである。

スポーツとしてのオリエンテーリングにも、チェックポイントとしての標識が幾つかある。スポーツとしては、この幾つかの標識を早くみつけて廻ってくるその時間の速さに勝負がかかってゐるが、このことばのもつ精神的意義としては「一つの標識、目標に正しく向くこと」が大切である。

すると、オリエンテーション、オリエンテーリングの両方を通じてこれを本来の宗教用語としてとらへ直すなら、

人として正しい方向を向くこと！

それは生死を貫いて！

といふことになる。

そこで、この言葉からはただ単に「東方」とされてゐる目標をば、新たにこの学園では何としてとらへるのがよいか——それは人としての成長にとって不可欠といふ解説が一番肝要である筈である。ところが肝心のそれが今日の学園にみるオリエンテーションにはないのである。勿論スポーツとしてのオリエンテーリングにもあらう筈がない。

さう考へてくると、沢山ある人生目標の中で何を選ぶかといふことが必要となるが、そのためには、何より「人生を何とみるか」といふ、人生観がどうあるべきかが問はれてくるのである。

われわれのうけた旧制高校の教育では入学式で開口一番、

人生観の確立をはかる生活だ

と言はれたものである。これは今考へてもオリエンテーションの本義に適つてゐると思ふ。

およそ宗教は、この人生観を、ああでもない、かうでもない式の思考にゆだねず、長年の批判に耐へて結晶された人生観のエッセンスを抽出し、それを実践目標として大きく表示することをためらふことがなかった。特定宗教によらない学園と雖もこのやうな宗教の営みに今こそ学ばねばなるまい。

例へば仏教の「四弘誓願」をみてみよう。

衆生無辺誓願度（利他）

煩惱無尽誓願断（自行）

法門無量誓願学（自行）

仏道無上誓願成（利他）

数知れぬ沢山の衆衆を救ふため、先づ自分の煩惱を断ち切り、道の学問をきはめ、かくして永遠に道が実現せられますやうにと、自己修行と他者の教化救済の二つを立派に在らしめたまへと誓ふ。これこそは眞のオリエンテーションで、つまり不変の態度決定志向である。ここでこそ、道への随順と自己研鑽といふ化他自行の二つが生かされる永遠の方向付けが確立するのである。神道もまた「まこと」といふ自行利他の発生原理をもつてオリ

エンターションとする。

第八章 すこやかであるために

——健康法あれこれ——

(昭和五十二年二月号)

療養生活に入ってから、満一年をすぎた。入院中は勿論のこと、退院後も長年私を診て下さつてゐる医師と義弟の内科医の手当てが続いてゐることは言ふまでもないが、何せ、十五年前に発見された糖尿病が下地にあるので、色々と合併症がおきてしまつて予想外の難渋を強ひられてきた始末である。

さて、この間、病苦克服に役立つとみられる処方について御好意あるお教へを下さる方が幾人もあつた。そのうち、実行してみても効能が確かだと思はれる一、三についてふれてみることにする。

退院後間もない頃だが、皇学館大学長の佐藤通次先生が私の身を御心配下さつて、『健康談義』と題する先生の著書を贈つて下さつたのである。それによると昭和十一年に有名なドイツ語の辞書『独和言林』(白水社刊)の編著のお仕事で先生は数年にわたる脳神経、

視神経の酷使がもとで、眼精疲労と不安神経症とに陥られてしまった。そこで先生は気付かれた。これまでは身体の一部である眼で見、脳で考へることに終始してゐたが、全身全霊で見たり、考へたりするといふ全身を渾一的に保つ工夫をしてゐなかつたと。それから、臍下丹田の一点に力が自然に集中するやうに全身を渾一的に保つ工夫——正身正息の実践法をあみ出されたのである。

たまたま入院中に見舞に来て下さった日本教文社の中島編輯部長が同社で刊行されたばかりの直木公彦著『白隠禪師——健康法と逸話』をおもち下さった。白隠が二十六歳のとき、長年の激しい修行の疲労が一時的に出て、半死半生の状態となつた。ところが幸ひに京都白河の山奥に隠棲する白幽仙人から養生と征病の秘訣を教へられ、九死に一生を得ることができた。その工夫を書きとどめたのが『夜船閑話』やせんかんわで、白隠七十三の時の作である。それがこの本でよく解説されてゐたので、精読したばかりでなく、ベッドの上で私は実修につとめた。その要点はかうである。心気が臍下丹田に落ちつきをさまるやうにする^と、その息は深く、全身的となる。さうした調身——調息——調心による完全呼吸法が根本となつてゐる。下腹部に力を入れて鍊るこの種の呼吸法をおこなひながら、「内観の四句」

を心にとなへ、心の働きをその意味に集中し、精神を統一してゆくのである。

不十分なながらも、白隠禪師の残されたこの方法を実修してみた矢先だけに佐藤通次先生の「正身正息の実践」がいかに貴重なものか、理解できた。そして、偉大な人生は、その健康法においても到達点を一つにするものだといふことをしみじみ実感したのである。

佐藤先生の健康法は、右に述べた「整体」に加へ「真まっ向かう法」といふ体操を「錬体」として加へてをられる。この体操は退院直後、夜久正雄先輩（『歌人、今上天皇』の著者、亜細亜大学教授）が、まだ便所にゆくにも、身体がふらふらする位の状態の私に、床の上でも簡単にできるからと言って教へて下さった。その時以来、一回も欠かさず実行して来たのでこの「錬体」の効果もよく納得できた。

佐藤先生の健康法で、私にとってユニークなのは、更に体内を常に清浄に保つために自家製のヨーグルトを召し上ってをられることだった。乳酸菌と酵母菌と麴菌とを牛乳に投じて醸成したものである。

家内は多忙で自家製ヨーグルトを作る余裕がなかったので、とりあへず市販のブルガリ

ア・ヨーグルトを食事のたびにとることにした。そのせい、さしもの胃腸障害も日増しによくなってきたことを感ずる。

近年ブルガリアやハンガリーが世界でも稀な長寿国であることが注目され出し、その一因にヨーグルトの多用があると言はれてゐる。何故この二つの国にヨーグルトが発達したのか、実は私はわからなかったが、最近その謎が解ける説を眼にしたので次にふれておく。

ヨーロッパで、蒙古の騎馬民族が遠征の末に残り得たのはこの二つの国である。騎馬集団は常に羊や牝馬をつれてゆき、その乳をしぼりながら「歩く食料」と共に進軍できた。それに乳を腐敗発酵させた乳酸菌——つまりヨーグルトを多用し、主食の一つにしたらしいのである。ヨーグルトはすべてが腸内に残り得ないけれども、赤痢やチフス等の伝染病の予防には有効である。それがため、蒙古軍は他民族に比して羅病率がきはめて低く、あのやうな長期遠征ができたらしい。騎馬民族の活力源は意外とその食糧——ヨーグルトにあったのではないかと推測されてゐる（松枝張著『エチオピア絵日記』岩波新書）。

市販のブルガリア・ヨーグルトがその表示の如く、ブルガリア本国のものそのままであるのかどうかはわからないが、東洋の蒙古族が発明したものがブルガリアで発達し、ブルガリア・ヨーグルトの名において日本でも逆輸入の形で売り出されるに至ったのは、興味ある歴史の推移だと思った。

敗戦の九月、海軍から復員した。早速と東大の故・岸本英夫先生（この度『岸本英夫著作集』が毎日出版文化特別賞の栄に浴された）が拙宅に見えられ、研究室の助手になるやうにお奨め下さったので喜んでお引受けしたまではよかったが、栄養失調がたたって左肺浸潤にかかっていることが判明し、まる一年職を休んだことがある。敗戦後のことで、抗生物質もなく、専ら絶対安静療法である。暑いからといって団扇を使ふことも禁じられた。一寸した運動も胸部にひびくといふのである。そんな絶対安静の長期療養だったが、今から省みて、それほど苦しい闘病生活だったといふ気がしない。

ところが今度はちがふ。胸の圧迫感はなかなかとれないし、下半身のしびれもひどい。便秘と下痢が交替して三カ月位は食もすすまなかった。客観的には少しずつの回復に向っ

てをるのだらうが、本人にすれば来る日も来る日も、同じやうな容態の連続である。いい加減でいや気がさし、むなしい気がしてくるのである。

せめてこんな逆縁を転じて、ゆっくり寝ながら読書する好機にでもしたらと思つても、そんな集中力が湧いてこない。本を読んだり、ものを書いたり、講義したりする以外に生きる能のない者にとつて、そのリズムがとまつてしまつた段階では、我を楽しむ手だてをもつことができない。大体、特別に何の趣味もない自分にとつて、吾を忘れるのは読書と研究ぐらゐで、いはば片輪者に近いわけである。

それが出来ない身体であるとなると、自分はこの大切な時世に、貴重な一刻を無為にかうして闘病生活にあるといふことが、責任を果してないといふ空しさとなつて心にはねかへつてくる。かねて熟知の実存心医学の大家、高島博先生（社会保険中央病院・部長）がわざわざ拙宅に見えられ、「人生それ自身が趣味といふこともあるんで、無趣味でよいんですよ」「慢性病をかかへたら、病気を完全にうち負かすといふ闘病のためにエネルギーを使ふのでなく、病氣と和解し病氣を友とする従病（しやうびやう）の態度がよいですよ」と、半日も私のために時間をつぶしてアドヴァイスして下さつた。この従病主義は親鸞（しねんぼう）の自然法爾と

同じ発想である。

小田村寅二郎先輩（国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授）はかう忠告してくれた。

「戸田君、君がただ生きててくれるといふだけで、喜びとする人があるんだよ！」私は高島先生とこの先輩のアドヴァイスにはつと眼の開ける思ひがした。

ただ寝たり起きたりのぶらぶらしてゐる療養生活で、実は何も為してはゐない、責めを果すこととは何もない。それなのに「生きてるだけ」で立派に人に喜びを与へることができてゐるんだ、と気付かされたとき、改めて私は無為の意味がわかりかけてきた。

まだまだ述べねばならぬことは沢山あるが、ともあれ明日への希望に燃えて、今や無為に徹するやうに少しでも心掛けることができるやうになつたのは、全く真情あふれる、私如き者への愛の力であることを、多くの難病に苦しむ人達に何かの参考になればと、ここに告白する次第である。

第五篇 天皇陛下と現今の日本

第一章 日本人の「精神生活」

——現代における実態とその問題点——

(三島由紀夫の思想信仰にふれて)

第二章 皇帝戴冠式と天皇即位式

——ネパール王室戴冠式に参列して彼我の意義を省みる——

①ネパール国王親政の国の国情

②ホーリ祭と「どんど焼き」

③王政復古の成就と近代ネパールの誕生

④ネパール戴冠式——その宗教儀礼——

⑤天皇即位、大嘗祭の本義から天皇陛下の本質に及ぶ

第三章 大嘗祭——伝統の秘儀の発見と創生——

附・奉祝歌五首

第一章 日本人の「精神生活」

——現代における実態とその問題点——

(三島由紀夫の思想信仰にふれて)

(編者註) 本章は、大倉精神文化研究所・第一回公開シンポジウム『日本人の精神生活』における、基調講演である。(昭和五十年十二月刊『大倉山論集』第十二輯所載)

この度のシンポジウムの御案内で、「精神生活」といふ日本語が学術用語であり、しかもそれがルドルフ・オイケンの中心思想をなすものであること、またそれが大正の初めに我国に輸入せられ、それが「精神生活」の指標といふ意味合ひの言葉になったことを知らされたわけであります。しかしオイケン自身は、自然を精神的存在以前のものとして考へて、その精神以前の自然からガイステスレーベンへと進化していく普遍的な精神過程を考へたわけでありますから、「精神生活」と訳して必ずしも悪くはないが、少し検討を要する

ものがあるやうに思ふのです。元來、ドイツ語の「レーベン」を生活と把へてよいかどうか、問題だと思ひます。私は、旧約聖書學專攻の石橋智信先生の教へ子でしたが、先生からかねてドイツ語の「レーベン」は英語の「ライフ」と違ふ、まさに日本語でいふ生命いのちなのだ、これにあたるのがヘブライ語のネフェツシュ、つまり身体を離れてはゐない精神と心の動き、まさに生命といふべきものだといふことをよく聞いてをりました。それでオイケンのガイステスレーベンといふのは、ウパニシャッドの梵にあたるやうだし、ドイツ觀念論者ヘーゲルのいふ絶対的精神にあたるやうな、そんな感じがする言葉です。さういふものを把握するための一つの生活、それがまさに精神生活なのでありませう。その中核のガイステスレーベンといふのは、精神の生命、肉体を離れたところにはない生命、さういふ感じぢやないかと思ふのです。

只今の司會者の紹介で、明治四十二年オイケンがとりましたが、それより早く、すでに明治二十九年にオイケンは『ディアカンフ・デス・ガイステスレーベン』といふ本を書いてをり、その中にすでにガイステスレーベンの思想が登場してゐるのです。

ガイステスレーベンが我国で問題になつてきたのは、はからずも明治から大正へかけ

て、いはば大正デモクラシーの頽廢期にあたつてをり、オイケンをも含めたネオ・イデアリスムス、新理想主義の哲學者達の主張が期せずして、ガイステスレーベンを強調するやうになつてゐるのです。そして今日の時点で再び問題になつてくるこの状況は、日本人の場合といふ特定の条件はつきまじりたけれども、オイケンを回想しながら、その精神生活が問題になるといふ事態であります。この状況は、大正デモクラシー期におけるネオ・イデアリスムスの哲學者達の思想が翻訳で問題になる時期と、同時にネオ・イデアリスムスの哲學者達が、まさにヨーロッパの思想状況の中でさうしたことを主張せねばならなかつたもの、この三つの状況が不思議と相照応してゐるといふことに気付かされます。

まづ十九世紀半ば、ヨーロッパにおいてガイステスレーベンが問題にならなかつた状況を考へてみますと、まづ一つには自然科学が隆盛に向つてゐるといふ状況が考へられれます。一八四二年ロバート・マイヤーがエネルギー保存の大法則を発見してゐます。従来の生理的現象といふものは、一般的自然能力とはちがふ特殊なバイタリティーで説明されてゐましたが、自然科学の隆盛と共に、生理現象もまた自然科学の法則、機械的法則のもとにあるといふ説明がなされたのです。さういふ流行期にあたつてゐます。さうして、自然

科学的事証主義万能になったのです。加へて唯物論が盛んになってきました。

唯物論では人間の意識すら物質的進行の所産であるとみます。物質が出来、物質の運動を世界原理として見てゐるわけでありまして、神の存在、靈魂の存在、すべて否定せられるといふことになります。これはフォイエルバッハの唯物論に顯著に出てまゐります。更に一八五四年ドイツのゲッティンゲンにおいて自然科学者の集會があり、その時ルドルフ・ワルダーが、自然的法則物理的進行のもとにあるのとはちがった独立の靈魂が存在すると主張したのに対しまして、カール・フォクドーが猛烈に反対をしました。

一八五四年のこの段階で、唯物論と独自の靈性の存在に対する主張とが、まっかうからぶつつかりあつてゐるのです。この自然科学者の會議は実に象徴的だと思ふのですが、それから四十年程たつて、オイケンの「ガイステスレーベン」に対する主張の書が出てゐることが思ひ合はされるのであります。ネオ・イデアリスムスの流れの中で忘れられない碩学はウィルヘルム・ヴントであります。ヴントの『論理学・三卷』の特にその初めの部分が大正五年に「精神科学の基本問題」と題してわが国で翻訳され岩波書店から出てをります。その中でヴントは精神性の認識を精神科学の原理として強調してゐます。とりわけ注

目されるべきは、精神生活の領域の中でもっとも人の注意をひくものは、精神生活が民族の行動となつてあらはれてゐるとしたことであります。民族における精神生活、精神生活における民族といふファクターを重視したことであります。さういふ新理想主義の哲学者達が、ガイステスレーベンを強調しなければならなかつた時代状況と、まさに日本の今日が照応せられるやうに見えるのであります。

今日、自然科学が万能の役割をしてゐるといふ証拠は、科学の影響が哲学の分野にまで及んでゐることによく表はされてをります。論理実証主義、分析哲学の名における一種の哲学運動がそれであります。これが顕著であり、精神性を主張する文化現象に対するはげしい挑戦者として登場してきてをります。一九一七年のロシヤ革命以後のマルキシズムの流行、これと戦後デモクラシーの中核をなす絶対平和主義、人権主義、特に人権にみられる表現の自由、これらが、全体を忘れたあくなき利己主義の徹底として展開してをりまして、目を覆ふばかりの状況であると申さねばなりません。

人間の本来的自覚としての、ガイステスレーベンに対する関心の無さ、つまり精神の荒廃がこれほど顕著にあらはれてゐる時代は少なく、いはば世俗化傾向のゆきづまりの破局

であると言へるのです。イギリスのガポールは、良い意味の成熟社会が日本にあるやうに考へて、彼の著『成熟社会』に書いてをりますが、彼の考へは甘くともないことであると私は思ひます。むしろ、成熟どころか、爛熟、狂ひ咲きの時代が今だと私は思ふのです。このシンポジウムの副題に「現代における実態とその問題点」とあるのは、まさにその辺の状況を汲み取って出されたものではないかと思ひます。

私がこの問題にどういふふうに通つていくか、扱ひ方、方法について、これから申し上げます。

「日本人の精神生活」の内容は多様多岐にわたつてゐます。従つてこれを画一的な束にして把へること、マルキシズムがよくやるやうな画一的な一元論で理解されるものでは決してないのです。あくまでも「日本人の精神生活」といふ個人的事実をその特性において多元的に理解していかねばならぬものです。さうした場合に、その対象になる「日本人の精神生活」は、いきなりこれを全体として認識せしめるやうな、一定の塊りを持ったものとして、我々の前にあるのでは決してないのです。我々自身むしろその中に生きてゐる―その対象となるべきガイステスレーベン、日本人の内部と外部が同時に係りあつて点滅して

あるやうな事象でありまして、これはたゆみない多様性をもつものとしてあらはれてきてをります。実にみきはめ難くみえる多様性のものだともいへるかと思ふのです。それをどう把へ、理解するのか、それにはどういふ学問的方法、迫り方があるのか、といふことが第一に問題になると思ふのです。

そこで問題になるのはマックス・ウェバーが『社会学方法論』の中で問題にしてゐるイデアルタイプの考へ方であります。無限に多様な現実を認識するためには、その現実の一定の局面、中核的な一つの部分、部分ではあるが一番大事な核心的なもの、それをどうして選び出すか、それにはその研究対象に向つてゐる研究者の価値理念、つまり私にとつて価値があると思ふ理念に照して、いはばライトをあてるやうに照射して、そのライトに照り返ってくる部分、つまり私といふ研究者の関心に値ひする部分、その部分を切り取るやうにすることが可能でないのか。

つまり、私の持つてゐる価値理念に関係づけて、関係づけられたところのものを取り出す、さういふ操作—これは純粹に理論的な操作であります。しかし、それは私の持つてゐる価値判断で対象をば、つまり「日本人の精神生活」を価値的に判断しつくすといふこと

とは別であります。

価値判断と、価値に関係づけて、それに照応する部分を取り出してくるといふことは厳密にいつてちがふことなのです。いはば私のもつ価値に関係づけて相手のものを取り出すといふ場合、そこに取り上げられた局面とか要素とかを思考の世界で高めてゆき、広げていく。さうして、それを以って本質であるとみなすこと。つまり、さういふ意味でのイデアルタイプス、これを構成するといふ考へ方であるのです。

例を挙げればマックス・ウェバーの書いた『プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神』がそれであります。しかし、ここで問題になるのは、ウェバーが歴史的、社会的、人文現象、経済現象について、その研究対象を把握しようとした場合、その研究者の価値理念といふものがきはめて個人的だといふことでありまして、これは強く批判されなければならぬのです。真の価値理念といふものは、客観的にして、先天的な文化価値でなければならぬ。言葉をかへるならば、国民生活における共通の、前の世代から次々に後の世代へと受継がれていった学習の結果としての文化価値でなければならぬのです。この点で私はウェバーの立場からは遠のいてゆくわけであります。

従つて私のとる立場、私のもつ価値理念、それはまさに「全体に代つて思想し行動した」とき「全体のために死ぬるといふ価値思考」であります。これこそは、日本人の国民生活の中にある共通の中核的な価値といふふうに見えるのでありまして、その価値理念に照してそれに応じてはねかへってくる光あるもの、これを現代において把へるとすれば何か、といふのが、私が私に与へられた課題に迫る学的方法であります。

さうした時に、三島由紀夫の生涯、精神生活がその光に応へてはねかへつて来るのであります。そこで見られることは、精神生活が即ち国民生活であります。国民生活が即ち国家生活であります。従つて、ガイステスレーベンといふもの、その日本人の精神的いのちをいのちとして全うする精神生活は、それは日本人としての国民生活を全うすることであるのです。それは日本国家の国家的いのちをいのちとする生活であるといふふうになつてくるのであります。

現代の状況を踏まへて再び考へなほしてみますと、顕著な特徴は、民主主義の名における部分としての個人の功利主義にあります。これはあたかも大正九年ヴントが書いた自叙伝『体験と認識』の中に強調してゐる「自分の大きな関心は、専門学における研究の究明

と併せて、自分の所屬する国家民族の運命である」といつてゐるそのことなのです。このやうに専門領域と国家運命についての関心の二つを切り離して考へることはできないといふこと、何故、国家民族の運命が専門研究者としての学者に不可分にかかはつてゐるかといふことは、プラトンがすでに言つてゐるやうに、社会は個人に先だつてあるのです。人生の精神的な宝といふのは、客観的なものとして、まづ第一に、民族的、国家的社会に結ばれてゐるのだといふこと。個人の業績は国民的、国家的社会に結ばれてはじめてその意味を持つといふこと。さういふ点で、個人に対して社会国家があるといふことを理解することがプラトン以来の哲学的理想主義の原理であるのだといふことをいつてゐるのです。個人が民族的、国民的、国家的共同体に所屬してゐるといふことの紛れもない事実は何かといふと、それは民族言語をもつてゐるといふ事実であります。ことばがあることなのです。つまり言語的生命を人はいのちの実体としてゐるといふことなのです。

フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』といふ講演の中に述べてゐるやうに、ドイツ国民の敗北と勃興の眞の原因として、民族言語、言語教育の頽廢について彼は強く警告を發したのです。フィヒテがいふには、ドイツ語の「フロインディヒカイト」つまり「友情」といふ

場合、フランス語は「愛を与へること」となるが、ドイツ語の場合は、「兄弟のやうになる」といふことを意味するのです。さういふ、いはばドイツ語のもつ超感性的な部分、生々しい語感が、フランス語と匹敵できないやうな素晴らしいものであることに気付いて、それに目覚めていくことが、ドイツ国家再興の原因だと述べてゐるのです。

結局、ガイステスレーベンといふものは、窮極的には眞の民族言語を駆使するといふことに帰着するわけのものであります。丁度それと相応するやうに、私のもつ価値理念に光をあてたときに浮んでくる三島さん—この人が同じやうな問題に当面し、それを取り上げてゐることは奇なる一致であると申さねばなりません。

ある人が三島さんの文学はわかるが「楯の会」はわからぬといったのに対し、三島さんがそれはわたしをわかつてゐないといふことだと解答してゐます。その通りで、むしろ文学を捨てたあとの三島さんに、日本人としての典型的なガイステスレーベンがあると見られるからです。それはどういふことかといふと、三島さん自身、自叙伝とも言ふべき『太陽と鉄』の中に次のやうに告白してゐます。自分は民族共有のことばである日本語を使って表現し、皆と違ふ世界を打出して、それで個人として成功しようとしてきた。それはど

んなに卑しいことかshれない。むしろさういふものを捨てたときに何が残るか、それは自分が御神輿を担いだときの感じ、それは同じやうに重いものを担いで肉体を苦しめてゐる。そしてごく平凡な、誰もが使つてゐる日常の日本語のことば、つまり民族の共同性に徹したことば、さういふ共同のことばの世界に自分が戻つていったときに、自分がいかに民族共同のことばを使つて、自分を特殊化しようとするものが卑しいことかshに氣づいた。で、さういふ民族言語の共同性に徹するといふ考へ方が出来たときに、死ぬるといふ想ひが湧いてきたやうであります。いはば散文から韻文の世界への転換をしたのであります。

「楯の会」といふことば自身が「醜しとの御楯みたてと征いでたつ吾は」といふ『万葉集』のまさに敷島の道に由来してをります。醜の御楯といふ、その取るに足らない身、しかしその身を以て大君のために御楯とならしめるといふ、草葬もうちうの臣に徹することが出来た。これはことばの共同性に徹するといふこととシノニム、同一なのであります。その死ぬるといふことについて、勝鬘經の攝受正法章において説かれてゐるところによれば、正法を体得するためには三つの方法がある。身と命と財を捨てよと。これを聖徳太子が義疏の中で解釈されて、「身を捨つるも、命を捨つるも、共に死ぬるなり」と御注釈になつてをられる。大い

なるものために命を捨つるといふことでは、同一なのであると。これが単に注釈ではなく、上宮王家の御精神であったといふことは、山背大兄王が蘇我入鹿の襲撃を受けたときのことを「一身のために兵を興し、わが戦のために後世になって父や兄、はらからを失ったといふことが残ることは耐へがたきこと」である。それ故、あへて「わが命を捨てて国を固むるも丈夫オトコならずや」と『日本書紀』では書いてゐます。

皇統連綿たる御血統をいかにしてお護り申すかといふ、その一念において命を捨つるなり、身を捨つるも命を捨つるも死するなり、といふ御精神、これは忍苦の極だと思ふのですが、これは一つに大いなる道、皇統をお護り申上げるといふことであります。そのためには死ぬことだとお教へになつてゐます。これは単なる仏教文献の注釈ではないといふことが明らかであります。

実は三島さん自身が石原慎太郎氏と「論争ジャーナル」誌上で対談したとき、三島さんが今日、自分が守るべきものは三種の神器を置いて他にないといったのに対し、石原慎太郎氏は「オレがオレらしく生きる自由を守ることだ」といつて笑つた場面があります。そこに明らかに二人の思想のちがひが出てをります。

常に陛下が天皇たるのお働きにふさはしい（天皇霊）を身につけるために、その霊を呼ぶ神器が三種の神器であるのですが、さういふことについて三島さんは、大嘗祭をはじめ、たいへん研究してをられることを知って私は驚きました。彼はさういふ見識を持ってゐるのです。そこでいろんな問題はあるが、わが国は天皇さまをお護り申上げる以外にないと、そこに窮ったわけで、その天皇さまをお護り申上げるといふことは、国連軍の支配下にある軍隊と別箇に、天皇さまの軍隊といふものを持たねばならぬ。さういふふうにして天皇様は祭主としての天皇様であられ、また文化概念としての天皇様であられると。このことを今日の時点において樹立する以外に道はないといふこと、そのために命を賭けた。それで死ねたのであります。

さういふことを考へると、太子以来の捨身、捨命の祖型（アーケ・タイプ）は大いなるもののために命を捨てるといふことでありまして、厳然として歴史をつらぬいて生きてをります。さういふ意味でも照応されてくるのであります。併せて三島さんが最後に書いた『革命哲学としての陽明学』を見ればわかります通り、自分がさういふことを理念としてわかりながら、なぜ死ねるかといふ、一番の秘密を説きあかしてをります。それは陽明学

の場合、王陽明にもあることであるし、また大塩平八郎の「良知」が到達した涯の太虚に帰するといふことは、いづれも彼らに神秘体験があつてこそ出来たことだといつてをります。それと同じやうな神秘体験が大塩平八郎の『洗心洞劄記』を常に座右の書としてゐた西郷南洲にもあつた。南洲は月照と一緒に錦江湾に沈んだときに奇蹟的に生きかへりました。その体験の中で太虚に入るといふリアリテイの認識をわがものにしてゐるのです。吉田松陰にもそれがあるとみられます。かういふふうに、つまり「理論的認識を真にわがものにするための体験の深まりを神秘体験としておさへてゐる」わけであります。一種の、靈が靈を呼ぶといふか、さう考へてまゐりますと、三島さんにおける神秘体験はあの『英霊の声』を書いたあたりから出てきてゐると思はれます。二・二六の勇士の靈が彼を呼んでやまない。つまり言ってみれば、日本人の精神生活は国民生活なのであります。さうしてそれは国家生活なのであります。国家といふガイステスレーベン、国家といふ精神的いのち、その精神的いのちが、いはば靈が靈を呼ぶやうに、いのちがいのちを喚びあつてゐるといふことであります。さういふいのちの喚びかけ靈的交流を感ずるのであります。それは決して理論的認識ではなく、体験的認識であると言はなければならぬのです。さ

ういふところに窮まった姿を感じるわけでありませう。私が三島さんを今日の時点における「日本人の精神生活」のモデルとして捉へる理由は以上の如くであります。

第二章 皇帝戴冠式と天皇即位式

——ネパール王室戴冠式に参列して彼我の意義を省みる——

(1) ネパール国王親政の国の国情

世界の最高峰エベレスト山があるヒマラヤ山脈、その麓にひろがるネパールは、北海道の約二倍の面積をもつ王国である。現国王の先代である父君の国王の時代に、正確には、一九六二年十二月に発布された憲法に基づいて、ヒンディ教（印度教）を国教とする祭政一致、国王親政の国家となつてゐる。

従つて憲法上、国教であるヒンディ教以外の他宗教の布教活動は許されてゐないが、憲法制定時にあつた既存の宗教、例へば仏教、イスラム（回教）などはそのまま承認されて、別に弾圧を蒙つたやうな形跡はなく、そのまま今日に至つてゐる。

政治面では、政党活動は禁止されてゐる。しかし、それに代つて民意を反映させる評議

会（パンチャヤト）制度がとられ、地域別、職能別に選ばれた民選議員と勅選議員とがメンバーとなる仕組みである。

ところが、この評議会制度に根強い不満をもったのは一九六〇年まで続いてみた政党政治の復活を望むコイララ元首相らのネパール国民会議派（インド国民会議派と緊密である）の旧政党人であり、知識人、学生らがこれと結んでみるとみられてきてゐる。

一九七三年六月には、ネパール国内航空のハイジャック事件の翌日に、首都カトマンズにある政府綜合庁舎（シンガダーバー）の放火炎上事件がおきた。

私は一九七〇年に現国王が皇太子であられる時の成婚式にお招きを受けたが、その節、文部次官にお会いするためこの綜合庁舎に伺って驚いたことがある。その室数三〇〇を超えるビルディングであつて、それがもともと、王室をないがしろにして政治を壟断してゐた文字通りの幕府、即ちラナ幕府の館であり、城であつたといふことである。ヒマラヤの麓にかうした大きな建物の在ることを想像することは想像外であらうがここでは事実なのである。

この幕府を倒してネパール維新が断行され、政治は現王室の手にもどつたことについて

は後述する。一九七一年、現国王が皇太子の時、東大に留学なされたが、私は頼まれて「明治維新と神道」と題して進講申し上げた。それがそもそもネパール現国王と私との御縁のはじまりである。その時、この皇太子が、アジア世界で唯一の奇蹟とみられてゐるわが国の近代化、それが明治維新を契機として断行され、その先頭にお立ちになられた若き日の明治天皇様に真剣にあやからうとされてをられることを知って私は感動した。孫文の清朝打倒のシナ革命が同じやうに明治維新をモデルとしてゐたことが併せ偲ばれた。

さて話を元に戻すと、この大きな綜合庁舎が誰かの手によって放火され、一夜にして悉く灰燼に帰した。さしもの大きな建物が完全に焼失したのはをかしい、といふ声が国内のあちこちに上った。あらかじめ各所に一斉に火をつけて完全に炎上せしめ得たからには、よほど大規模な陰謀があつてのことであらう。その陰謀を実行にうつす陰の存在がある筈だと。そこで、その黒幕は、反政府分子のネパール国民会議派ではないのか、といふことになった。国内の黒幕のそのまた黒幕があつて、それが外から後押ししてゐる。その外なる黒幕はインドに亡命したネパール国民会議派の面々、およびインド政府自体であらう、といふことになつてゐるのである。

一九七四年二月には東部のピラトナガルを視察中の現国王の暗殺未遂事件がおきた位である。

成婚式の時は、インド大統領みづから参列し、広大なインド大使館で祝宴をひらくといふ異例ともみられる位の肩入れをしたインドであったが、今回の戴冠式には格下げして副大統領ですませたのである。それには、両国間の親密な関係にひびが入る事件がおきてゐたからであると見られてゐる。

ネパールの東につらなる隣国シッキムが一九七四年インドの準州になったことをめぐつて、同年の九月には大規模な反印度運動がネパールに起き、インド大使館にデモ隊がおしかけるといふ事件があった。インドは激昂し、対ネパールの態度を政治、外交、就中経済の面で硬化させた。一九七五年の四月十日には、シッキム王国特別議会は王制を廃止し、インドの一州となることを決議した。つまりシッキムはこれによって独立を失なひ、インドに併合されてしまったのである。

インドのシッキム併合は、シッキムが第二のチベットのやうに中共に併呑されることを怖れたからで、そのやうな事態はインドの国防前衛線を犯されることに他ならないから、

それを阻止する挙に出たとのことであらう。ところがシッキムの隣国ネパールにすれば、シッキムの運命を第二の自国のたどる運命とも観じられたのである。そこで中共も怖いのがインドも怖いといふので、等距離外交を国是とし、従前のインドとの接近から適当に「インド離れ」がおこなはれやうとしてみたのである。インドはそれを非常な不満としたらしいのである。

この度の滞在中、たまたま、私がカトマンズのホテルで知った生の情報なまでは、チベットとの国境に近いネパール領では、中共に追はれたチベット人が独立をめざして暴動を頻発させてをるらしく、主要道路での検察はけはしいといふことだった。ネパールの怖れは、この暴動鎮圧を理由に万一中共の軍隊が侵入してくるやうなことになっては一たまりもないし、さうなればインドはインドで国防上黙ってはをらず兵をネパールに進めることになり、たちまちネパールは国際戦場裡におかれることになってしまふ。かう見てくると、中共とインドの二大国の谷間にあるネパール国の独立と平和の確保は、言ふべくして、決して容易なものではなく、ヒマラヤの景色をのんびり觀賞して安閑としてをられるやうな、そんなのんきな国情ではないのである。

だから、英字新聞「新興ネパール」は、この期に、何故この国が多額の経費を使つてまでして戴冠式を行なふ必要があるかといふことについて、連日キャンペーンを行なつてゐたのである。趣旨は、国王によるネパール国家の強固な統一と民族の協和がもとめられることの緊要性は、今日を置いて他にないのだといふことに尽きてゐた。

四月廿五日の夕方には、外国賓客とのお別れ会が王宮の庭で行はれた。その時若き国王は異例ともみられる挨拶をなされた。それは一国元首による外交上の路線の宣言とも私にはうけとられた。イギリスのイートン校で教育をうけられた国王のスピーチは、きれいなキングス・イングリッシュで見事であつたが、その眼目とする訴へは悲壮にすら響いた。その時の国王のお顔は心なしか青白く私にはうつつた。

わがネパールは、どの特定の国とも同盟を結ばない非同盟 (non-alignment) の政策を堅持します。それは平和への期待に光明を与へるからです。ネパールは身の保全のために平和を欲します。独立のために平和が必要です。また国の進歩のために平和が必要なのです。

この時はつきりとインド及び中国の名があげられたことが今も私の耳に残つてゐる。「世界の友よ、どうかネパールの独立と平和のために見守つて欲しいのです。力をかして欲しいのです」と。さう懇願されてをられるやうなお別れの挨拶であつたのである。私は思はず涙ぐんだ。

しかし、私が帰国して日本の各紙をみた限りでは、さうしたネパールの悲願に近い思ひはどこにも報道されてゐなかつたやうである。却つて「ヒマラヤの王朝絵巻」といった式の大きい見出しで、ダイヤモンド、真珠、エメラルド、極楽鳥の羽などをちりばめた時価六億円もする王冠であつたなどと、あたかも昭和の今日に、お伽話を絵に見るやうな傍観的な興味本位の報道であつた。報道陣の前に王朝絵巻の庄巻とうつつたのは、次のやうな状況であつたらしい。

バラモンの高僧が「国民の繁栄のために汝に戴冠する」と声高々に誦すると、国王は「国民の繁栄のために我れ王位に就かむ。我れは雫しずくのやうに親しまれ、太陽の如き友人とならむ」と宣言されたことであつた。また国王の正式称号として「ビシュヌビシュヌ（ヒンディ教）であがめられる三柱の主神の一」の化身であられ、王者の中の王であられ、五倍も信心の

深い勇敢な戦士であられ、且つ神聖な皇帝」といふ最高の称号が高僧からさづけられたことであった。更には、黄色の縹しゆす子で出来た帽子に白衣をつけた僧や各階層の代表者達の手によって、聖水、純正バター、ミルク、凝乳を国王に注ぐことであつたり、「国王こそはネパール支配の子宮、臍の緒である」と八十行の詩を高僧が読み上げることなどであつた。

しかし、このやうに世界に例外的に現存する民族宗教としてのヒンディ教式の戴冠式が、世界における国王即位式一般に比べてどんな意味をもつものなのか、何も問はれてはゐなかつた。本誌の編輯者が私にもとめるところはこの点であつて、さすがと感じた次第である。

(2) ホーリ祭と「どんど焼き」

首都カトマンズはカトマンズ盆地の中心に位し、およそ標高一二〇〇メートル。このカトマンズ平原の気候は、二月から三月にかけては平均温度が華氏の七十五度で日中は暑からず寒からず、夜分は多少電気ストーブを用ひればすむほどに爽やかである。将に春の終

りから初夏にかけての季候と見てよく、この点、陸続きのインドやチベットとは全く別天地である。

亜熱帯に属するとはいへ、この時期は爽快である。不思議と国家の公式行事はこの期に集中してゐる。一九七〇年の皇太子御成婚式が二月二十七日から三月三日にかけてであつたし、この度の戴冠式は二月二十四日を中心とする数日であつた。それには理由のあることだと思つた。

第一に、ネパール王室に所属するバラモン僧の「星占ひ師」がこの期間に公式祝典日を占つて決めてゐるのであるが、それは表面上の動かし難い理由となつてゐる。あたかもわが国で、古くは祭日、祭場などを一つ一つ占つて決めたのに似てゐる。それが繁雑のため、上古以来、一定の時期と場所に、つまり祭日と祭場が固定される傾向に日本ではなつてきた。だがネパールの場合は、「星占ひ師」が依然としてこの期を卜定してゐる。ただし卜定するにあつて、強くこの時期を選ばしめるに働いたと推測させる自然的、また歴史的の二つの事情がこの国にはあるやうに思へた。

その一つとして、伝統的な八日間にあたるホーリ祭と呼ばれる祭が毎年二月末から三月

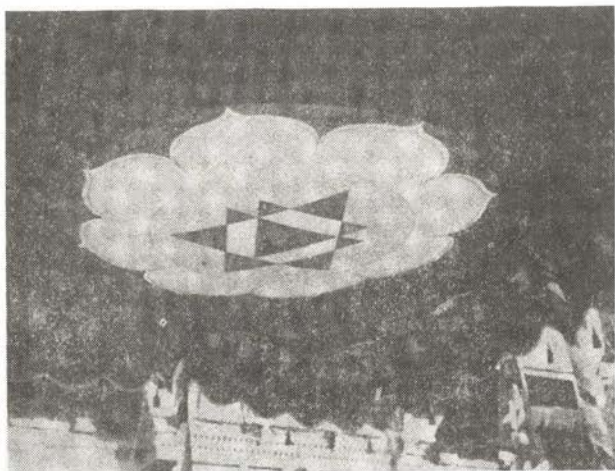


(第一図)

にかけてこの期にあることである。

このホーリ祭 (Holi, Festival of Colour) は、定義通りには「色彩の祭」であるが、実質は「春の復活祭」「正月」であり、「水の祭」なのである。

この祭の第一日目に、カトマンズにある旧王城の「王冠の間」の前に、三層の、数々の色で色どられた「縁ゆちで飾られた傘」が置かれる。さて、この旧王城は、あたかも江戸城に対する京都御所にあたる。現在、王家一族は鉄筋コンクリート造りの新王城に住んでられるからこの旧王城で古式にのっとった戴冠式が行はれたのであった。何故なら、この旧王城の中庭には、あらかじめその上に玉座が



(第二図)

置かれる目的で造った「石造りの壇」が恒常的にしつらへられてあるのである。この度のやうな時は写真で見てわかるやうに、この「石造りの壇」を天幕でおほふやうにするのである(第一図)。

注目されるのは、この天蓋の中央に、八葉の蓮の花の花卉が描かれてあって、更にその真中に、特殊な三角形の組み合せ模様が描かれてあることなのである(第二図)。この模様は、インド教で考へてある宇宙の中心をシンボライズしたものらしい。どのやうにたどっていても、終りが無い。そこでものの始めを図式化したものである。

この宇宙の中心部を象徴した天蓋の真下に置かれた玉座に新皇帝がお坐りになるのが、そのことは、ネパール国の、この場所こそは宇宙の中心であり、その宇宙の中心にふさはしい支配者になるといふことをあらはすやうに受けとって誤りなささうである。

さて、「王冠の間」の前に置かれた色々美しい縁飾りのある「三層の傘」はホーリ祭の終る八日目に、たたんで他の場所に移され、焼かれてしまふ。この焼却は、旧い年が去って、より豊かな新年の到来を象徴すると信ぜられてをり、わが国の一月十五日に行はれる小正月の「どんど焼き」に似てゐると思つた。「どんど」は、「どんどん焼く」ことの約まつた語であらう。

ネパール式「どんど焼き」は王室の公式的な行事だが、一般の庶民は必ずカトマンズ市を囲むやうにして流れてゐる聖なる川、バグマティ川を拝みに行くのである。

そしてこの川でゆあみし、赤く色のついた水をお互ひにかけあひ、赤い色のついた米を投げあひ、更に顔の額に、姉妹が男の兄弟に赤く色を塗りつける。この額の赤はライカといふ。この国では、赤は幸福をあらはす色である。

全体としてこのホーリ祭についていへることは、聖なる川と、赤色と、女性と、旧きも

の焼却と、新しきものの燃焼と、それらを関連させることによって冬からの新生の甦りと、人間生命の復活を祝ふところの新春の、正月の祭りだといふことであらう。その場合、水と火と赤色のもつ復活の力が、信仰的に大切な役割を果してゐるやうに見える。このことは、戴冠式において、新帝の位に就かれるに当って水の復活力が大きく宗教的に働いてゐることとも関係して考へる必要がある。

(3) 王政復古の成就と近代ネパールの誕生

第二に、「星占ひ師」の卜定にあたって、大きく考慮すべき条件として彼の意識にのぼつたであらうと思はれることがある。それは、この二月といふ月が、現在のネパール王室、シャハ王朝にとつて忘れることの出来ない王政復古成就の月だったといふことである。

「星占ひ師」の決定といへば、いかにも前近代的にうけとられ勝だが、よく分析してみると、このやうに国土的自然的条件からも、歴史的伝統意識の上からも、充分納得の行く決定であることがわかつて、星占ひといふ一見非合理的判断と思はれ勝なものが、実は合

理性の枠の中にきちんと位置してゐることに驚かされる位なのである。

現王室の先祖は、インドのグルガ地方を本拠とする土侯（ラジャ）で、その名をブリテ
イブ・ナラヤン・シャハと申し上げた。一七二二年生れの若いこのシャハ王は近隣の西ネ
パールに割拠した他の土侯達を征服して、今から二百年程前の一七四二年に一王国を建設
したのである。そのシャハ王が、カトマンズ平原に侵入するやうになつたのは、インド全
域に侵透してきたイスラム（回教）勢力の圧迫をうけて、移住をやむなくさせられたから
である。

若いシャハ王にひきゐられたグルカ兵はインド・アリアン人種であり、インドの民族宗
教であるインド（ヒンディ）教の信者達である。このシャハ軍が、既にカトマンズを支配
してゐたネワール族（西南チベットのモンゴロイド人種とインド・アリアン系の混種）の
マルラ王朝（仏教を信仰してゐた）を亡ぼしたのが一七五七年である。

このナラヤン・シャハ王から数へて、現在の皇帝は十一代目である。現国王の父君（第
十代）の時代から王妃は唯一人ではないが、古くは第一号、第二号夫人の二人であつ
た。

このため、第五代の国王の時、世継ぎ問題が起き、王室の分裂を来す原因を生んだのである。世継ぎ問題は御多分に漏れず、第二号夫人が自分の生んだ王子を皇太子につけむとして、第一号夫人の生んだ皇太子の暗殺をたくらんだのである。第二号夫人が殺し屋にやとつたのが、後に実権を握るやうになるラナ將軍であった。

王室のこの乱れに応じて、ラナ將軍はシャハ王家を完全にロボット化し、一八五〇年頃までは完全に王室に代ってネパール支配の実権を握ってしまった。丁度、徳川幕府にあたるラナ幕府が成立してしまひ、王室は名のみで実は無きに等しくなってしまったのである。

ラナ幕府の勢力をもつてすれば、シャハ王家を滅ぼし、代って王位に就くのは易々たるものであった筈なのに、何故かそれが出来なかつた。その根本の理由は、古くグルカに伝はる伝統の信仰があつたからである。それはカースト制度によつて、クシャトリア（武士階級）の最上位「タクーリ」の出身でなければ王位に就けぬとされてゐたからである。ラナ將軍は、このタクーリの出身ではなかつたからマハラジャ（大臣家）の位置に止まらざるを得なかつた。ラナ將軍の勢威をもつてしても王位を奪ひ得なかつたのはこのカースト

制を破り得なかったことと、インド教の主神の一つであるヴィシュル神（世界を支持する者）の化身が国王であるといふ、文字通りのネパール式「現人神信仰」があつたのであつたのである。

閣僚は全部ラナ家から出る始末で、ラナに非ずば人に非ずの世を現出してゐたのである。現皇后もラナ將軍家の御息女でいられる。

ラナ幕府の独占支配と圧制に対する反抗はなかつたわけではなかつた。あたかも幕末の小規模な勤王運動に似た討幕の動きがあつて、犠牲者も出てゐたが、決定的なことは国王一家の国外亡命事件であつた。

私が手に入れた、コリン・シンブソン著『カトマンズ』（一九六七・英文）には、この間の事情が詳しく書いてあり、夜を徹するのも忘れて興奮しながら私はホテルでこれを読んだ。事実は小説よりも奇なりとはこのことかと、痛感させられたことだつた。平和な万年雪をいただくヒマラヤの山麓で、権力をめぐる人間の闘争と憂患が繰りひろげられたことを知つて興奮しない方がどうかしてゐる位である。

第九代トリブーン王の皇后は持病の神経痛で悩んでをられた。そこでオーストリアか

ら、エリカ・ルフダといふ名の女マッサージ師が宮廷に招かれたのである。

彼女こそは、宮廷の内部にあって王の深慮遠謀に加担する唯一の味方であった。王の身辺には常にラナ將軍差し廻しの看視の兵の眼があつたからである。

この看視を避けて、一九五〇年の冬、いやしい身なりの一人の男が宮廷を出て、道路上で何者かと会合した。この男は、誰あらう国王であり、道路上に王を出迎へた人はインド大使であつた。二人の間で何事か確約されたのである。万事は女マッサージ師がとり運び、お膳立てしたことであつた。

このことのあつた同じ年の十一月六日、虎狩りの許可をラナ將軍から得た国王一家は、車で王城を出た。ところが車は獵地に向はず、一気にインド大使館に入ってしまった。出迎へたインド大使は

「陛下の願ひは全部聞き届けられました」

と申し上げ、大使館の奥深くに招じ入れたのである。同乗の兵は手出しができず、急ぎ返つて、事の次第をラナ將軍に報告した。

激怒した將軍は兵をもつて大使館を囲んだ。国王一家の引渡しが終わるまで、商人の出入

りは一切差し止められ、兵糧攻めにかかったのである。そのことのあつてから四日後インド兵に護衛された国王一家は、カトマンズの臨時飛行場へ車で向つた。

ご一家は国王ご夫妻のほか、皇太子（前国王）、皇太子の御子（現国王）であつた。飛行機はインド政府によって用意され、ニューデリー空港にはネール首相が直々にご一行をお迎へ申し上げたのである。

ラナ將軍は直ちに會議を開き、トリブーハン王の廢位を宣言し、皇太子（前国王）の次男ギャンネンドラ王子を国王とすることを決めたのである。この王子は前国王の弟君で、当時僅かに三歳であられた。何の手違ひか、国王一家脱出の時一人宮城にとり残されてしまつてゐたのである。

心あるネパールの人士は、このラナ將軍の横暴を容認しなかつた。ここに、インド国民會議派の刺戟を受けて成立したネパール国民會議派を中心とするラナ幕府打倒運動が展開されることになる。ところが首謀者は捕へられ、刑場の露と消えた。かうしたネパール国内の状勢に呼応するやうに、インドのネール首相が国王の帰還についてラナ將軍と交渉を始めたのである。

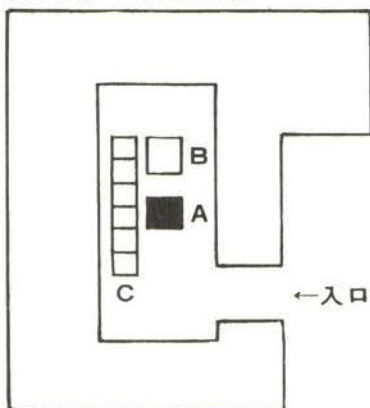
ラナ將軍が条件をのんで国王の復位を認めたのが一九五一年の二月である。かくて新生ネパールの夜明けは始まった。

だが、明治維新と異なり、インドの海外勢力をバックとしてのネパール維新が、その後のネパールの維持と独立に微妙な国際状勢の転換によって大きな影をおとすことになるのはやむを得ない事態であった。

それにつけても、薩長の背景にあったイギリス、徳川幕府の後ろ楯になったフランスといった西欧列強の海外勢力の侵入を阻止し、薩長も幕府もない公——天皇様を中心とする日本の本来の姿に立ち返ることを説いた勝海舟と、その経綸に共鳴した西郷南洲——それは世間がいふやうな個人的な腹芸でなく、天皇日本の大義をこの期に自覚したよい証左で、それがために日本のみ、アジアにおいて西欧列強による併呑といふ毒牙を免れ得たのである。同じ維新でありながら彼我の事情はかくも違つてゐた。

兎もあれ、自然的にも歴史的にも最もふさはしい条件のそろつた二月に戴冠式は行はれたのである。

(第三図) 旧王城



- A=石の壇
B=至聖所のテント
C=各国代表国賓席

儀式の行はれた旧王城は、もともとチベット系マルラ王朝のものであった(第三図)。この中庭に玉座のおかれる「石の壇(A)」があることに既にもふれたがこの左側に(王城の入口から入れば奥になるが、各国代表・国賓の着席される場所(C)が正面になるので、ここから見て左側となる)「至聖所」(The sanctum sanctorum)のテントが臨時に仕上げられ(第三図の(B))、その中央に腕の長さ程の祭壇が用意されるのである。この祭壇が文字通りの至聖所である。ここでインド教式の宗教儀礼が行はれる。強ひて言へば、さ

(4) ネパール戴冠式——その宗教儀礼——

しづめ、この至聖所のテントは大嘗祭の時の悠紀殿、主基殿にあたるかもしれない。

さてこの文字通りの至聖所の祭壇の上におかれた供物皿に、果物や花や、その他貴重な供へもの（山羊や羊などの肉も含まれるらしいが、正確なところはわからない）が供へられる。日本流でいふ山の幸、海の幸といふところであらう。次にバラモン僧の一団が最高位の大僧正に導かれ、それぞれの錦の僧服に着飾って、聖なる火のあかりを持ってそれらを聖なる水の入った壺に近付けて置くのである。壺に入った水は聖なる川々から汲みとつたものである。この聖なる壺は幸福と繁栄の神ガネツシュ（象の頭の神）に近付けて置かれてある。

これから見ればガネツシュの神を囲んで水と火の神が集まった形にうけとれる。

そこでバラモン僧達がインド教の諸神の加護を祈ってインド教最古の聖典ヴェーダに見える神讚美のことはを唱へる。その神々とは、創造神ブラフマとその妻神、保持の神ヴィジュとその二柱の妻神サラウァティ（文芸の女神）・ラクシミ（富の女神）、マハデバ（破壊の神）とその妻神・パルウァティ（女性の美德と義務の女神）、それから無慮三千三百万の神々なのである。

そもそも戴冠式にあたる英語のコロネーション (Coronation) は、「聖なる水をふりかける」ことを意味してゐる。サンスクリットでは、これに当る言葉としてラジャ・ビセク (Rajya-Bhisek) がある。ラジャは王国を意味し、ビセクは「水をふりかける」意である。

旧約聖書に見える古いユダヤでの戴冠式はソロモン王の場合、都エルサレムの聖なる水の湧く場所で行はれてをり水によって清められ、王にふさはしい神聖な身体になることが世界通有のことであるらしいことがわかる。

それで、戴冠式の核心部はと言へば、それは前段階の神への加護を乞ひのみまつる祈りと儀礼のあとに続くところにある。それは主として、聖なる水と聖なる土を新王の身体にふりがける秘儀なのである。

この場合の土は、川の合流点にあるもの、雌牛小屋に出来たアリ塚のものなどはせて十二ヶ所ときまつてゐる。また聖なる水は、十八種類の水で、それぞれがった飾りの壺にをさめられてゐる。その中には、太平洋、大西洋などの大洋の海水、また川の支流、小川、湖、特に北向きに流れる川の水、太陽によって温められた水、しづく、といふやうに

きまつてゐる。

かうした土や水をふりかけられることは、土と水に代表されるこの世の地上のあらゆる靈力を一身にうけ、いはば国の魂を身体にいこめられることを意味しやう。一つ、天つ神の魂を身にうけることが儀式の上からは欠けてゐて見られない。それがよい証拠に、インド教の聖典は各所で地上の土と水をあがめることで充ち満ちてをるが、とりわけ「母と誕生地は天よりも偉大なり」とすら言ひ、地上の靈力に固定するところが見られる。

この観念は、天をかしこむより、地上を大事にすることであることがわかるやうな気がする。

土と水を一身に浴びて、宗教的に王にふさはしい身体となつた国王は、かくて石の壇^①の上の玉座に着くのであるが、玉座の下には狼、山猫、ヒョウ、獅子、虎の皮が敷かれてゐる。つまり、地上の最も荒々しい野獣を腰の下におさへつけてしまふ形である。

以上のことを全体的に綜合して見るとかうなる。

「あらゆる地上の力を一身に集め、あらゆる地上の他の力にたちまさる征服王になる

こと」

それが戴冠式の本義だといふ印象がネバールの場合は強い。

(5) 天皇即位、大嘗祭の本義から天皇陛下の本質に及ぶ

紙面の関係で要点をあげると二つとなる。その第一は、天皇様の御即位は、天つ神の神意を畏こみ、うけたまはって、文字通り「神のことば」を實踐する「み言ことば持ち(宰)」となることであつて、天下にほどこしてもとらない広大な恩恵をこの世に實現する人格となれることである。

田中初夫博士の高著『踐祚大嘗祭—研究編—』(昭和五十年五月、木耳社刊)によれば、悠紀殿、主基殿における調度類の性質から推測して「一の神座」は「一柱の神が御休寝なさるところ」であり、この一柱の主神が「二の神座」でお食事をなさると見られる。この場合、天皇様は直々に主神に御給仕なされる。この一神の主神こそは、誰あらう天照大御神であらせられる。

してみると、陛下は、余人をまじへず、この天つ神に独り対面なされ、御接待申し上げるといふ、あたかも子が親に仕へるが如くに、天つ神に仕へまつられ、このやうに仕へま

つることが、中津国地上における「まつりごと」の本質となるといふ姿をお示し下されたものと拝察されることである。

第二の点は、世界のいかなる国王の戴冠式、即位式を見ても、必ず何がしかの宗教家が仲立ちの役割をし、王冠はこの宗教家によってきづけられるのだが、わが国のみはそのやうなことのないことである。

この点について西郷信綱教授は、その著『古事記研究』で次のやうにふれてをり、私は出色の論としてこれを高く評価することを惜しまない。いはく

「ヨーロッパのもろもろの王たちはキリスト教の波及とともに、いち早く改宗し、キリストの僕として「神の国」を実現すべく使命を与へられた。……戴冠式で主導の権を握るのはあくまで教会であった。」

東南アジアの代表的王権であるシャムやカンボジアの王権の即位儀礼も、ブラーマンの手で行はれ、また仏教の僧も参加した。……さういふなかにあって日本では仏教が王権の主たる祭式の本質にはほとんど一指もふれることができず……」

と。即位儀礼に異教の宗教家がタッチしてゐないのは勿論、一番肝心の、天つ神との御対

面、御接待など、直接の神と陛下の出合ひには、神官といへどもこれにタツチしてないといふことは何を物語るのであらうか。

これは一言にしていへば、

天皇さまこそは神に仕へられる大祭主であられ、決して地上の征服王ではあられないといふことであり、最も天つ神に近くに在られる御人格として、人間の極みにおいて最も神にお近き人

であられるといふことである。そのやうな御人格を古くから「現人神あきつみかみ」と尊称しまつたのである。

(『瑞垣みづがき』第百六号、昭和五十年十月、神宮司庁刊所載)

第三章 大嘗祭——伝統の秘儀の発見と創生——

附・奉祝歌五首

(編者註) 本章は『即位の礼と大嘗祭』(平成二年四月・生田神社刊)所収の「天皇靈をめぐる心の疼うづき」及び『日本の息吹き』三十号(平成二年三月・日本を守る国民会議刊)所載の「伝統の秘儀」に加筆して成ったものである。

「歴史は何時も否応なく伝統を壊す様に働く。個人はつねに否応なく伝統の発見に近づくやうに成熟する。」

小林秀雄は、「故郷を失った文学」にかう書いた。同じことが、一文学のみならず、日本文化の根幹をなす感性の表現たる日本人の諸々の営みについて、言へるやうに思ふ。その端的な現れが、平成二年・秋に予定された今上天皇の、即位の大礼・大嘗祭についてな

された各様の見解表明を集約するところにみられた。

この一世一代の重儀にみられる伝統の重さを、大きな自覚と悦びをもって受けとめる者のみが、正しく「伝統の発見と創生」に参加でき、日本人の営みの真実を生きたことが出来るのではないのか。伝統の発見と創生が、最も奥深い根底において、いかに個々の吾々の生存にとって、欠く可からざるもののかを学ぶ、こよなき機会を迎へた今、切実に思はねばならぬ。

日本人になるか、否かは、個々人を統合して、日本国民といふ全体の包摂心情に燈をとす唯一の存在——天皇といふ至高の御存在を仰ぎ拝する絶頂体験に根ざす。かく断言できるのは、天皇陛下の憲法上の規定である象徴天皇の「象徴」をば、ごく平明に解すれば足りる。「一をみることに於いて全体をみる事ができる」といふ——このことを現前するそもそのもの、その「一なるもの」こそが象徴であることは明瞭ではないか。

私は憲法学者ではない。しかし、ごく常識的な人文現象を研究する一学徒として、私には、象徴天皇の象徴性は右のやうに理解せられるし、それで納得するのである。

そこで、深思すべきは、「皇太子」である大御身が「天皇」といふ実質の御人格に昇華

し、至高の人（靈止^{ひと}）に成らせられることは、単なる公示のセレモニーで果される、といったものでは断じてないといふことなのだ。それが大嘗祭なる伝統の秘儀によることを不可欠としてゐる所以であらう。

大嘗祭は、新嘗祭の延長線上に、ただ一世一代の重儀といふことで解せられるべきものではない。かつて齋行の場が大内裏の正庁・朝堂院か太政官院か、に於てであり、嚴修さるべき祭儀は、内庭の神事と際立って異なる国家的齋行である。次に奉祀者が新嘗祭の場合の「所司」に対し、「国司」である。かうした奉祀者構成の相違にも着目して、以上二点から、かつての大嘗祭の国家的性格を簡潔に説述した高森明勅氏の高論（中外日報、平成元年十一月八日・九日）はこの期にあつて貴重である。

併せて、平野孝国氏が、天皇があらゆる神（天神地祇）をお祀りし得る聖なる御資格を獲得せられるのは、大嘗祭における悠紀・主基両齋国の国魂（全日本の国魂を集約）をば玉躰に馮依されることによつてのことであり、それによつて完全に達成し得られること。かくて、国全体を包摂し、しろしめし、うしはくことが可能になるといふ学的分析の上に

立つての推論（『大嘗祭の構造』一二〇頁）は、大嘗祭の国家的意義を宣示する上でやはり今日の意味があると感じた。

そこで、私個人の問題意識について一言しなければならぬ。それは、天皇におかれての聖性賦與の根幹とも申し上ぐべき「天皇靈」についてである。国学院大学に赴任して、折口信夫博士を識る御縁を得た私にとって、博士の『古代研究』、就中、その中の「大嘗祭の本義」は、神話にまでさかのぼる日本人の垂直的信仰表象に、私の眼を開いていたのだ。いた記念すべき文献である。それは「仮説」としてとどめておくには余りに生々しく、私に生きづいた。そして、機会あれば、その具証例を文献に見出し得たらと、血気にはやつた位である。

九世紀中葉（貞観年間）には、天皇の玉躰に天皇靈をむすばれる神秘的秘事があったと推測される記録を眼にしたことがある。紫の幔幕の外で、神祇官が樽の上に乗って、棒で樽を一二三と突く。その音にあはせて、他の神祇官が「糸をむすぶ」。この「糸結び」は、幔幕の中に置かれた「衾」に霊を結びつける秘事であることは明らかで、一種の模倣呪術かと思つた。今、体の具合が極度に不調であるため、その文献を正確に引用し得ぬことを

お許し願ふほかはない。

しかし、一方で、岡田精司氏の考究、即ち、大王就任儀礼の原形には、問題の聖性賦與の性格が明確でなく、聖婚説を以て理解せらるべき性格のものとの厳密な研究（『大王就任儀礼の原形とその展開』『天皇家代替り儀式の歴史的展開』所収、一九八九年一月）に接して、私は、折口博士のそれが「詩人の直観による発想が基礎になってゐる」（前掲書・一三頁）ことの意義を強く改めて深思するやうになった。折口説は、余りにもわれわれの憧憬を喚起してやまない信条——天皇靈信仰とも呼んでよいやうな情念を、文献資料的研究の成果にかかはりないところで、しかし如実に今も燃え上ることを日本人として告白せざるを得ない気持ちに駆り立てゝゐるのである。そのことを一層痛感するに至った。

およそ、秘儀なるものは、その秘儀性の故に文献に顕在化することを堅く閉ざしてやまない。しかし、天皇と称せられる大御身（靈止^{ひと}）に、靈性賦與が不可欠であることは疑ひないところであるとすれば、その不可欠の本体を秘儀たる祭儀の何処に求めるかは、正しく道統を直視してやまない学徒の、直観に映じて反応するであらう。折口説は、その意味で、こよなく秀れた詩人的直観の持ち主であったと私は追懐してやまない。

吉野裕子は、「貞観儀式大嘗宮全図」から大嘗祭の祭屋の配置、祭行の日取り、時刻等を併せ考へ、第一神座が「皇祖・天照大神と太一（天地を包括する最高原理）」と天皇霊との三位一体」のものであり、第二神座は、「現し身としての天皇」の御座であると推論し、この「現し身としての天皇」が、祀るものであられ、第一神座の三位一体神である「天皇霊の継承者として、祀られるもの」となると推及してゐる。これにいたく心ひかれるところがあつた。

たまたま平成元年十一月二十二日の報道（産経新聞）は、天理市の赤土山古墳から、主体部とは別に、「造り出し」とみられる祭壇と陪葬墓の発見を報じた。この祭壇は、主壇の被葬者と関係の深い者が、死者と魂の交流をはかる、つまり、王位の継承を行ったとみられる可能性があることを、橿原考古学研究所・総括研究員の河上邦彦が語つてゐた。

してみると、王位継承の前段階といつてよくはないか。兎も角、死霊祭祀にかかはつての天皇霊の授受といふことを想定することが許されるかもしれないのである。岡田精司氏は考古学者の間で、大嘗祭を古墳祭祀や人物埴輪と結びつけて論じる傾向を慎重に批判し、古代の葬制と神祇祭祀とは別個のものである（前掲書・四六頁）としてゐる。され

ば、私如き専門外のものが、言及し得ぬところであることを重々承知しながらも、尚、天皇靈問題を思ひつづける私の心の一角に消えずして残るものがあるのは、いかんともしがたい。

文献資料にもとづく実証的な史実の真偽判断と、このやうな基盤を目下のところ、もたうとしてももち得ないところに、生々しく息づく信仰事実の価値感との間に、微妙に心がうづく今の私なのである。

大和国をうしはく、すめらみことのまつりごとは、一瞬一時の空位も許されないから、先帝崩御のあと、即時に、天皇の御位の象徴である三種の宝器が新天皇の御許に遷御あることは当然である。しかし、私の推しはかるところでは、先の天皇の身辺に日夜あられた「珠」の遷御を以て第一の重儀とせられたことが在り得たのではなからうかと思ふや切である。「もの」としての「珠」、或いは「玉の筥」は、明らかに、天皇を天皇たらしめる「たま霊」を表象する。この霊を天皇霊であると呼ぶことに抵抗はあるまい。

従って、新天皇たるの継承秘事は、第一義的にはこれで完結した筈であるとみられよ

う。然るに、その後、踐祚即位礼と大嘗祭とが厳修されるのは、屋上屋を重ねることになるのではないか、との合理的見解も成り立ち得よう。

しかし、これを後者に限って考へるならば、天皇霊の出身源泉たる高天原から、天照大神をこの地上に迎へ奉り（第一神座）、天皇霊そのものの新たなる増殖をはかり、天皇霊のより更なる活性をはかること（第二神座）は、新天皇の登極にあたっての不可欠な秘事としてあり得たのではないか、と思はれてならないのである。

新憲法の規定する「天皇は国家統合の象徴である」との文脈における訳語「象徴」を眼にして、私は、社会学者・デュルケイムが、かの『宗教生活の原初形態』で用ゐた、キーターム「象徴」の意義を強く聯想した。

ここにあっての「象徴」は、「そのものを見、感ずることによって全体を見、感ずることになる、その当のもの」そのものなのである。してみれば、象徴たる天皇は、国民にとつて、天皇を見、感ずることにおいて「日本国全体を見、感ずる」ことになる、或る種の国民儀礼の中心的対象でもあるのではあるまいか。デュルケイムが掲げた「チュウリンガ」なる象徴物が、宗教的象徴性をもつやうに、象徴天皇たる所以のものが、或る種の聖

性の根拠をもつことなしには在り得ないと信ずるが故に、この聖性の根源こそ、天皇靈であられるのではないかと信ずるのが私の見解である。

新憲法草案に当った当事者の一人として、金森徳次郎博士が、「国民にとつての憧憬」といふ「あこがれ論」で以て議論をかはしたのは、今となつては、当時の状況下、極めて苦心した博士の法律的情操論であることがはつきりしてゐる。しかし、そこには、肝腎の、象徴を象徴たらしめる宗教的根拠が不在のままにされてしまったと思はれる。

以上は、全く、私の個人的思ひはかりであり、客観的文献資料をくまなく眼くばりした結果としての、帰納的根拠によるものではない。ただ、国民の一人として、この期に、その信条を吐露する自由を得ることによって、心が安堵するといふ、このいつはらぬ現体験を卒直に告白することが出来る。さうしたことは、望外の仕合せといふべきであらう。

奉祝歌

神ながら天つ日継のすめろぎは現つみ神とをろがみまつる

神つ世の天照らす神のみこともちいや尊かり仰ぎまつるも

平成のみかどの君は日の本のみ臣われらをしろしめす君

とりわきて先のみかどの道をしも践みます御尊姿かしこききはみ

大嘗の秘めたる大きみまつりをしぬめば皇国のみ栄ひどきく

『千古の雅——御大典をことほぎて』平成二年十月・天皇陛下御即位奉祝委員会刊所載

あとがき（編者）

本書は、戸田義雄先生の講演・随想・旅行記等からの抄録により成り立っている。平成三年の初夏のある日、夜久正雄先生より、国文研叢書の一冊として本書出版の企画があり、就いては先生の御健康が勝れないので、小生に編集作業の実務をとのお話があった。

戸田先生は、国学院大学で卒業論文の御指導をいただいて以来の積年の恩師であり、夜久先生には、主に天皇陛下の御製等につき深い御学恩を賜わっている。微力ながらお役に立っているならとお引受けしたものの、いざ作業に取りかかると、後悔ばかりがつのつた。

先生の御研究の視野は極めて広く、そしてそれを支える情念は、烈しくも深い。その一端なりを、殊に若い方々にお伝えするためには、どのような編集をなすべきか、——どうして小生の手には余ることを、痛感しないではいられなかったのである。先生が御健祥であられ、逐一御指示いただけたらと思われないわけには行かなかった。反面、こうして先生の御著述を改めて熟読できる幸せを感じてもいた。今日の激動の世にあって、変わらない

新鮮な感銘を喚起してやまないこうした論考に触れられるこの喜びを、少しでも多くの方と共にし得るなら、この上ない幸せである。

収録論文の選択に当っては、国民文化研究会の小田村寅二郎先生、夜久正雄先生、長内俊平先生の御意嚮に立ち、戸田先生の御希望によったことはもちろんである。が、全体の構成・体裁などにつき行き届かない点があれば、その責めは編者が受けなければならぬ。

この意義深い国文叢書の一冊として本書が刊行されるにつけ、関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、先生の御健勝を心から祈念しないではいられない。

(永藤 武)

著者略歴

大正七年（一九一八年）東京に生まれる。旧制・新潟高校・文科甲類卒業。東京帝国大学文学部・宗教学宗教学史学科・同大学院卒。同大学・副手。助手。日本経済短期大学教授。国学院大学教授。同大・日本文化研究所員教授。東京大学・お茶の水女子大学・青山学院大学・大正大学各講師を歴任。

昭和三十六、三十八年ロックフェラー財団在外研究員（ハワイ大学・東西センター・アメリカ言語研究所。ハーバード大学。ミシガン大学。ケニヨン大学。所属）。現在、国学院大学日本文化研究所名誉所員。神社本庁教学顧問・文学博士。

著書

単行著

『日本の感性』日本教文社

『宗教の世界』大明堂

『宗教と言語』大明堂

『宗教史概説・第一部』神社新報社 他

監訳書

『医学と哲学を結ぶ実存心身医学入門』丸善

編著

『日本におけるマルクス主義批判論集』国民文化研究会 国文叢書No.17

『日本カトリシズムと文学』井上洋治・遠藤周作・高橋たか子―大明堂

『隠れた信仰次元―日本キリスト者の底流―』大明堂

共編著

『日本人と讃美歌』櫻楓社

『民族と文化の発見』大明堂

共著

『よみがえる三島由紀夫』日本教文社

- 『現代の思潮（下）民主主義論』中央書籍
『人間と宗教—人間の科学5』中山書店
『明治文化史・第六卷・宗教篇』洋々社
『宗教と歴史』山本書店
『神道の心』（国民神道叢書）国民思想社
『日本の息吹』日本教文社
『日本の心』東京国文社
『戦後と反体制』櫻楓社
『戦後教育太平記』日本教文社
『神国の理想』神社本庁
『昭和史の天皇・日本』日本を守る会
『日本の神道・第二卷』東京国文社
『日本の宗教』大明堂
『現代宗教思想のエッセンス』ペリかん社
論文
『黎明期の宗教学説』（『宗教研究』）他
『トインビーにおける神道観の展開』（『トインビー生誕一〇〇年記念論集—人間と文明のゆくえ』）日本評論社 他・多数

祖国と人類の悲願——諸民族の聖魂——

国文研叢書 No.33

平成四年三月三十日 発行

頒価 八〇〇円

著者 戸田義雄

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

〒104 東京都中央区銀座七—10—18
（柳瀬ビル）

TEL (03) 3572-1526 (代)

FAX (03) 3572-1527

振替 東京 七一六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二ノ四四
（石坂ビル）

(既刊) 国文叢書 (新書判)

No. 1	久原 正雄 著	古事記のいのち (改訂版) (原) 昭和41年・(改) 昭和48年	316頁
No. 2	高木 尚一 著	日本精神史の系譜 昭和41年	279頁
No. 3	小田村 寅二 著	日本思想の系譜 昭和42年	241頁
No. 4	小田村 寅二 著	文献資料集・上巻(古代・中世) 昭和42年	309頁
No. 5	小田村 寅二 著	文献資料集・中巻その1(近世I) 昭和43年	317頁
No. 6	小田村 寅二 著	文献資料集・中巻その2(近世II) 昭和43年	409頁
No. 7	小田村 寅二 著	文献資料集・下巻その1(近代I) 昭和44年	403頁
No. 8	小田村 寅二 著	文献資料集・下巻その2(近代II) 昭和44年	381頁
No. 9	小川 井修 著	歴史と人生観—マルクス主義の超克 昭和43年	283頁
No. 10	小田村 寅二 著	欧米名著邦訳(明治)集と文獻資料集 昭和45年	483頁
No. 11	桑原 暁一 著	日本精神史抄(明治)集とその系譜 昭和45年	310頁
No. 12	久正雄・山田 輝彦 著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 昭和46年	309頁
No. 13	夜久正雄・山田 輝彦 著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 昭和46年	316頁
No. 14	桑原 暁一 著	マルクス主義批判論集 昭和48年	338頁
No. 15	夜久正雄 著	マルクス主義批判論集 昭和49年	324頁
No. 16	桑原 暁一 著	マルクス主義批判論集 昭和49年	293頁
No. 17	戸田 義之 著	日本におけるマルクス主義批判論集 昭和51年	320頁
No. 18	三井 甲之 著	明治天皇御集研究(復刊) 昭和52年	354頁
No. 19	国民文化研究会編	いのちをささげて—戦中学徒・遺跡遺文抄 昭和53年	450頁
No. 20	国民文化研究会編	いのちをささげて—戦中学徒・遺跡遺文抄 昭和54年	421頁
No. 21	加納祐五・三浦貞蔵編	社会主義理論との戦い(山本勝市博士論文選集) 昭和55年	420頁
No. 22	桑原暁一・遺稿から	"とっちゃん"先生の国語教室 昭和56年	172頁
No. 23	小柳 陽太郎 著	戦後教育の中で 昭和56年	298頁
No. 24	山田 福彦 著	明治の精神—近代文学小論 昭和57年	335頁
No. 25	松田 久正 著	米英思想研究抄 昭和58年	270頁
No. 26	夜久 正雄 著	「しきしまの道」研究 昭和59年	320頁
No. 27	国民文化研究会編	戦後世代からの発音 昭和60年	350頁
No. 28	国民文化研究会編	戦後世代からの発音 昭和61年	357頁
No. 29	国民文化研究会編	戦後世代からの発音 昭和62年	279頁
No. 30	廣瀬 祐五 著	萬葉集 その漲るいのち 昭和63年	328頁
No. 31	加納 祐五 著	Belief that と Belief in 平成元年	276頁
No. 32	廣瀬 祐五 著	和歌と日本文化 平成2年	326頁

